

產政塾

XVIII



產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

- 産政塾 XVIII の発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会 東 正元

- 『産政塾を終えてく殻って何やろ?』..... 1

東邦ガス株式会社 饗場 祐樹

- 産政塾を振り返って..... 11

丸栄労働組合 浅井 克弥

- 産政塾を振り返って..... 19

東邦ガス労働組合 稲垣 隆宏

- 「今思ふこと」..... 27

トヨタ紡織株式会社 大倉 吉貴

- 一歩前進..... 37

名鉄労連 太田 洋純

●『産政塾』を終えるにあたり	アイシン労働組合	河野成康	43
----------------	----------	------	----

●産政塾を振り返るゝ印象に残った「ことば」	株式会社東海理化	北原航太	49
-----------------------	----------	------	----

●産政塾での「気づき」をいつまでも	豊田市役所	金原昭仁	57
-------------------	-------	------	----

●産政塾を振り返って	トヨタ自動車株式会社	作山淳	67
------------	------------	-----	----

●「三つのモットー」	松坂屋労働組合	佐藤正樹	77
------------	---------	------	----

●「産政塾を振り返って」	株式会社デンソー	島田裕毅	85
--------------	----------	------	----

●精神の大改革!!産政塾的ビフォーアフター	アイシン精機株式会社	白井雅子	95
-----------------------	------------	------	----

●「産政塾へ参加して」	トヨタ車体株式会社	鈴木雅司	103
-------------	-----------	------	-----

● たくさんの「殻」		109
------------	-------	-----

● 産政塾を振り返って		117
中部電力労働組合	高橋 弘行	

● 組織力×チームワークとリーダーシップ		125
デンソー労働組合	田 中 栄太郎	
中部電力株式会社	中 川 利 文	

● 産政塾での活動を振り返って		139
刈谷市役所	早 川 啓 太	

● 産政塾を振り返って		147
全トヨタ労働組合連合会	平 賀 隆	

● 産政塾を振り返って！		155
株式会社豊田自動織機	廣 田 真 朗	

● リスタート		163
丸栄労働組合	藤 田 茂 憲	

● 良き出会いに感謝		171
トヨタ車体労働組合	舟 橋 史 洋	

● 『もう1人の自分探しの旅へ』	豊田自動織機労働組合	古川 憲	179
● 前向きな姿勢			185
● 少年易老学難成	豊田合成株式会社	水野 栄	193
● 第18回産政塾に参加して	トヨタ自動車労働組合	森谷 東也	203
● 『18期産政塾の感想』	フタバ産業株式会社	矢野 悟	213
● 次世代を担う若者たちと接して	産政塾事務局	松井 英治	225
● 産政塾活動記録	塾長	東 正元	231
● 歴代卒業生			247

産政塾
XVIIIの発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第十八期の活動を修了し、今年も二十五名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、異業種の時代を担う意欲ある人材に、ご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルとは異なり、参加したメンバー達が自らの企画でテーマや講師を選び、現地に赴いて体験や教えを請うといったプログラムを組み、その中で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができることとなり、産政塾は言わば「自らを磨く道場」というようなものであります。

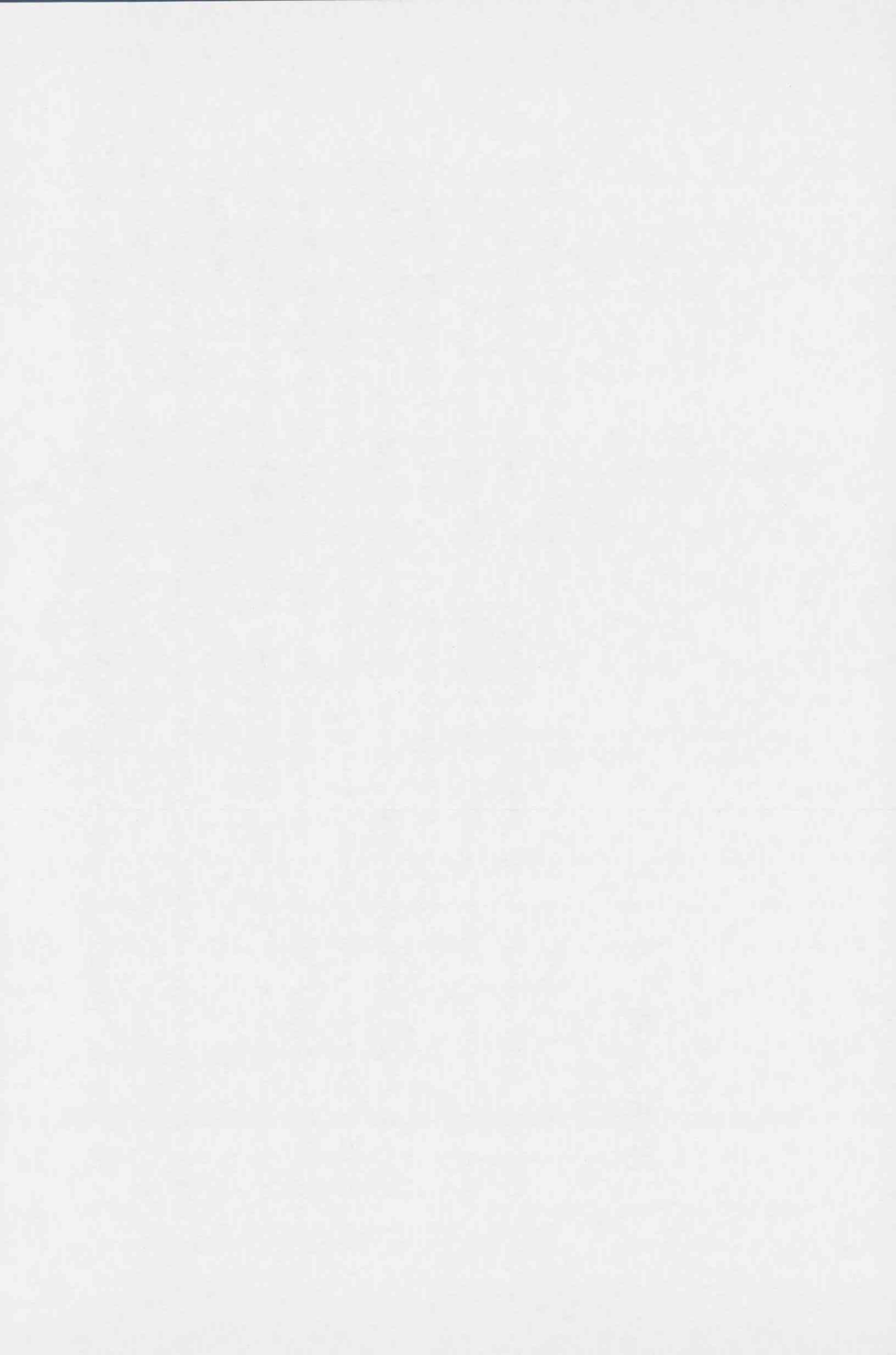
今回も産政塾への参加者は三十才前後の若者達であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期であります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして一年近くにわたる活動を終え、このたび修了いたしました。

第十八期にあたる二〇〇七年の活動では、塾生は各企画をよく練り上げ、「創造性」「独創性」「チャレンジ精神」に富んだ実のあるものにしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人一人が新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十八期生が産政塾での様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありませんが、こうした冊子を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様にご感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いです。



『産政塾を終えて ～殻って何やろ?～』



東邦ガス株式会社 人事部 人事サービス G

饗 場 祐 樹

《プロフィール》

あいば ゆうき (33 歳)

- 1974 年 5 月 滋賀県東浅井郡虎姫町生まれ
- 1997 年 4 月 東邦ガス株式会社入社
- 2003 年 11 月 人事部へ異動
現在に至る

〈趣味〉ゴルフ

1. はじめに(殻って何やる?)

産政塾の開塾式の冒頭でいただいたテーマが「殻の外へ踏み出そう」であったが、漠然としたテーマで、すぐに自分の殻とはいったいどういったもので何だろうと、自問自答していたのを覚えています。自分自身の殻とは、性格、それとも他者に踏み込まれては困る境界のようなもの、自分の限界、成長過程におけるハードルのようなもの、閉じこもるために必要な自分の居場所(心地いい状態・場所)、形は有る、無い? 厚みがある? 色は? 水のような、空気のような、そんな様々なイメージを浮かべていました。

そんなことを考えているうちに、産政塾が始まったように思います。そして、その殻を追求する企画が始まりました。そこで、第18期産政塾のそれぞれの企画に参加した私自身の考えを述べ、振り返りたいと思います。

2. 産政塾を振り返って

(1) 開塾式(第1回)

私は、入社し11年目を迎え、一度営業をやっていたこともあったが、短い期間で、現職場へ異動と

なり現在に至ります。どちらかというと会社内部の方との接点が多い職場で、外部の方との交流機会は少ない方でした。そんな中、この産政塾の参加が決まり、期待もありましたが、不安も大きかったように思います。私は、全く交流のなかった方たちと、どこまで分かり合えるものかといった気持ちで、開塾式当日を迎えました。

この産政塾の話をいただき最初に持ったイメージが、決められた研修内容の中で、他の企業の方々と、検討・意見交換をおこない、交流を深めて何かの答えを出していくというものでした。しかし、開塾式を迎え、概要説明を聞いてみると、グループに分かれ、それぞれのグループが、研修内容を企画して、参加メンバーを取り巻き、企画を実行していく。そして、決められたルールの中で、自由にテーマ・問題意識を抽出し、その答えを導き出していくといった、今までにはない研修の形だと伺い、本当にできるのか不安であったが、「殻の外へ踏み出そう」を合言葉に、お互いの考え・意見交換を始めることができ、私自身意欲的で積極的な気持ちになったことを覚えています。

② 豊田市中消防署を訪ね、「チームワーク、組織力を学ぶ」(第2回)

この企画は、18期生にとって初めての企画となり、私自身興味深くどんな形になるのだろうと、思っていました。塾生の皆さんもそうだったのではないのでしょうか。

この企画では、日本がここまで成長を遂げたのは、日本人のまじめさや相手を思いやる気持ち、チー

ムワークの強みがあつたからであり、その組織力には、何が必要であるかを学んだように思います。人命救助といった使命感に情熱を捧げる署員の方々の話を聞き、日常の訓練が現場での臨機応変な対応に繋がる。またそのチームをまとめるには、的確なリーダーの指示、それには経験や、組織全体の状況を把握する力、そして、メンバーを思いやる気持ちが兼ね備わつてこそ、初めて組織が、ひとつにまとまり、大きな力となつて、目的を果たすことができるのだと痛感しました。

この企画のねらいであつた、日本人の強みである、まじめさや相手を思いやる気持ち、チームワークの良さを認識し、こういった日本人特有の価値観があつたからこそ、日本という国がここまで成長してきたのだと思ひました。そして、実際の実習訓練（規律訓練、隊列訓練、高所でのロープ訓練等）で、チームワークの大切さを実感できましたし、職場においても、ここで経験したことを生かしていこうと思います。

（3）名古屋地方裁判所を訪ね、「非日常体験」裁判員制度について知る・考える」（第3回）

厳格な雰囲気の中、私自身、初めて裁判の傍聴をすることができ、この企画のテーマである非日常体験ができました。裁判の傍聴では、検事側、被告側の冒頭陳述など、神妙な面持ちで始まり、その判決を言い渡す裁判官の方々など、今でも目に焼きついていきます。裁判官から被告へ判決を言い渡す瞬間の、視線を合わせ、犯した罪の深さを論し語りかける姿は、感慨深いものでした。

私は、裁判の様子をドラマや映画などのイメージでしか持っていまいませんでしたが、これほど重みのある、また人の人生を左右する判断を下すといったはかり知れない責任を感じることができました。今後、平成21年5月までに裁判員制度がはじまり、国民の中から実際に裁判員として選任されるようですが、私たちが裁判員として刑事事件の裁判に参加し、判決を導き出さないといけないと思うと、裁判に対する今までの無関心さを改めなければならぬと強く思いました。また最近では、裁判員制度への国民の積極的な参加を呼びかける新聞記事を目にしますし、企業の立場からは、裁判に参加しやすい職場環境を整備していかなくてはならないことが理解できました。

(4) 海陽学園を訪ね、「グローバル化時代の人材育成について学ぶ」(第4回)

この企画では人材育成、将来のリーダー像とは、どういったものなのだろうと、考えることができました。事前段階では、隔離された施設の中で、本当に人材育成が可能なのか、また様々な変化が起こりうる社会の中で、その中で適応できる人材を育成できるのかと疑問をもっていました。

しかし、実際に学園内で事務局長様や関係者の方々の話をお聞きすることで、日本の若きリーダーの育成といった、人材育成に情熱を持っておられることがひしひしと伝わり、規律を重んじた全寮制といったシステム、授業風景や、生徒たちの姿(元氣な挨拶をする姿)をみて、それまでの私の固定観念は、いい意味で裏切られました。

学園内の生徒たちは、親元を離れ精神的にも不安定で多感な時期であります。ハウスマスター、フロアマスターの方々が、学力だけでなく、親代わりとして、生徒たちを本気で叱り、時には褒め、人間として大切なものを、自問自答しながら、情熱を持って教えている姿を拝見し、責任の重さを感じることができました。

この学園でいろんなものを見たり聞いたりする中で、人材育成や将来のリーダー像について塾生の皆さんと議論させていただきましたが、リーダーとは、様々な環境の変化に対応でき、多様な価値観を持ち、その中で適確な判断を下し、人をまとめることができる人がリーダーなのではないかと思いました。

(5) 屋久島を訪ね、「人と自然環境の共生」エコツーリズムから学ぶ(第5回)

昨今、地球温暖化に関する映画など、世界レベルで環境問題が取り上げられていますが、私自身なかなか身近に感じられませんでした。しかし、この屋久島を訪ねることで、当事者としての意識が芽生え、危機感を覚えるようになったのは確かなことです。世界遺産に登録されている屋久島では、自然の大切さや厳しさを感じることができました。樹齢数千年の紀元杉を目の前にしたときは、人間の存在を小さく感じ、同時にこういった自然環境を後世に残していくことが使命だと思いました。

島を支える産業は観光産業とのことです。観光産業といえど自然環境を破壊し、リゾート地到大

きなホテルを作り、利用者を呼び込むことで利益を生み出すといった印象をもっていました。しかし、ここでの観光産業は、自然と人が共生する中で、自然環境を維持・向上させることと、同時に観光産業を発展させるといった取り組みであるとうかがい、人々が助け合っていないと、この島では生きていけないのだと感じました。観光産業が発展する中で、現実には、し尿処理の問題などがあり、自然での人間の共生は、本当に難しく今後も真剣に取り組んでいかないと、すぐに自然が破壊されていってしまうのだと痛感しました。また、本当の意味で環境問題を考えるのであれば、自然の良さを知るだけではなく、現代の生活レベル水準が飛躍的に向上し、個人の都合、身勝手さ、価値観だけで自然を見たり、感じたりしていないかといった意識を個人個人が持たなければ、環境問題の解決にはつながらないと思いました。

屋久島では、自然のすばらしさ、厳しさを教えられ、人間が自然と共生できるのか、また共生していくためのバランスを考えさせられました。

(6) 郡上踊りを体験し、「日本の文化、人と人との繋がり『絆』の大切さを実感」(第6回)

この企画は、私の所属するグループの企画であり、18期生の最後の企画でした。他のグループより検討する期間が長く、その分グループの皆さんと議論し合い、お互いが分かり合えたように思います。企画を進めるにあたっては、全員で案を持ち寄り、その思いを熱く語り合い、自分自身を素直に表現

できていました。なかなか、日常の業務等では、このような話し合いができず、どこか自分なりの限界点をつくり、内にこもり、妥協があり、踏み出せないでいましたが、これを機に少なからず自分自身の意見を素直に人前で表現できるようになりました。これも、他の意見を聴こうとするお互いの姿勢があつたからだと思いますし、グループの皆さんには感謝したいと思います。

私たちのグループで議論を進める中で、『絆』を大切にしたいと思い400年の歴史をもつ、郡上踊りに関心を持ちました。なぜ見知らぬ人たちが、ひとつの場所に集まり変わらない踊りを受け継いでこられたのか、そのルーツを知るためにこの企画を進めました。地元の保存会長様の「地元の人だけでなく、多くの方の力で成り立っている。今後、感謝の気持ちを忘れずに、ひとつの輪になって楽しめ合い、郡上踊りのみならず、日本文化の良さを後世に継承したい。」という言葉が印象に残っています。踊りの講習では恥ずかしさがありましたが生徒にとっては、新鮮なものでした。踊り講師の指導のもと、ほぼ全員が踊りをマスターし、本番での息のあつた踊りを見たとき、そして皆さんの若々しい汗？を見たときは、担当グループとして達成感を感じ、素直にうれしかったです。また、当日のスケジュールは余裕のあるものではありませんでしたが、短い時間で郡上踊りという日本文化・ルーツに触れることで、あの夏の夜に塾生の絆を一層深められたように思います。

3. 殻の外へ踏み出す

テーマである「殻の外へ踏み出そう」を合言葉に始まった産政塾を終え、自分の『殻』について考えてみると、殻の外へ踏み出すためには、その殻が必要不可欠な存在だと感じます。また、その存在がないと、外へ踏み出すという概念も生まれなし、逆説的に考えて、殻のない人・持たない人は存在するのでしょうか。殻にはいろんな種類があり、人それぞれの大きさや厚みをもった殻をもっています。もしかしたら、殻を持つているのかもしれない。それは、個性であったり性格であったりするのではないか、そんな答えに私自身は導かれました。殻の外を踏み出すとまた殻が現れ、外へ踏み出そうとしたり違った外の世界を知ろうとします。外へ踏み出すことが人の成長なのだと私は思います。

学生時代に聞いた、こんな言葉があります。『啐啄同時（そつたくどうじ）』という中国の教育の言葉です。これは、雛（ひな）が卵から、かえろうとするとき、雛が内から突くのを「啐」といい、母鳥が外から突くのを「啄」といいます。この行為がタイミングよく行われることで、初めて雛は殻の外へ（新しい世界へ）、生まれてくるという意味の言葉です。私は、閉塾式に、この言葉を思い出していました。この言葉が象徴するように、外へ踏み出そうという内からの力（自己改革の意識）と、外からの力が今回の18期生の皆さんとの出会いであったり、それぞれの企画に参加して得たものや、議論だったのではないかと感じます。産政塾を終えて、私は、胸を張って殻の外へ踏み出したのではないかと思います。これから、様々な殻が現れたり、自分でその殻を作っていくのではないか、そんな存在の殻の外に踏み出せるように、努力して成長していきたいと思っています。

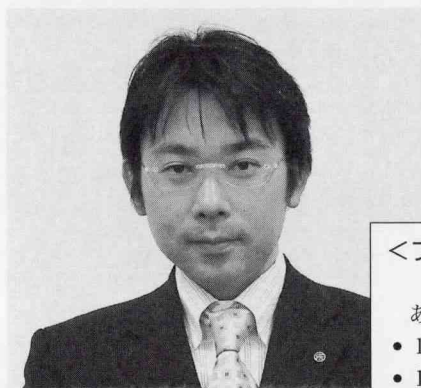
4. 最後に

今回この産政塾に参加させていただき、様々な企画を通じて本当にいろいろな経験をし、いろいろな物事について考えることができました。この経験や、悩むことで自分で出した考え方は、私の財産になったと思います。

また、現代社会は物の豊かさはあるものの、心の豊かさについては満たされていないのではないかと、18期生全員で真剣に、議論し合い、日本人の古き良き時代の忘れかけてきているものを、共有し理解し合えたに違いありません。今回出会った塾生の皆さんの笑顔と情熱に満ち溢れた真剣な眼差しを胸に、共にがんばっていきたいと思います。

最後になりましたが、東塾長はじめ事務局の松井さん、スタッフの方々、また、塾生の皆さん、本当にありがとうございました、感謝の気持ちでいっぱいです。この絆を大切にし、どうぞこれからもよろしく願います。

産政塾を振り返って



丸栄労働組合

浅井 克 弥

<プロフィール>

あさい かつや (32 歳)

- 1975 年 3 月 名古屋市生まれ
- 1997 年 3 月 (株)丸栄入社 文房具、事務用品売場配属
- 1999 年 3 月 外商第 1 部 第 11 課へ異動
- 2000 年 9 月 丸栄労働組合 名古屋支部
執行委員
現在に至る

<家族>妻・長男 (3 歳)・次男 (1 歳)

<趣味>旅行・ショッピング

■ はじめに

今回、労働組合書記長より、機会をいただき産政塾に参加をさせていただきました。本稿では、産政塾の活動を通して体験したこと、学んだこと、感じたことを振り返ります。

■ 開塾式（平成19年1月16日）

「殻の外へ踏み出そう」という、同じ目的を持った25名の塾生が、カバハウスに集まり、初めて顔合わせをしました。

最初の自己紹介。皆さんしっかりと自分自身を見つめていて、ユーモアも交えながら紹介される姿に、表現力、参加するにあたつての強い意気込みを感じました。

その後、メンバー編成、懇親会へと進み、塾生の皆さんと会話をする中で、それぞれの業種の特徴や日常業務の事など、様々な話を聞くことができ、こうした異業種のメンバーとの情報交換ができるだけでも参加する価値は十分にあると感じました。

■ 第3回企画（平成19年5月11日）

名古屋地方裁判所を訪ね「非日常体験」裁判員制度について知る・考える」

この会合では、裁判員制度について裁判を体験しながら、制度への理解促進と、ディスカッションを通し、皆で議論し、意見をまとめていくそのプロセスの重要性を学ぶことを目的に開催されました。今までに感じたことのない厳格な雰囲気、漂う裁判所で、裁判の傍聴を初体験しました。なぜこのように事件が多発してしまうのか、裁判の傍聴を通して、今の社会環境が犯罪を引き起こす大きな要素になっていることをあらためて痛感しました。

また、実際に塾生が自ら、裁判員となつて模擬裁判を行いました。人を裁くことの難しさ、また判決を下すにあたっては、事件が発生するまでの経緯、証拠、事実関係、心の葛藤、再犯の可能性など、事件を様々な角度、視点から判断しなければならないことを学びました。

さらにグループごとに分かれて皆で議論をする中で、物事の判断を下す際には、話し合うことで、争点が明確化され、最初は意見が異なっているところがあつても、深く議論をすることで、全員が理解、納得し、また結論を出す際に、安心感も生まれることから、その重要性について改めて認識することができました。

裁判に国民が参加する裁判員制度の実施まで、あと2年に迫っています。私たちも裁判員に選任される可能性もあり、安心して暮らせる社会づくりなど、自分たちのために設けられた制度であることを、この会合では認識することができました。

今後、労使でも従業員が裁判員に選任された場合に、参加しやすい環境の整備、休暇制度の充実なども検討が必要ではないかと考えます。

■ 第4回企画（平成19年6月22日）

海陽学園を訪ね「グローバル時代の人材育成について学ぶ」

第4回の会合は、「人材育成の現場を知り、情熱を知る／＼将来の日本のリーダーを育てる／＼」というテーマで、海陽学園を訪問し、教育現場の第一線を体験、体感することにより、人材育成について考えることを目的に、開催されました。

私にも3歳と1歳になる2人の息子がいます。この会合では、塾生として海陽学園の皆様の、日本の若きリーダー育成という壮大なる目標を掲げ、挑戦しておられる姿勢を学び、体験、体感するだけでなく、2児の父親としての視点においても、今後どのように息子たちを育てていくべきなのか、息子たちの今後の教育、進路について考えさせられるとともに、父親として、その責任の重さを改めて痛感させられました。

学園では、学力を伸ばすということだけでなく、寮生活の中から道徳心など人格育成についても実践されており、ハウスマスターを中心に、人として大切なことを教えながら、規範を持ったリーダーに取りうる能力を具えた生徒の育成を行っていることを学びました。

また企画の中で、リーダーには人に理解させ、納得させる能力が必要であるという観点から、お題をもとに2つのグループに分かれて、相対する主張を行う「リーダーシップ育成ゲーム」が用意されており、皆で実施しました。その場でお題が決められて、即答が要されるゲームで、塾生の皆さんが、ユーモアも取り混ぜながら、時には体を使って表現し、主張される姿、またグループ内で、お題に対してつながりを持った、一貫した主張を提案するメンバーもあり、その姿を見ながら、皆さんの頭の回転の速さ、柔軟な発想力に驚かされました。

この会合を通して、海陽学園の皆様の、リーダー育成という挑戦に向けた情熱に触れ、人材育成の重要性を再認識しました。私も今後、会社（職場）において課題や問題解決に様々なスキルやアイデアを要求される立場になると思います。その時に向けて、今後も常に学ぶ姿勢を大事にし、意欲を持って何事にも取り組み、求められるリーダー像を目指し、情熱を持って取り組んでいきたいと考えます。

■ 第6回企画（平成19年8月8日）

郡上おどりを体験し「日本の文化、人と人との繋がり『絆』の大切さを実感」

この企画は、第18期産政塾の最後の企画であり、私たちCグループの担当する企画であったこともあり、最も思い入れのある企画です。

グループメンバーの皆さんとは、企画開催まで開塾式から半年以上も時間があつたこともあり、何

度も集まり、企画案を練り、最終的にはとても壮大なものに仕上がりました。さらに企画をより成功させるために事前にメンバーで郡上八幡に下見に訪問するなど、やる気と意欲を持ち、メンバーが力を結束して企画に取り組みました。メンバー全員がそれぞれの持ち味を活かして、とことん皆で考えをぶつけあって作り上げたものであったため、とても良い内容になったと思います。

会合は郡上まつりの400年の歴史や文化に触れ、実際に郡上踊りを体験することで、人と人との繋がり「絆」の大切さを学ぶということを目的に開催されました。

現状認識として社会環境の変化の中で、人との関わり、繋がり、社会、地域に留まらず、職場、家庭でも希薄化しつつあるように感じることがあります。自分さえよければ・・・というような周りの人が困っていても見てみぬふりをしている人が多くなっているのではないでしょうか。この会合では、衣装など関係なく、観光客でも誰でも踊りに参加でき、400年も継承されている郡上踊りの文化の包容力について学ぶことがねらいのひとつでした。

もうひとつの狙いとして、18期塾生がこれからも、産政塾で知り合い、仲良くなったこの機会を大事にし、閉塾式後も交流を図り、ともに成長していきたい、という思いから、あまり堅苦しくない、8月という企画の開催時期も考慮して、皆で楽しめる企画にしたい。という思いから企画を計画しました。

今回の会合において、「文化継承のルーツをさぐることができたか？」と尋ねられれば、やや不十分だと考えますが、「18期生の皆さんとの絆を更に強くする。」という目標は達成できたと感じています。

す。計画の中では塾生の家族も巻き込んで踊りに参加をしてはどうか、という議論もありました。期中にはできませんでしたが、機会があれば閉塾式後でも、塾生の家族も含めてまた集まればいいなと思います。

■ 第7回閉塾式（平成19年8月20日）

閉塾式では、「殻とは何か」、「産政塾の活動を通して新たな発見」、「殻の外へ踏み出すためには」、「今後の決意」について、スクリーンに映し出されるこれまでの活動の記録を見ながら、この半年間を振り返り、塾生全員が感想、意見を述べました。皆さんの報告の中であるほどと、思う事がたくさんあり、大変勉強になりました。

■ 最後に

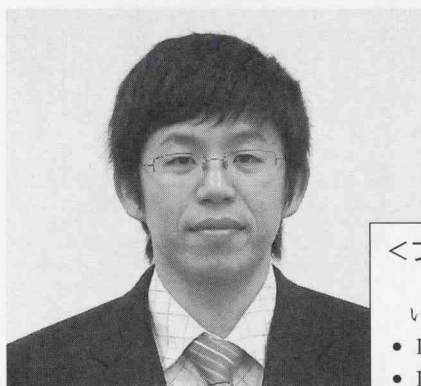
今回、産政塾に参加させていただき、「殻の外へ踏み出そう」という大きなテーマの中、業務の都合で第2回会合、第5回会合には参加することができませんでしたが、それ以外の会合には参加をすることができました。その中で殻の外へ踏み出せたかという点、私自身、正直踏み出せていないと思います。ですが各企画に参加させていただき、普段の生活の中では、経験のできないことを、現地ま

で足を運んで体感することができ、また、塾生の皆さんとたくさん議論することができました。今後はこの経験を活かし、何事にも受け身の姿勢ではなく、自ら進んで行動し、チャレンジ精神で、前へ進んでいきたいと思えます。

今回、産政塾で、たくさんの方々とお知り合いになり、皆さんの様々な考え方に触れることができ、自分のこれまでの経験の中だけでの物事の判断力が、少し視野が広くなり、考え方、行動の仕方も少し変わったように思います。今後も人との出会い、人との関わりを大切にしていきたいと考えております。

最後に、今回、産政塾に参加する機会に恵まれ、いろいろな経験ができたことは、とても幸せなことだと思ふと同時に、今後も自らを鍛える現代の道場として、産政塾が続いていくことを期待しております。東理事長、事務局の松井さん、塾生の皆さん、私を産政塾へ送り出してくださった労働組合、職場の外商部の皆さんには、この場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

産政塾を振り返って



東邦ガス労働組合

稲垣 隆宏

<プロフィール>

いながき たかひろ (32 歳)

- 1975 年 6 月 三重県津市生まれ
- 1993 年 東邦ガス (株) 入社
- 2006 年 東邦ガス労働組合執行委員
現在に至る

<家族> 妻、息子

今回、何かの縁があつて「産政塾」に参加させていただいた。実質半年というわずかな期間ではあったが、他では得がたい大変貴重な経験であつた。本稿では、「産政塾」にて自身が参加できた各企画の中で体験したこと、また、考えさせられたことを纏めることとしたい。

◆ #1 「開塾式」

産政塾に臨むにあたり、塾生OBより若干のレクチャーを受けたが、分かつた事は異業種の方々と協力し企画運営をしていくといった程度であつた。個人的には、「この担当がおすすめ」であるとか「企画立案時はこういう点に注意」といった、経験者のみぞ知る的な情報が欲しかったのだが・・・。

さて、開塾式が始まり、東塾長の熱いお言葉や、自己紹介、各グループに分かれてのディスカッションと進んでいった。特に自己紹介では、今回のテーマ「殻の外に踏み出そう」についてしっかり考え、また、自己アピールの場といわんばかりに、ユーモアを交えながら延々と話す塾生たちを見ながら、兵（つわもの）揃いだと感じ、若干の不安とともに今後への期待感が高まつたことは確かであつた。

◆ #2 「チームワーク、組織力を学ぶ」

これは、私たちDグループの企画であり、初回の企画という事でグループ内では、様々な議論を交

わしたことを覚えている。

なぜ今回の企画になったかと言えば、大きく捉えれば二つに区分できる。①に、「現代、自分本位の人間が増加している事実を踏まえ、現在の日本人が忘れかけている日本人としての美徳（まじめさ・思いやり・礼儀など）」を今一度見つめ直す機会としたい」②に、「初回のグループ企画であり、塾生みんなが参加でき、一体感が生まれるような企画にしたい」との考えからである。私たちは、豊田市消防本部のご協力のもと、「チームワーク、組織力を学ぶ」をテーマに、規律・礼儀・集団行動の大切さを学び、それを自身の職場でのチームワーク（現場力）につなげ、組織を牽引するリーダーシップを発揮することを企画の目的とした。

消防本部との打合せを含め、事前準備は、Dグループメンバー相互の協力および事務局の支援のおかげで、順調に進み、開催日を待つばかりとなった時、自身の都合により、企画当日、欠席せざるを得ない事態となってしまった。理由についてはあえて伏せさせていたが、Dグループメンバーには本当に申し訳なく深く反省している。本稿を借りて、お詫びさせていただきたい。（後日、グループリーダーより、無事に開催・運営できたという連絡を聞いた時、正直ホッとしたことを今でも強く記憶している。）

◆ #3 「非日常体験 × 裁判員制度について知る・考える」

この企画では、今までに経験したことがない（であろう）裁判を体験し、平成21年より始まる裁判

員制度について理解を深める内容であつた。裁判員制度については、報道などから興味があつたので、私自身も楽しみな企画であつた。

中身については、実際に裁判を傍聴することで、人を裁くことの重みを実感するとともに、その背景にある社会問題（格差など）についても考えさせられた。また、自身のイメージとして、裁判官は、機械的に判決文を読み上げて終了と思つていたが、被告人へ諭すような言葉を掛けるなど、非常に人間味を感じた点が良い意味での驚きであつた。次に、裁判員制度について説明があり、裁判員に選任される可能性は決して低いものではないということ、また、当然のことながら裁判員としての責任の重大さを認識させられた。その後、自らが裁判員となり模擬裁判を行った。皆が始めての経験で、意見が合わない所もあつたが、それぞれが意見を出し合い深く議論することで、互いに納得しあえる結果を導き出すことが出来た。改めて、メンバー間で真剣に議論することがより良いものを作り上げていくために重要であることを学ぶことが出来た。

◆ #6 「絆（ぎずな）」

あつという間に、最後のグループ企画となつてしまった。今回は、郡上まつりの歴史・文化に触れ、郡上おどりを体験することで、人と人との繋がりを学ぶという内容であつた。確かに、家庭・職場・地域などにおいて、人と人との繋がりは希薄化していると言える。400年もの伝統があり、且つ、観光客など誰でも参加できるという郡上まつりから人と人との絆を深めるヒントが得られるではない

かと期待で胸が膨らんだ。加えて、我々18期塾生最後の企画として、皆で踊って団結を深め、これからも仲間でいよう!という大事な裏テーマがあることも事実であつた。

今回の企画の中で、郡上おどり保存会 藤田会長から郡上おどりの歴史や伝統を継承する難しさについて講義をいただいた。藤田会長からときおり「おかげさま」という言葉が使われていたことが印象深く残っている。「おかげさま」とは、文字どおり感謝の心であり、「感謝の心なくして、郡上おどりが400年もの長くの間、皆から愛されて継承されることはない」という主旨であつたと記憶している。今回のテーマである「絆」を考える上で、この「おかげさま」という言葉は非常に大切ではないかと感じた。私自身に落とし込んで考えてみると、つつい日常の忙しさにかまけて、「おかげさま(＝感謝の心)」の精神を忘れがちである。今後は、常に「おかげさま」の精神を持った人間になりたいと強く思うことが出来た。

また、裏テーマについても、企画を行なったCグループの名(迷?)司会の下、和やかな雰囲気が進められ、予想を超える真剣な郡上おどりの練習の成果の賜物か、はたまた、藤田会長からの「おかげさま」の精神の伝承なのか、踊り上手の人に渡される「踊り免許」をもらった人が多数いたのは驚きであつた。一つの事に真剣に打ち込み、皆で汗をかくと、自然に笑顔が生まれ、確実に仲間意識(一体感)が芽生え強くなるものである。郡上おどり体験は最後の企画にふさわしい内容であつた。

◆ #7 「閉塾式」

いよいよ18期塾生としての最後の行事となった。皆がそれぞれ産政塾をとおし、発見したこと・今後の決意などを熱く、最後の議論を行った。自分なりに開塾式の時と比較をしながら、議論に参加していたのだが、全員に共通しているのが、相手を尊重しつつ主体的に議論に参加している姿であった。はたして、皆から見て自分はどうかと思うつつも、この短期間で皆の成長が見て取れ、改めて産政塾の素晴らしさを感じ、素晴らしい仲間と貴重な体験と時間を共有できたことは「本当に良かった」と実感している。

◆テーマについて

さて、今期の産政塾のテーマは「殻の外に飛び出そう」というものであった。産政塾を終えた今、改めて今期のテーマについて考えて見たいと思う。まず、「殻」とは何か。「殻」とは、自分がこれまで意識せずに築いてきた固定観念・価値観ではないだろうか。そしてその見えない「殻」は、新たなことに挑戦する、不安・面倒臭さなどから自身を守るために作ってしまったものではないかと思う。では、「殻の外に飛び出す」とは何か。どうしても殻の外へ出るというと、殻を破ることを真っ先に想像してしまう。これも、固定観念からくる考えなのだろう。東塾長は次のように話された。「殻の外に飛び出すとは、殻を破るだけでなく大きくすることも、考え方によつては殻の外に出るということではないか」。それを聞いた時、私の中で新たな気付きとともに、安心感が生まれた。やはり、殻を

破るの「破る」という言葉は、それ相当のパワーが必要になると想像してしまうが、「殻を大きくする」という言葉は、「破る」ほどのパワーを必要としないように感じる（私だけかもしれませんが）。このように、柔軟かつ想像的な考えが出来ることで、自身に科すハードルの調整が可能であると感じた。いろいろと考えや思いをめぐらしてみたが、「殻の外へ踏み出す」ということは、二次的な結果に過ぎないのではないかと、という結論に至った。「殻」を強く意識するのではなく、日常の1つ1つの行動（例えば、人と人との繋がりを大事にする、議論する際には他人の意見を尊重する、など）を意識し実践することが、「殻の外へ踏み出す」ことにつながるのではないかと思う。この思いを今後に活かし実践していきたい。

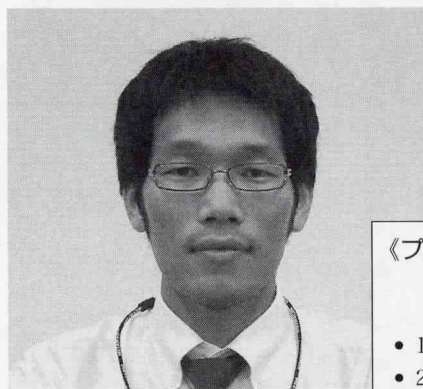
◆やがて

結局、我がグループの企画を含め、3回もの企画を欠席するという事となってしまった。欠席した企画について、皆とさまざまな感動を共有できなかったことは、残念の一言である。しかし、私のように数回の参加であっても、今まで気付くことがなく過ごしていたこれだけのことを気付かせていただいた産政塾に大変感謝している。

東塾長をはじめ、事務局として何かと骨を折ってサポートをしていただいた中部産政研の皆様、自

身のグループ企画を欠席しても、寛容な心で迎えていただいたDグループの皆様、様々なイベントを企画していただいた同期18期の皆様、また、心よく産政塾に参加させていただいた職場の皆様に心より感謝を申し上げます。

「今思うこと」



トヨタ紡織株式会社

大 倉 吉 貴

《プロフィール》

おおくら よしたか (29 歳 B 型)

- 1978 年 5 月 3 日 愛知県豊田市生まれ
- 2002 年 3 月 アラコ株式会社入社
技術管理部配属
- 2004 年 10 月 アラコ株式会社分割・
合併→トヨタ紡織株式
会社へ
- 2005 年 4 月 人事部へ異動
現在に至る

〈趣味〉 バレーボール

〈家族〉 4 人 父 (インドネシア赴任中)、母、
妹 (栃木県在住)

〔塾誌の執筆にあたり〕

開塾当時、入社5年目（現職場に異動して2年目）だった私は、産政塾の掲げる「殻の外へ踏み出そう」というテーマに、若干ピンとこない感じを覚えていた。現職場に異動後、手探りの日々が続いてきていた折で、塾生募集要項を読み漠然とイメージした「殻」なるものが、私に存在するのだろうか？と他人事のように思っていた。

産政塾に参加し、何を学び得たのか。よくよく考えて言葉にしようとなると、恥ずかしながら非常に難しい。「学ぶ」という言葉がよくないのかも知れない。

しかしながら、約8ヶ月間に渡る産政塾での経験を通じて、これまでにない角度から自分を見つめる機会を与えたことだけは間違いない事実であり、感謝だ。

塾誌原稿の執筆は、最後にして最難の課題である。が、来年は30歳という節目の年を迎えることもあり、自分を省みる好い機会と前向きに受け止めて、思うまま綴ってみたい。

〔入塾〕

幸いにも、産政塾に参加し視野を広げてくるようにと、上司に取り計らって頂いた。本当にありがたかった。一方、期待とは裏腹に、不安な部分も多く若干尻込みしている感もあった。

職場で非常に仲の良い同僚が17期生として参加させて頂き、彼から産政塾のことは「非常に楽しく、勉強になる場」だとよく聞いていた。ほんとうに楽しそうであつたし、他社の塾生からの刺激を受け成長しているのが、見て取れた。

彼は、現職場の先輩で、人生の先輩でもある（一つ年上）。気が合う。しかしタイプは異なり、彼は社交的で非常に気が利くのに対し、18期生の皆さんは既にご存じの通り、私はどちらかというと逆である（そこが我々にとっていいバランスなのかもしれないが）。わずか8ヶ月の間で、他社の塾生とどれだけ仲を深められるか：まずもつての不安だつた。

もう一つの不安が、塾生の募集条件が、入社10年目前後・30代前半くらいだということ。同僚からも、各社の将来有望な方ばかりが集まってくる、とも聞いていた。

私はというと：、年齢・会社経験共に入塾条件を満たしていない。人生遍歴も後述させて頂くが、イレギュラーでお恥ずかしい。そんな私が果たして、産政塾なる非常に志高い場に参加させてもらつていいのだろうか：。

今でこそだが、この不安そのものが、私にとつての「殻」だつたと言える。

〔開塾式（07年1月16日）〕

そんなこんなであつという間に開塾式を迎える。初対面がひどく苦手な私は、正直かなり憂鬱だつ

た。

塾生の自己紹介の場面は印象深い。強い個性とバイタリティー溢れる他の塾生の挨拶に圧倒された。私が属したEグループのメンバーとの初顔合わせ・初会合もこの日。失礼な言い方に聞こえてしまうかもしれないが、自己紹介をさらに超える強烈なインパクトを受けた（笑）。各人の更にディープな一面を今後知ることになるうとは、このときは想像だにしていなかったのだが…。

疲れを覚えながらも、これからへの期待とわずかに安心感を覚えたのは、理由なき感覚ではなかったと、今にして思う。

「各グループの企画」

私は全5回の会合、全てに参加させて頂くことができた。快く送り出してくれた職場の上司・同僚に、あらためて心からの感謝を申し上げたい。

いずれの企画においても、「見たこと、感じたこと、考えたことのない」経験をさせて頂いた。回を重ねる毎に、まるで用意されていたシナリオの如く、塾生が一体感を帯びていく感覚に、けして偶然ではない「産政塾」たる所以を見た。そこには、何かを感じとってやろうという強い塾生の情熱と、産政塾事務局・松井さんの一言では形容しつくせないその人柄と塾生への温かい配慮があつたからこそだと思う。松井さんには、郡上八幡でバスの中にTシャツを忘れ送って頂いたり、塾誌原稿提出が

大幅に遅れたり：等、数々の失礼に対してお詫びも併せ、心からの感謝と敬意を表したい。

各企画の思い出・感想は全て書ききれないので、それぞれ自分なりに印象に残った出来事や言葉を振り返り、記してみようと思う。

第2回『チームワーク、組織力を学ぶ』豊田市消防署（4月10日）

・勇気は持つていても役に立たない、出してこそ勇気だ（規律訓練にて：消防隊員の方より）

第3回『裁判員制度について知る・考える』名古屋地方裁判所（5月11日）

・窃盗（初犯）の被告に対し、一文一文「分かるね？」と諭すように判決を述べ伝える裁判官。
（裁判所は、単に人を裁くための場所ではないということを知った）

第4回『グローバル化時代の人材育成について学ぶ』学校法人海陽学園（6月22日）

・将来の日本を背負って立つリーダーを育てようとする海陽学園の教育方針は至ってシンプルなものであった。（自分の身の回りのことは自分でする。愛情と情熱をもって、「人格」を育てる）
・充実（し過ぎていと言つていい程）の施設・環境（ホールから天体観測が出来るのには驚いた）
第5回『人と自然環境との共生』エコツーリズムから学ぶもの』屋久島（7月2・3日）

・手つかずの森に見た、驚くべき自然の力・循環

（自己中心的な人間活動の巨大化しさえなければ、地球環境は永久に持続可能なのだと実感）
・屋久島1泊2日の超過密スケジュール、にも関わらず行われた深夜のニョッキゲーム。で、ひそかに一度も負けなかったこと。修学旅行のようだった（笑）

第6回『絆』郡上八幡（8月8日）

- ・郡上踊り400年の歴史…常に「おかげさまの気持ち」（保存会会長の講話）
- ・平賀さん、浅井さんの司会による、行きのバスレク（相当うさんくさくて面白かった）。

〔閉塾式（07年8月20日）〕

あつという間の8ヶ月を、写真と最後の討議「殻とは何だったか」で、振り返った。最後に相応しく、和やかで、笑い溢れる会合であった。「殻」とは何だったか？また、産政塾で自分がどれだけ成長し、「殻の外へ踏み出せただろうか」…等、難しいことは少し横に置いておき、「参加できて良かった」と、心から思えたことに安堵感と大きな感謝を覚えた。産政塾が我々塾生に与えてくれようとしたもののいくらかを、きつと私も感じとれたのではないかと…。

その後の懇親会の席で、東塾長から贈られた「ガンバロウ三唱」は、塾生への惜しみないエールとして心に焼き付いている思い出だ。

〔殻とは何だったか〕

冒頭で、「私にとつての殻」について触れた。最後、そのことについて、私の恥ずかしい人生遍歴

も交えながら、もう少し具体的に書こうと思う。

私は会社に入る前、大学を中途退学するという挫折・墮落を経験している。誰のせいでもなく、自業自得の至りである。元々高校は理系に属し、その道に進んだ。が、途中道を見失った。かと言って自分に何ができるのか、したいのか……それすらも見出せなくなっていた。社会的には「死んだ」と言っても過言ではない。「ニート」とか「格差社会」とか「勝ち組み・負け組み」等の言葉などを聞くと、心が痛んだりする。そんな私を、今はなき「アラコ」という会社に拾ってもらったのが、入社の際である。書いてしまえば数行のことだが、私を救い支えて下さった方々は、両親をはじめ数知れない。常に、自分の弱さを省み、周囲への感謝を忘れず、生きてきたつもりだった。が、いつしか感謝とか謙虚さを履き違え、必要以上に自身を蔑み（自分を特別扱いし）、ある種自身を楽にさせようとしていたのではないかと……と思うようになっていた。同時に、沢山背伸びもしてきたなあ……とも。産政塾への参画、またそれと同時に、私の身の回りで起こった数々の出来事・出会いを通して。「ありのままの君でいいよ」と、背中をそっと押されたような気がした。私にとつての「殻」とは、「必要以上に背伸びをしたり、また自分を蔑むこと」であつたと思う。

「これからへの決意」

閉塾式での、一人の塾生の言葉が印象に残っている。「産政塾での経験は貴重な体験だった。が、

これから過ごす日常に於いても、同じくらい尊い時間を過ごし得る。そんな思いを持って日々を過ごしていききたい」：確か、そのような内容で（勘違いがあつたら申し訳ありません：）、感心と、共感を覚えた。来年私は30歳を迎える。そう、何も特別なことはないのだ。1日1日、等身大の自分と向き合い、しっかりと心の目で物事を見て、精一杯の歩みを、一步一步前に踏み出していきたい。特別とは言わないが、私にとつての一つの節目と言える「30」を目前に、産政塾という機会を与えられたこと、また一緒にその時間を分かち合つた18期生の皆様、東塾長・松井さんをはじめ中部産政研の皆様、最後あらためて心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

「おまけ（字数稼ぎではありません…笑）」

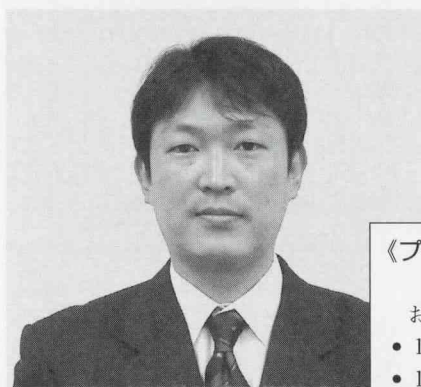
産政塾に参加していた頃、私の周りで流行っていた（遅いかもしれない）曲の歌詞を、載せてみようと思います。皆ご存知のNHK・プロフェッショナルのテーマ曲。番組にもこの曲にも、結構心を奮い立たせられたりしています。

ぼくらは位置について 横一列でスタートをきつた
つまずいている あいつのことを見て

本当はシメシメと思っていた

誰かを許せたり 大切な人を守れたり
いまだ何一つ サマになっていやしない
相変わらず あの日のダメな ぼく
ずっと探していた 理想の自分って
もうちよつとカッコよかったけれど
ぼくが歩いてきた 日々と道のりを
ほんとは「ジブン」っていうらしい
世界中にあふれているため息と
君とぼくの甘酸っぱい挫折に捧ぐ…
「あと一歩だけ、前に 進もう」

一 歩 前 進



名鉄労連

太 田 洋 純

《プロフィール》

おおた ひろずみ

- 1972 年 知多郡阿久比町生まれ
- 1991 年 名古屋観光自動車㈱
(現名古屋観光日急㈱) 入社
- 1997 年 名古屋観光日急労働組合執行委員 (非専従)
- 2005 年 名鉄労連へ派遣
現在に至る

<趣味> ゴルフ、旅行

はじめに

テーマの『殻の外へ踏み出そう』は、言葉では理解しつつも考えれば考えるほど難しい。入社してから17年が経過しましたがこれまでを振り返って見ると「普段通り」であることを望んでおり、物事を深く考えて行動していなかったのが事実です。今回「産政塾に参加」が決まったときは「正直勘弁してくれ」というのが本音でした。しかし、このままでいたら何も自分にとって変化がないし、異業種と交流することによって今までとは違う考え方や新しい知識を身につけることが自分にとって足りなかった部分でもあり、今の自分を見つめ直すいい機会であり参加することとなりました。

第1回 開塾式

これから半年間に亘り活動する中で、初めて顔を合わせる開塾式では、不安と緊張の中、ずっと「これから半年間続けられるかなあ？」と正直思っていました。自己紹介、グループ討議さらには懇親会と進むにつれ、不安感↓安心感↑期待感へと変わっていききました。

第2回 チームワーク、組織力を学ぶ

今回の企画である「チームワークの大切さ・リーダーの役割」について講演を聞き、組織・チームワークの重要性とは、規律訓練では基本の行動は必ず守り訓練を重ねることで個々の向上を図る。さらに、お互いが周りの人に気を配ることで連携を図り組織の力を維持していることでした。個々の向上はこれまで経験を積むことが最も重要と思っておりましたが、徹底的な基本行動の繰り返しであることをここで学びました。自分自身「面倒臭い」などの理由で基本を守っていないことがありましたが、消防の場合では一人でも守らない者がいるのであれば周りの人に危険が生じることがあり、「基本を守る」ことについての大切さを改めて実感しました。また、個人を主張する人や連携を取らない（取れない）人がいた場合でも目標を達成することがありますが組織としての力は弱いと思います。このような組織にならないよう周りに気を配ることの重要性を再認識しました。

第3回 非日常体験 裁判員制度について知る・考える

『非日常体験』というテーマについて、当初は「人は生きた動物を殺してそれを調理して食にしていることから、生命を絶って生きた鶏からを調理し、食べることのありがたさを学ぶ」ことで進めていました。しかし、松井さんに相談したところ「その企画は・・・」という回答であり（今思えば止めておいて正解だった）、最終的に2009年5月までに始まる「裁判員制度」に決定しました。国民の中から抽選で選ばれ裁判員として刑事裁判の審理に加わり有罪か無罪かを判断しなければならな

い。これまで「裁判は自分が罪を犯さない限り関係ない」と思っていました。人々を裁く側に立つことにより参加者が罪の重さを知ることが犯罪を未然に防ぐことも狙いの一つでもあることを知りました。また、映画『評議』の中では、「評議は乗り降り自由」でありました。最良な考えがあれば話し合いの途中から意見が変わってもよいということです。最近話題となった不祥事は、不正の存在を知っていました。経営に与える影響を見誤ったせいや事実を隠蔽し正しい対応に決断できなかったり見えてみぬふりをしたりした結果である。こうした不祥事をださないためにはこういった正しい意見が言えるような環境を構築していかなければならないと思いました。

第5回 人と自然環境の共生 エコツーリズムから学ぶもの

1泊2日の宿泊企画は自然環境についてテーマで、目的は世界自然遺産に登録されている屋久島でした。1日目はエコツーリズムについて説明を聞き、観光者に自然や文化に触れ合う機会を提供し地域振興の貢献が目的の中で、自然の豊かさを保護・保全のために、「観光者にも自然保護のためにルールを守ってもらう」・「生態系の維持」・「次の人のために良い状態で残す」など地域の人と観光者がお互いに自然環境について意識を持たせる取り組みが必要であることを学んだ。翌日はエコツアープログラムにある西部照葉樹林を散策し屋久島の自然の素晴らしさを実感した。この自然を維持することは地域の人たちが自然保護に対して積極的に取り組み、自然環境に対する意識の高まりがあつてのこ

とであります。自然環境の取り組みは屋久島だけに限らず日常生活の中でも出来ることから始めていきたいと思いました。

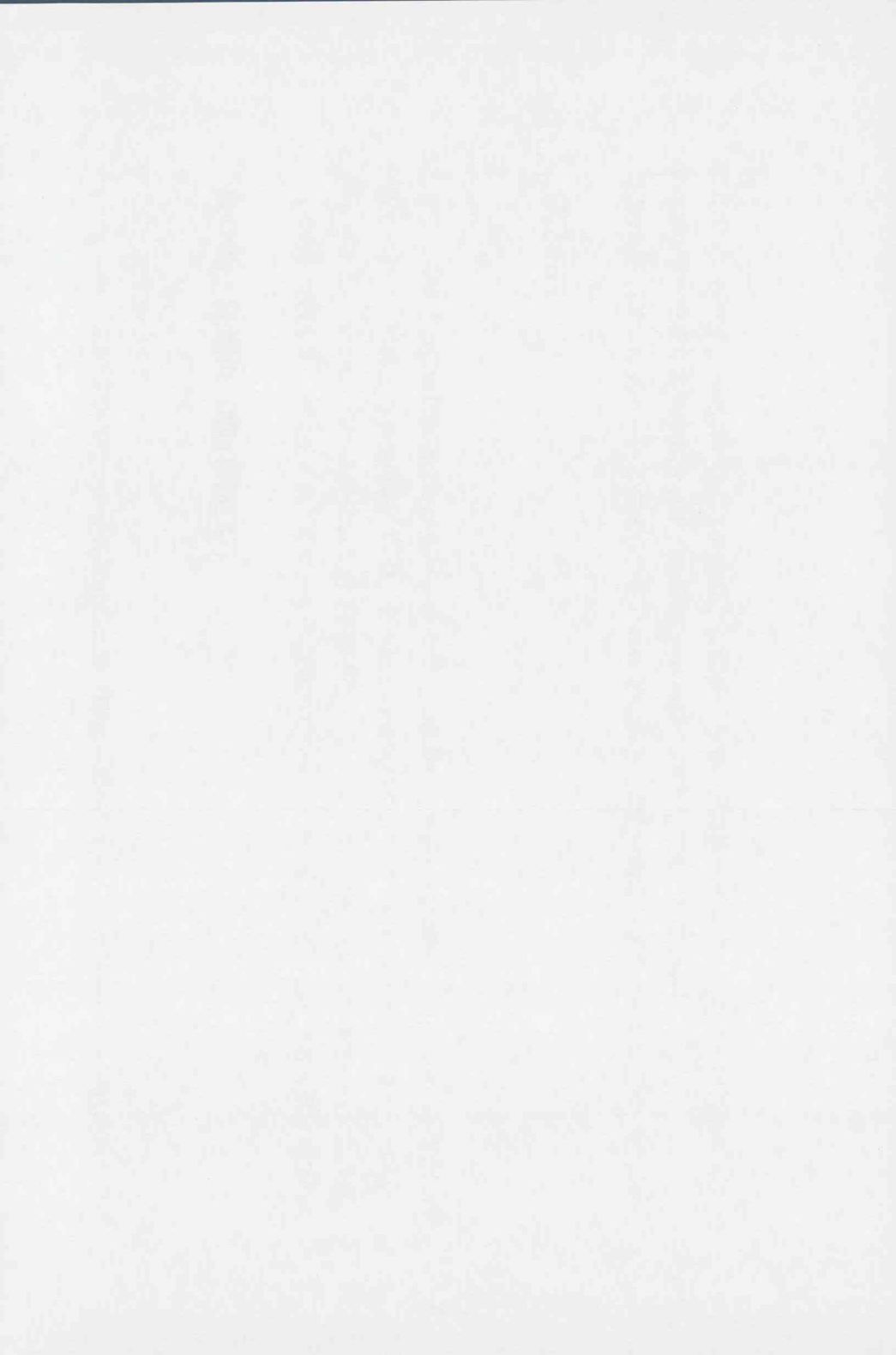
第7回 閉塾式（殻とは何か）

これまで『殻の外へ踏み出そう』のテーマで活動してきましたが、僕の中で「殻」とは「面倒臭い」、「誰かがやってくれる」などの理由で行動に積極性がなかったことでした。「自分が変わらなければ何も変わらない」と参加した産政塾ですが、中々実行は出来なかった面もありました。しかし、ここでの活動により自分自身の意識改革を考えさせられ、今後はここで学んだ行動力を活かすことを決意しました。

やごうに

約半年間に亘り各グループの企画に参加させていただいた経験を職場で活かすよう目指し、自分自身だけでなく組織や職場全体が一步一步前進できるように積極的に行動していきます。

最後になりますが、東塾長をはじめ事務局の松井さんそして第18期生の皆さん大変お世話になりました。



『産政塾』を終えるにあたり



アイシン労働組合

河野 成 康

《プロフィール》

かわの のりやす

- 1973 年 4 月 福岡県北九州市生まれ
- 1992 年 4 月 アイシン・エイ・ダブリュ
入社
- 2006 年 9 月 アイシン労働組合アイシン・
エイ・ダブリュ支部
中央執行委員
現在に至る

〈家族〉妻、長男（小5）、次男（1才）

〈趣味〉釣り、家族サービス

○はじめに

この産政塾へ参加して下さいと、依頼があつた時は、なんだ??と思った。

字だけでは、何を行つていいのか、さっぱりでした。一期前に入塾した先輩にどんな事を行つてゐるかを聞いたら、『面白いし、良い経験になるから入塾して損はないよ』との返事でした。

自分にはあまり向いていないとは思いましたが、せつかくの機会なので行くだけ行つておこうとその時は思っていました。

○開塾式にて

開塾式は、全トヨタ労連の入っているカバハウスで行われました。いろいろな業種の方々がいる中で、最初に思つた事はこんな業種多彩の人達でいいこれから、何をしていくのであろうか?と思つた。

開塾式が始まって、まず事務局の『松井英治さん』↑(同じ労組の出身)の説明を受ける中で『皆さん、この産政塾で自分の殻を破つて、殻の外へ出て下さい』まず、この一言で参加者の半分位の方は、何を急に言っているんだこの人は、と思つたと私は思う。

そして、私たち労働組合関係者では、雲の上の存在の『東 正元』会長の挨拶と、この産政塾へ参

加する事で学んでほしい事を緊張しながら、聞いていました。（参加した方、全員がいろんな意味で緊張の連発で終わった一日になったでしょう。）

○第2回会合に向けて

自己紹介をしながら、第2回目の会合に向けて話し合いが始まった。自分達が、やったことが無い事や日常では、まずする事の無い職業等での体験と言われてもなかなか案が出る訳でもなく・・・過去の塾生が体験している事も、なるべくなら避けたいと思う気持ちがあり話し合いをしても、時間が過ぎていくだけだった。会合の中では、自衛隊・消防隊その他のいろいろな案が出たが、結局、第1候補が自衛隊・第2候補が消防隊で決まった。

後日、打ち合わせをする事で、第1回目の会合が終了した。会合の後で、中川リーダーには、自衛隊と消防署への調整で大変ご苦労をおかけしたと思います。調整の結果、豊田市消防本部にて第2回の会合が決まった。消防隊を提案したのが、自分だったのでもちよつとうれしかった。3月初旬に事前の打ち合わせを消防署で行った。見た目は怖い（中澤さん）が大変対応が良く第2回目の会合が、成功に終わる事を確信できた。

第2回目会合は、4月10日に行われ天気も晴天で外での活動には、適した最良の日になった。午前中は、講義と心肺蘇生の訓練及び1階にある体験コーナー（地震・消化・暴風・煙脱出）での学習体

験を行った。午後からは、皆さんお待ちかねの規律訓練とロープ訓練を行った。規律訓練は、ただ行進するかと思いきや、縦・横の列が乱れていないか？号令による集団行動の訓練だった。自分も安城市消防団に入っているが、こんなにまともに訓練を受けたことは無い。今回は人数も少ないので、消防署の方も訓練にやりがいがあったのかも、知れません。訓練を通して、自衛隊と余り変わらないのでは、と思った。訓練の後には、レスキュー隊出動訓練を見学させて、いただきました。さすが本職といった感じで、隊員の方々は異動してきたばかりの方との編成での訓練だったそうですが、そんな事は、素人の私達からみたら全然、気にもならない位の本番さながらの実演だった。人命救助第1に考えているからこそ、各隊員が、指揮者の指示に的確に動けるのがあると関心した。自分たちも、今回の体験を良い経験とし、これ位の勢いで『自分の殻を破っていったら、すばらしい』と思った。

○第3回（裁判員制度について知る・考える）

名古屋地方裁判所にて第3回会合が開催された。裁判所なんて、まず行く事がないだろうと思っていたのに、行く事ができた。産政塾のおかげ？かな？。

朝から、法廷傍聴を4案件聴く事ができたが、案件毎にすごく重い空気が漂っていて、聴いている途中から傍聴席から出ようかなと思う位でした。昼食後は、裁判員制度の説明を聞いて、1本のビデオを観ました。内容は、裁判員に選ばれたら、こんな感じになるといった内容であった。自分がもし、

この制度で裁判員に選ばれたら、はたして守秘義務を守ることができるのか？色々な事を考えさせられる会合になった。

○第4回（海陽学園を訪ねて人材育成について学ぶ）

○第5回（屋久島を訪ねて人と自然環境の共生について学ぶ）

○第6回（郡上おどりを体験し絆の大切さを学ぶ）

第4回から第6回までは、いずれも業務の都合で参加する事ができなかった。事務局の松井さん（同じ労組）、東塾長は、参加できない理由を知っていた為に、会う度に『すみません！』（松井さん）『すまん！』（東塾長）と言われていた。あまり謝られても逆に何も言えなくなってしまう。ですが、流石に屋久島に行くときは、東塾長に『行くんですか？』と聞いてしまいました。後日談として、東塾長に実は、行こうと思ったら屋久島に行けたと聞かされました。自分（河野）が頑張っているのに、行ったらまずいだろと思う、行くのを止めたそうです。次回の産政塾からは、泊まり企画の時は、是非、東塾長を無理やりでも連れて行って下さい。（松井さん宜しくお願いします。）

○第7回（閉塾式）

今まで行なった事の復習を資料を見ながら振り返りをした。松井さんのキャラで、会場は笑いの連続でした。こんな写真をいつ撮ったんだ？と思う写真が結構あったのには、松井さんはもしかして？そっちの趣味があるのか？と思わせる位の内容でした。私達のDグループは、皆まじめな人達の集まりで、グループ討議でもほかのグループに負けない位の討議を重ねる事ができました。リーダーの中川さん始め、舟橋さん・稲垣さん・広田さん出席回数では、一番少ない私を参加するたびに、色々と情報をいただきありがとうございました。

○最後に

今回の産政塾に参加でき大変有意義な体験（回数少ないですが）をさせていただきまして、ありがとうございました。事務局の東塾長・河原さん・松井さんそして、第18回生の産政塾の皆さん今回の参加で私を含めて塾生全員が殻の外へ踏み出せたのでは、ないでしょうか！各グループの企画も大変勉強になりました。今後の私と皆様のご活躍を祈念いたします。たいへんお疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

産政塾を振り返る ～印象に残った「ことば」～



株式会社東海理化

北 原 航 太

《プロフィール》

きたはら こうた (32 歳)

- 1975 年 7 月 山梨県小淵沢町
(現：北杜市) 生まれ
住宅設備機器メーカーに
て、営業を 3 年半経験後
- 2001 年 12 月 (株)東海理化 入社(人事部)
現在に至る

＜趣味＞ スポーツ観戦（野球・ラグビー）

—はじめに—

大学を卒業し、社会に出てから、ちょうど十年目を迎えた。その間、転職を一度経験し、「考えるよりまず行動」の外回りから、「行動する前にまず考える」仕事へ変わった。最近では、資格も取り、担当業務も変わり、また私生活では、結婚し、子供も生まれた。サラリーマンとして、それなりに充実した日々を送っている。

ただ、なにか自分自身にもどかしさを感じていた。仕事や社会に慣れるのと反比例するように、「刺激」を感じることが減り、自身の成長を実感することが減っていた。そのような中で、上司から産政塾参加の機会を与えられ、刺激を求めて、参加したのである。

今、閉塾を迎えての率直な感想は「おかげさま（感謝）」である。快く送り出して頂いた上司・同僚、また東塾長をはじめとする中部産政研の皆さん、またたくさんの「刺激」を下さった、各企画でご指導頂いた皆さん、そして、何より十八期塾生の皆さん。このような「刺激満載」の経験を、短期間で、させていただいた皆さんへの感謝の一言に尽きるのである。

今回の企画を通し、印象に残った言葉を中心に、産政塾を振り返る。なお、産政塾テーマ「殻の外へ踏み出そう！」に従い、以後はインタビュー形式で振り返る。

■■■■楽しいこと、おもしろいこと、感動したことは失われたくありませんよね。それだけなのです。

（中略）身近なことから変えていかなければ、決して世界は変わりませんよね。もっと身近な目標を設け、それを一つ一つクリアしていくことが必要なのではないでしょうか。 ■■■

——どなたの言葉ですか？

「私が所属したグループは屋久島でのエコツアーを企画しましたが、そのツアーガイドをお願いしたYNAC（ワイナック・（有）屋久島野外活動総合センター）の市川さんのメールを引用しました。」

——どのように感じましたか？

「自然保護や、環境問題って、とても重要な問題だと思っていましたが、少し固いイメージがあり、ややとつきにくさも感じていました。例えば年金や税金と違って、今すぐに、自分に何らかの影響があるというわけでもありませんし。レジ袋を使わないことなど、自分でできる範囲のことはやっていました。正直『この行動が』はたしてどこまで影響があるんだろう』と思っていました。」

それで、市川さんの言葉ですが、正直ちよつと衝撃でした。確かにそうだなと。遠く離れたアマゾン川流域の環境破壊を思うだけでなく、まずは周辺の環境に目を配って、その良さを感じ、その変化を感じることも重要なんだと。そう思うと、少し環境問題が身近に感じるようになりました。」

——具体的に変化はありましたか？

「大したことではないですが、子供と遊ぶ公園をいつもと違う公園にしてみたり、通勤に使う道を少し変えてみたり。幹線道路ではなく、田んぼ道を通ってみたり。これが結構楽しいんですね。季節感を感じますし。そんな感じで、気楽に身の回りの自然を楽しむようにしています。」

■■■■興奮、狼狽は事故の土壌になる。どんな活動環境においても、冷静さを失うな。■■■■

———どなたの言葉ですか？

「これは、豊田市消防本部を訪問した際にいただいた資料から抜粋しました。『安全確保十則』の一つです。この『安全確保十則』は基本的な行動原則をまとめたものですが、他にも仕事に役立つ内容が結構あります。」

———どのように感じましたか？

『『事故の土壌』』というのは、この言葉から再認識させられました。確かに、冷静でないときの行動や判断はさらなる混乱を招いたり、また、場合によつてはその人や、周りにいた人の心象を悪くするという二次災害を招いたりするなど。

私は結構興奮しやすいタイプで、仕事でもついつい冷静さを欠いてしまうことがあるのですが、いろんな意味で『事故』につながるということは、意識するようにしたいですね。」

——具体的に変化はありましたか？

「言うは易くして……（苦笑）。でも『リーダーの要件』として、絶対に必要な要件だと思いますので、今後は意識して、行動したいと思います。」

——「安全確保十則」の中で、他に印象的な言葉はありますか？

「他には『部隊および隊員が指揮者の掌握から離脱することは重大な事故につながる。独断的行動を慎み積極的に指揮者の掌握下にはいれ。』があります。ちよつと日々の行動を反省しました（苦笑）。」

■■■歴史を知る。情熱を持つ。行動する。■■■

——どなたの言葉ですか？

「東正元塾長のお言葉です。十八期塾生なら、みんながそらんじて言えると思います。たぶん。」

——どのように感じましたか？

「やあ、さすがに東塾長は言葉に重みがあるなあと。」

———そういうことではなく…

「失礼しました。『情熱をもつ』が一番印象的でしたね。仕事をしていると、結構「情熱」を忘れてしまい、仕事をこなすことに一生懸命になってしまふ。でも、やっぱり「情熱」がないと中途半端な出来栄えになったり、満足感が得られないんですよ。最近仕事をこなしがちだったので、情熱をもたねばと思いました。

それから、『歴史を知る』ですね。私が小学生の頃、書道の先生に『温故知新』という言葉を教えてもらいましたが、このことと同じ意味なのかなと思います。」

———具体的に変化はありましたか？

「これも言うは易くでして…（苦笑）。でも、いつまでも情熱をもつように心がけたと思います。」

———まとめ———

①「殻の外へ踏み出せたか？」テーマについて振り返る

「殻」とは何か。私は「殻」とは「その人自身」だと思う。様々な機会・経験を通じ、「殻」自体を大きくしたり、「殻」を薄くしたり、時には「殻」に穴を開け、外の空気を取り入れてみたり。「殻」

を大きくすること、大きくなるような経験をする事で、人間の幅が広がり、成長できるのではないだろうか。

これまで述べてきた以外でも、裁判所・海陽学園訪問および郡上おどり参加という、一人ではなかなか経験し得ないことを経験でき、十分に「殻の外へ踏み出」せたと感じている。特に、屋久島訪問を企画する際は、初対面で、なかなか「人となり」が分からない中で、グループメンバーと企画を進めていったわけであるが、大変貴重な経験であった。

②今後どう生かすか今後への決意表明

「良い経験をした」で終わってはいけない。何らかの形で、同僚など、周囲に対し、フィードバックしなければと感じている。

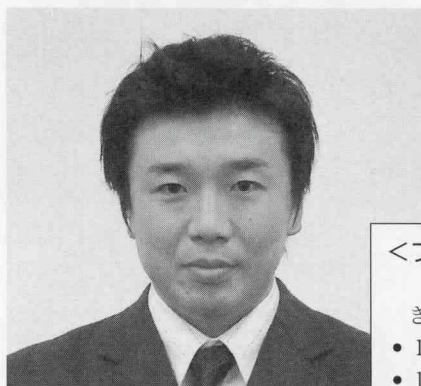
東塾長のお言葉にもあったが、「行動する」こと。そこに重きをおきたい。単に、産政塾での経験を周囲に話すだけでなく、「殻」を破る機会を積極的に作っていききたい。

具体的には早速部内で勉強会を立ち上げ、「ミニ産政塾」とはいかないまでも、みんなで勉強する機会を作った。このような行動を起こすことで、自分自身の殻を大きくさせるとともに、周囲の殻を大きくさせていきたい。

―付け足し―

やや固いまじめになったが、率直な感想として、非常に楽しかった。同年代の方と「半公半私」で接することは大変貴重な機会で充実していた。この十八期塾生との関係は今後も保っていきたいと強く思う。

産政塾での「気づき」をいつまでも



豊田市役所

金 原 昭 仁

<プロフィール>

きんばら あきひと

- 1974 年 7 月 22 日生まれ
- 1999 年 豊田市役所環境保全課に配属
(9 年間異動なし)

〈血液型〉 O 型

〈趣味〉 釣り、ドライブ、スノーボード、
ダイビング (今は息子中心の生活
でおあずけです)

〈家族〉 妻、息子 (2 才)

【なぜ産政塾に】

仕事に就いて九年経とうとしている。その間、所属を一度も変わることがないためか、仕事に慣れ淡々とこなしている自分がいた。仕事の内容はチームで達成するというようなものは少なく、個人に任されることが多い。そのため、人の考え方を参考することや、自分の考え方を検証することが少なく、仕事が単調なものになりつつあった。そのとき職場内の回覧で見た産政塾の募集案内に書かれていた「組織の枠を超えて本音の議論」この言葉が胸に残った。

私が産政塾に応募した目的は、同年代のいろいろな職種の人たちと議論する機会が与えられることである。異業種の方と意見を交換ができる産政塾では、どのくらい自分に影響が出るのかが楽しみだからだ。そのメンバーで一つの目標に向かい調べ、議論し、調整していく過程では、今の生活では経験できないことを経験させてくれることだろう。まさにこの産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」であると思った。

では、自分の殻とは「自分が経験したもの」思っているが、本当は何だろうか、そして殻を踏み出すことはできたのだろうか。

【第一回 開塾式】

どのように進めていくのかもよくわからないまま、少しの不安と大きな期待が入り混じった思いで、企画案（深く考えずに作成）を携えてドキドキしながら参加したのを覚えている。まず自己紹介、人前で話すのに慣れていない自分にとっては何を話したかを覚えておらず、みんな上手に話すなあと感心したことは鮮明に覚えている。

すでに班は分けられており、その班の中で企画について話し合った。そして不安が少し大きく変化した。自分の持ってきた企画が採用されたからだ。そして企画が採用されたことにより、リーダーのオブション、さらに唯一の泊まり企画も付いてきたのでさらに不安が……。きつと同じ班の仲間が助けてくれるに違いないと思い、その不安を一時しまい、懇親会に参加した（自分たちの企画は半年後の予定のため）。お酒が入っている間、不安を忘れることができたので楽しい時間だった。

【第二回 チームワーク・組織力を学ぶ（豊田市中消防署にて）】

この企画の一番の気づきは、講師の「チームワークは個々の力が強力であれば自然にできる。力がない集まりは仲良しクラブである。」という言葉であつた。人命保護を仕事としている消防署員の言葉のため、その言葉の重さを実感した。チームの中に力がないものがいれば足を引っ張り、チームとして機能しなくなる。火災現場では些細なことでも命取りになるとのことであつた。仕事の内容は大きく違うが、個々が自分の役割を適切に実行するのは仕事の基本であり、使命をもって組織の中での

役割をこなすことの重要性を改めて認識した。

また、組織力を高めるリーダーとしての役割と心構えを議論し、部下に明確な役割（目標）を持たせ、共有し、その行動に対して評価する等の意見が挙げられ、普段リーダーの立場でものを考えたことがない自分にとっては貴重な経験となった。

【第三回 非日常体験 裁判員制度について知る・考える（名古屋地方裁判所にて）】

自分の人生に裁判は関係ないものと思っている自分にとっては、貴重な経験であった。本物の裁判の傍聴では、判決時に被告人に対してどのような更生されるのかを考えて述べられていたことに感心した。裁判員制度の疑似体験では、事件の背景から被告人の気持ちになって考えた。量刑を決める話し合いでは、人の考え方にはいろいろあることを感じ、とても参考になった。ただ、人の感覚のずれを不安に思い、そのずれを埋めるにはかなりの時間の話し合いが必要だと感じた。

その後、安心して暮らせる社会には何が必要かを議論した。家族や地域のコミュニケーションの重要性、教育や社会保障の充実などが挙げられた。当たり前のことだと思っていたことができない世の中になっていることに気づかされた。

【第四回 人材育成の現場を知り、情熱を知る（海陽学園にて）】

話題になってゐる海陽学園の訪問である。このような機会でなければ訪れることはないだろう。これも産政塾のおかげである。ここは全寮制で、リーダーを育てることを目標にした教育を行っている。寮では生徒と寝食を共にするハウスマスター等が親身になって、生徒の成長を見守っている姿には情熱を感じた。

講師の「成果がわかるのが何十年後である」という言葉に、人を育成するには長い時間とそれを経けることのできる情熱が必要であると感じ、自分の息子に対しても短期に成果を求めずに、長い目で接していかうと心に誓った。

【第五回 人と自然環境の共生 エコツーリズムから学ぶ（屋久島にて）】

ついに自分たちの班の企画である。しまいこんだはずの不安が外に飛び出すときがきた。他の班の企画が近距離（費用が安く、余剰を泊まり企画に充てる）であることが、さらに重圧となっていた。打合せでは一流の自然がいいよねの一言から、世界自然遺産のキーワードが、そして屋久島が。確かに世界自然遺産に登録され、エコツーリズムもモデル地区に指定されており、理想的な場所ではあるが、費用が……。屋久島案を現実にな近づけてくれたのは同じ班員の行動力だった。打合せの翌日に見積書がメールで送られてきたのには驚いた。各自が役割を果たしている、あとは自分がしっかりし

ないといけなのだと……。リーダーとしての進め方に悩んでいるときに森谷さんに言われた「リーダーは指示して、どつと構えてればいいよ」の一言で楽になった。早速指示書を作成し、行動を依頼した。そして、指示したこと以上に班員は答えてくれて、構えているだけになりつつあった（森谷さん、佐藤さん、北原さん、高橋さん　ありがとう）。当初、屋久島案に乗り気でなかったと思われる松井さんも企画が具体的になってくると、実現しましょうと事務局としてブッシュしてくれた。班員だけでなく産政塾メンバー全員の助け合い（予算が一番問題だったので）の精神で実現した企画となった。ただ残念だったのは、業務の都合で参加できない方が塾長はじめ数名みえたことだった。

当日、鹿児島県では大雨洪水警報が発令されているような状況であったが、産政塾塾生の日頃の行いの良さのおかげか屋久島ではほとんど雨に降られることはなかった。屋久町役場の日高氏から屋久島の気候や歴史、課題等について講義をしていただいたことにより、屋久島の自然のよさや問題点をより深く知ることが出来た。

次の日のエコツアーでは世界自然遺産条約や国立公園特別保護区等に指定されている西部照葉樹林の散策であった。さすがエコツーリズム大賞の優秀賞を受賞したツアーガイドであり、専門知識の豊富さだけでなく、私たちの住んでいる愛知県の自然と比較して話すあたりはプロ意識を感じた。自然を楽しめば、おのずとその自然を守りたくなるこの言葉どおり、屋久島の自然を堪能しているうちに守りたい、変わらないその姿をまた見たいと思ってしまった。そして、屋久島の知識が増えるたびに自分の住んでいる付近の自然環境をよく知らないことに気づかされた。自分の住んでいる周辺環境を

守りたいと思うなら、その自然を楽しむことが一番であるので、散策に出かけ、自分に楽しさを与えてくれるような新たな発見をし、皆で共有していきたい。

（深夜の議論（ニヨッキ）参加者の皆様、思い出は頭の隅にしまっておこう。）

【第六回 「絆（きづな）（郡上まつりにて）」】

郡上まつり、徹夜踊りで有名なお祭である。一度は行ってみたいと思っていたので、この企画はとも楽しみにしていた。郡上祭りは約一月以上の長期間行われることもあり、地域の協力なしでは成り立たないお祭りであるとのことであった。講師のおどり保存会会長から「おかげさまで」という感謝の言葉が発せられたのは、皆のおかげでお祭りは支えられていることを一番に感じておられるからなのだと。「おかげさまで」の精神はとても大切なものであり、今の世の中で忘れ去られているようにも感じる。自分さえよければいいのではなく、誰のおかげで生活できるのかを考えなくてはならない。

参加した郡上祭りでは、会長のお情けと思われるが、踊り免許（さわぎ）をいただけたのは嬉しかった。次は実力で・・・。

【第七回 殻の外へ踏み出そう】

全五回の企画で殻の外に踏み出せたのか、いつたい殻とは何なのか。自分の目標、先入観、自分を守るもの等様々な意見が出された。改めて感じたのは殻とは漠然としたものなのではないだろうか。殻なのにはつきりしないものとは不思議な感じがするが、人によっても異なるし、その時々状態でも変わると思われるからである。

では、殻から踏み出せたのか。今までに参加した企画やその中の議論で殻から踏み出す方法を手に入れている。それらで得られたことを実践したときにはじめて踏み出したと言えるのではなからうか。踏み出した途端に新たな殻は出来るが、またそれを踏み出す。これを繰り返して人は成長していくのだと思う。

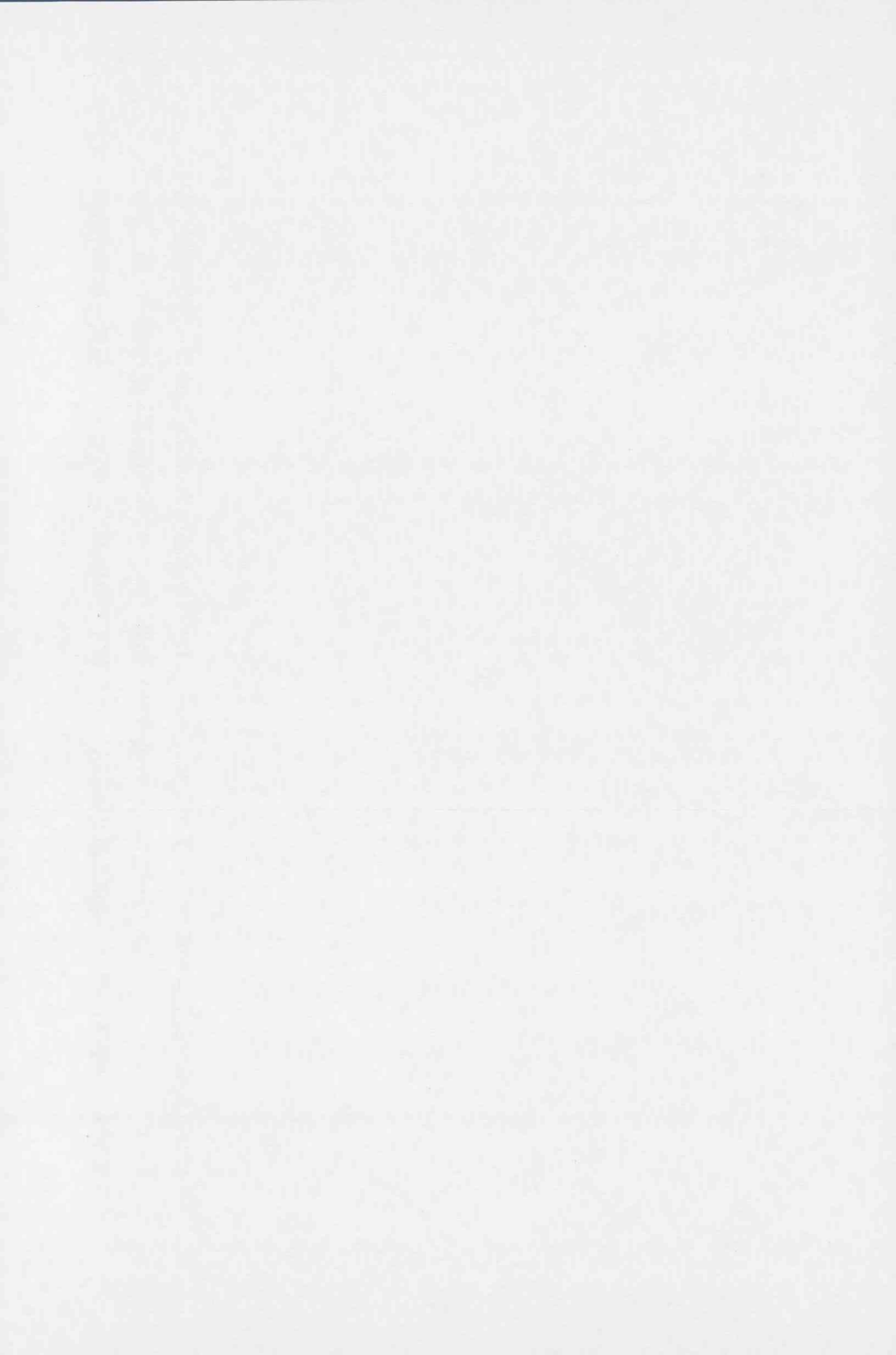
【最後に】

第十八回の産政塾に参加させていただき、自分の甘さを認識することができた。当初に思っていた仕事の慣れに対する思いは変わりつつあるのかと思う。ただ、その思いを継続することが難しい。そのときはこの塾誌を読み返し、殻を踏み出すための方法を再度入手したいと思う。

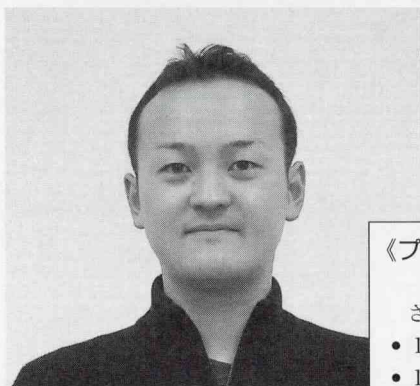
今回の産政塾に推薦してくださった上司、皆勤したために迷惑をかけた同僚の皆様、皆様のおかげで有意義な経験を積むことが出来ました。ありがとうございました。

活動を温かく見守ってくださった東塾長、松井さん、中部産政研の皆様、ともに活動してきた塾生の皆様 楽しく有意義な時間を与えていただき誠にありがとうございました。

第八回産政塾でお会いできるのを楽しみにしています。発行されるころは第九回産政塾になるのかな。



産政塾を振り返って



トヨタ自動車株式会社

作 山 淳

《プロフィール》

さくやま じゅん (31 歳)

- 1976 年 12 月 福島県生まれ
- 1999 年 4 月 トヨタ自動車株式会社入社
人材開発部配属
- 2002 年 12 月 人事部へ異動
現在に至る

＜家族＞ 妻

＜趣味＞ 旅行、スノーボード、麻雀

■ はじめに

産政塾の活動は、約半年間と短いものだったが、塾生主導で練り上げた企画一つひとつが、新しい刺激に溢れ、学びや気づきの多い大変有意義なものだった。特に、各会合の構成がいずれも、体験や講義等を通じた「学びの部分」に加え、「議論する部分」が用意されており、久しぶりに枠に捉われない自由な発想で議論する機会が持て、楽しいものだった。

今回、塾誌を作成するにあたり、各会合を通じて、自分なりに考えたことを好き勝手に書き綴ってみたい。

■ 開塾に向けた思い

今回のような異業種交流会は、約8年間の会社生活で初めての機会だった。99年に入社し、現業系の社内向け教育部署に配属されて以降、個別人事管理を2年、労務管理を5年と、一貫して人事機能に所属してきた。比較的、社内向けの業務が多かったこともあり、様々な業界・業種の方々との意見交換ができる産政塾への参加を心から楽しみにしていた。

事前にいただいた資料を見ると、産政塾のメインテーマは、「殻を破る」とのこと。恐らく、自分の持っている枠、つまり限界線みたいなものを、いろんな意味でチャレンジブルに打破しようということだ

ろう。確かに、社会人は、明文化された法律だけでなく、社会の暗黙のルールや規律を遵守しなければならず、それに伴い、制約も多く受けるので、学生時代のような柔軟な発想が難しくなっているような気がする。そういう意味で、「殻」が分厚くなつた感（漠然と）ある。一般的にもそうだろう。組織に属すると、組織の風土に馴染み・慣れ、初めは多様な個性やパーソナリティの持ち主たちが、徐々に組織に順応していき、いつの間にか、価値観や考え方が近似・同質化してくるものだ（没個性的というネガティブな意味ではない。組織理念の周知や、チームワーク・コミュニケーションといった組織運営や労務管理において、極めて重要な要素である）。事実、私自身も諸先輩方・同僚との関わりや職務を通じ、企業風土や理念等を学び、一定の「常識」のようなものを形成してきたと思う。

しかし、その一方で、「それは、あくまで社内的な常識なのではないか」「世間の常識と乖離してはいないか」という思いも、会社生活が長くなるにつれ、より大きなものになっていた。今回は、そんな思いも、うまく解消してくれるような機会になればなあ、などと思いつつ、産政塾に臨んだ。

■第1回企画（豊田市消防署にて…組織力とは。日本人の良さ・美德。）

いよいよ開塾！

（開塾式は終えたものの）塾生の表情にはまだ硬さがあり、一定の緊張感が漂う中での進行だった（後半の会合になるにつれ薄れていき、第4回あたりからは皆無となったこの緊張感…）。

そんな中、第1回は、豊田市消防署の見学。消防署員の方々は、市民の人命を守るといふ重大な使命を担っている。現場31年という指揮官の方に、常に意識している点から、日々の取り組みまで幅広くご講義いただいた。消火や救助といった危険を伴う難度の高いミッションに対して、体力や技量といったフィジカルな要素以上に、いわゆる「心・技・体」における「心」を重視し、特に、「規律・礼儀の精神」は徹底的に鍛え上げるそう。実際、入隊したばかりの新人や若手に対しては、この部分の指導に大半を費やすという。

消防隊員の活動は、チームで行う。如何に、統率を乱さず、迅速に対応できるかが、生死の分かれ目ともなる。統率を維持するためには、隊員一人ひとりが、隊長の指示を確実に守るとともに、周りをよく見て、他のメンバーの動きを把握することが重要であると、指揮官は言っていた。実際に、実地訓練を見学した際も、一糸乱れぬ動きの中に、大きな声やゼスチャー等の点呼・合図で、周りを把握し、組織で対応している様を目の当たりにした。指揮官が熱く語っていた「規律・礼儀の精神」も垣間見ることができた。規律は、単なる規則やルールだけでなく、隊長や先輩の教え・指示に従うことでもあり、流れるような指示伝達、そして、随時行われる報告がまさにその教えを忠実に守った姿だった。礼儀についても、「相手を知り、理解し、そして、重んじること」と指揮官が言うように、連動した動きや迅速なサポートなど、日頃の鍛錬の賜物だと感じた。規律・礼儀の精神の体現こそ、強固な組織力の源泉であると痛感した。

民間企業においても、昨今、「心・技・体」の「心」の弱さ・脆さを問われることが多い。私自身、

労務の担当として、精神疾患と呼ばれる、ある種の時代病の流行や、「心」のズレとも言うべきか、若手社員の社会性の欠如・環境適応能力やコミュニケーションスキルの低下など、企業として取り組むべき課題に通ずるところもあり、学ぶところが多い体験であった（大きなヒントをいただいた気がする……）。

さて、「規律・礼儀」といったメンタリティの重要性を再認識した我々は、「（規律・礼儀などは）日本人の良さである」との結論に達し、改めて「日本人の良さ・美徳」について議論することとなった。私は、日本人の良さは、「想像力」ではないかと思っている。日本人特有とは言わないまでも、少なくとも日本人の想像力は、他に秀でていると思っているし、私自身、最も大事にしていることもある。よく引用される事例だが、日本人と外国人が、並んで桜の花を見たとき、外国の方は「Beautiful」と考え、そう発する（と言われる）。一方、日本人は、桜の花を見て、長い冬の終わりと春の訪れに感謝したり（東北育ちの私は、厳しい冬を越えたと、本当にこの思いに駆られる）、桜の花が短い間で散っていく様子を想像し、はかないものと捉える（と言われる）。見たものの奥にある何かを、一歩踏み込んで感じ取る力（＝想像力）を有する日本人の良さを表現したエピソードだと思う。日本の歴史的な定型詩である俳句にしても、詠み手の感情や趣旨が、ダイレクトに表現されているものよりも、一定の韻律と季語などから、じわじわと湧き出るようなものや、想像を掻き立てるものが良作と言われ、この点からも、想像力を重視する日本人の特徴がにじみ出ているのではないかと思う。

想像力は、社会生活でも、極めて重要な要素であると思う。「自分の言動が、相手にどんな心証や

影響を与えるのか」を想像しながら、立ち振る舞えるかどうかは、まさに想像力の発揮であり、自分の置かれていた環境で、所謂「うまくやっていく」ために、極めて重要な要素であると思う。

会社も同様。職場内でのトラブルを回避したり、マネージャーであれば、部下との良好なコミュニケーションの醸成にも一役買うだろう。目配り・気配り・心配りができる力とも言えるかもしれない。今回の議論で、「勤勉さ」・「チームワーク」・「武士道精神」など、様々な意見が飛び交った後、「やっぱり日本人っていいよね」的な雰囲気になったのが面白かった（笑）。

■第2回企画（名古屋地方裁判所にて：裁判員制度について知る。）

第2回は、名古屋地方裁判所において、「非日常体験」がテーマだった。私自身、裁判所に足を運ぶのは、初めてではなかった（興味で何度か見学したことがあった）が、近々、国民の義務となる裁判員制度について学ぶということで、大変楽しみにして臨んだ。

前半は、刑事・民事それぞれの裁判を傍聴した。判決の瞬間、緊張が走り、その後、当事者がそれぞれ一喜一憂するという、人間模様も垣間見れた。

後半は、塾生が裁判員となり、模擬裁判を行った。証拠品や状況が、ある程度与えられた状態で、「故意か過失か（これにより、罪状が変わる）」と「量刑（刑期・執行猶予等）」について議論した。私は、感情移入せず、第三者の立場で、事実の積み上げによってのみ判断しようと考えだが、いざ審議に入

ると、感情や憶測が邪魔をして、満足いく判断に至ることはできなかった。勿論、本番では、百戦錬磨の裁判官から適切なアドバイスがあり、他の裁判員からも、自分の見逃していたような観点の意見があり……と進行していくのだろうが、「とにかく難しい」との印象だった。

職員の方から、同制度のねらいについて、「裁判がより身近なものになること」、そして、「世論や社会の動きを反映した、より社会性の保たれた判断となること」を目指しているとの趣旨の説明があったが、まずもって、個々人が、常識や社会性の有する人間にならねばならないと強く思った。

また、裁判員制度は、個人の義務に限ったものではない。法人も寄与できる部分も多いし、行政からの期待も大きいと思う。現状、企業の役割としては、裁判員として派遣しやすい就労環境の整備や制度設計等がよく言われるが、更に一步踏み進んで、同制度を正しく理解するための情報提供や支援等を行っても良いと思う。

今回は、まさに「非日常体験」だった。殺人未遂か過失傷害かを争点とする模擬裁判は、「テレビドラマの世界」だった。しかし、今後、この「テレビドラマの世界」が現実を訪れる可能性が、誰にでもあるのだ。裁判員の役割を果たすことができるかどうかは別として、当事者になりうるという心構えができたことが一番の収穫だった。

■第3回企画（海陽学園にて…リーダーを育てる人材育成。）

第3回は、私自身が所属するチームの企画。テーマは「リーダーを育てる人材育成」。蒲郡市に昨年設立された「学校法人 海陽学園」の見学だ。日本の教育制度の枠にとらわれず、社会に貢献できる人材や世界で活躍できる人材を育てたいとの思いで設立された学校で、メディアでも取り上げられる注目の学校である。

まずもって、今回、ご多忙の折に、快く受け入れていただいた海陽学園の事務局の方々にお礼申し上げます。

施設見学に加え、事務局長からのご講義、フロアマスターとの意見交換、クラブ活動（剣道）など、お忙しい中で、様々な体験をさせていただいた。

今回、残念ながら、業務の都合で当日は参加できず、事前打ち合わせまでの関わりとなってしまったが、その中でも、人材育成にかける思いの強さをひしひしと感じた。生徒達は全寮制（外出も原則禁止）であり、ややもすると、閉鎖された世界の中で、社会性が欠如してしまうかもしれない。私自身もそのような疑問を、当初抱いていた。しかし、この最も多感な時期の生徒達（中学生）に対し、教師、フロアマスター、事務局の方々が一体となつて、知識・教養、そして、人間性も育んでいる様子を伺うことができた。勿論、設立2年目という事で、「大学受験」という枠組みの中の成果はまだ出ていない。近い将来、「受験」という視点で、世間が、海陽学園を評価する時期も訪れるかもしれないが、それに負けずに大きな大義に向かつて、「殻」を破つて、突き進んでほしいと心から思う。

■第4回企画（屋久島にて…エコツーリズムを体験。）

第4回は、塾生誰もが最も楽しみにしている鹿児島県の離島「屋久島」への宿泊企画だ。私自身、鹿児島県の地に足を踏み入れるのも初めてで、ウキウキした気分で臨んだ（正直、研修であることは、忘却のカナタ…）。

本企画の趣旨は、観光とエコを結びつけた「エコツーリズム」という新しい概念を先駆的に取り入れている屋久島で、その基本的な考え方・意義・効果等を学ぶというものだった。

観光業は、あくまでも「商い」であり、経済的利益の追及が根底にあるため、ややもすると、ありのままの自然を、客足が伸びるよう、開発・破壊してしまうこともある。一方、エコは、環境保存・維持を第一とした考え方であり、相反する。「エコツーリズム」は、その二つを融合し、「環境を守りつつ、利益をあげる」ことである。

屋久島町観光課の方のお話では、屋久島の住民は、「自然を愛し、守り、自然と共存し、その恩恵を受けてきた」という思いが強かったため、当初は、観光地化には必ずしも積極的という訳ではなかったそうだ。しかし、徐々にメディア等に取り上げられるようになり、観光客も自然と増加したらしい。その後、観光推進派と自然保護派の対立も経て、「エコツーリズム」を取り入れたという歴史があるようだ。実際に、翌日のエコツアーで、案内役の方から「屋久島の自然を後世に引き継ぐのは、私たちの役目です。良い自然を保つことで、もっともつと多くの方に屋久島の自然を知ってもらえるんで

す。」という言葉があり、エコツアーリズムの真髄に触れた気がした。

ちなみに、今回は、砂浜でウミガメの産卵（ウミガメはやっぱり泣いていた……）を見たり、深夜まで飲み、語り続けるなど、趣旨以外の部分でも、塾生の結束が強まる素晴らしい企画だった。

■最後に

産政塾のテーマである「殻を破る」については、実践できたかどうかは未だに分からない。しかし、開塾前に「分厚くなつた」と感じていた「殻」は、社会や組織の制約の問題ではなく、個人の意識の問題であり、自らの足を一歩踏み出せば、自分次第で何とでもなるということを学んだ。さつそく明日から、一歩踏み出してみようと思う。そう考えると産政塾の企画を一つ体験することに分厚い殻が削り取られていったのかもしれないと思った。

最後に、すばらしい機会を与えてくださった東塾長はじめ中部産政研の方々、そして、塾生の皆さん、更には、快く送り出してくれた職場の皆さん、本当にありがとうございました。

「三つのモットー」



松坂屋労働組合

佐藤 正 樹

《プロフィール》

さとう まさき (31 歳)

- 1999 年 (株) 松坂屋入社 紳士スーツ、コート売場配属
- 2002 年 松坂屋労働組合名古屋支部書記次長 (専従)
- 2004 年 松坂屋労働組合中央執行委員 (専従) 現在に至る

＜家族＞独身

＜趣味＞映画鑑賞、音楽鑑賞、殻を破れない
スノーボード

1月にスタートし、塾生の皆さんと楽しく充実した時間を過ごすことができた産政塾が修了した。今回卒業論文を書くにあたり改めて産政塾に申し込んだ動機を確認したところ、『殻の外へ踏み出そう』というテーマにひかれました。今年30歳を迎えましたが、今まで自分の殻を認識したことはありません。10年後、20年後の自分が今の自分の殻を破って成長しているための機会にしたいと思います。』とずいぶん格好いいことが書いてあった。

会社に入社して9年目になるが、そのうち労働組合の専従を5年経験しているため、半分以上の企業人生を専従として過ごしている。仕事は充実しており、それなりにやりがいも感じているが、今の自分は時間管理をうまくコントロールできていないとつくづく思う。仕事を中心にした時間の流れの中で動いていて、気がつけば1日、1週間、1か月があつという間に過ぎていく。今後の自分の人生設計もままならず、未だに「自分の殻」を認識することはできていないし、仕事や家族、友人のことなど自分以外のことを考えている時間は結構あるが自分についてゆっくり考える時間はほとんど持っていない。

この機会に自分のモットーを確認し自分自身を見つめ直してみようと思う。

「なんとかなる」

自分には普段意識しているモットーが三つあり、その一つ目は「なんとかなる」。

一休禪師が、「大丈夫、心配するな、なんとかなる」という名言？を遺しているが、今までの人生の中でも、自分にとって一大事の出来事が起きれば、まずは、自分自身に「なんとかなる」と言い聞かせるようにしている。

「適当」という言葉はあまり良い意味で使われることは少ないと思うが、自分の好きな言葉の一つである。何ごとにおいても適当に目標を持ち、責任を取って、あきらめる。今の自分が抱えている問題が解決されなくても、世界が終わってしまうほどの大きな問題ではないし、明日のことはもちろん、すぐ先の命も正直分からぬ。決して後ろ向きの発想ではなく、どんな状況になっても最終的には「なんとかなる」と前向きに考えたい。

自分がこのような考え方を持つようになったのは、きっとこれまでの人生の中で半歩違っていれば天に召されることになった経験が3回ぐらいあったからだと思う。結果的にはなんとかなって今の自分がいるし、これからいちばん長く付き合う自分自身の力を信じて「なんとかなる」と考えていきたいと思う。

「反省すれども後悔せず」

二つ目のモットーは「反省すれども後悔せず」。

反省は役に立つが後悔は役に立たないので意味がないと思っている。後悔と反省は自分の心持ち一

つで変わるものだと思うが、これまで反省した経験は数知れず、後悔したことが実は一度だけあり、どこまで自分を問い詰めても未だに満足できる罰を与えることができていないため、間違ひなく一生背負っていく出来事だと思う。これからも多くの失敗を積み重ねていくだろうが、後悔しないほど考え抜いた上で決めたことであれば結果が悪くても全て引き受け、昨日の失敗より明日の可能性の方を大事にしていきたい。

昨年三十路を迎えた。迎えたところで、何がどう変わるわけでもないが、この一年間は、会社が統合する、5年近くお付き合いをさせていただいた女性と別れるなど、比較的人生の中でも激動の時期であり貴重な経験をすることができた。これからも様々な出来事があると思うが、いったん後ろを振り返ることはあっても、もう一度前向きになつて次の行動に活かしていく反省、反省、また反省の姿勢でありたい。

「学問なき経験は経験なき学問に勝る」

三つ目のモットーは「学問なき経験は経験なき学問に勝る」。

2年前に、労働組合のセミナーでタイ、カンボジア、ラオス国境周辺に地雷除去の視察に行った。地雷や戦争とは無縁な現在の日本で生まれ育つた自分の頭の中で今まで抱いていた地雷に対する漠然としたイメージは、地雷で傷ついた人の写真や爆発する光景などの情報を、新聞やテレビ、映画といっ

た媒体を通じて得た知識であり死んだ知識であった。理解しているつもりになっていた「地雷」や「地雷除去」について、実際にこの目で確かめることができた衝撃は一生忘れない。その時の経験は今でも様々な場面で話をする機会があるが、どんな理屈や論理より経験した言葉で語る方が強いことを実感している。また、様々な経験で刺激を受け、世の中を違った視点から見ると、自分の自信につながり、人とのコミュニケーションをより円滑にすることができると思う。

これからも仕事、私生活に関係なく、多くの場面で自らの意志で行動、決断することが求められてくるが、物事は順調に進むことばかりではない。そのような時でも、自分の経験や活きた知識で新たな工夫や挑戦をしていきたい。

「徒然なるままに」

最後に、最近思い感じていることを気の向くままにつづりたい。

ここ数年、「人」と「人」との間で体温を感じることができるとコミュニケーションが本当に少なくなってきたと感じる。その背景には、携帯電話やインターネットなどの普及などにより、他者と直接接することがなくても、表面的なコミュニケーションを図ることができるとが一因としてあると思う。

また、企業内では、雇用形態の多様化、個人の価値観・就業意識の多様化などコミュニケーションを日々積み重ねていき、職場内での信頼関係を築くことが難しい環境にある。

昨年(5月)に、(社)日本経済団体連合会が「新たなコミュニケーションの構築に向けて」を発表し、企業内コミュニケーションの重要性を説いていたが、組合役員としての仕事に携わっていると、企業が健全に成長・発展していくためには、企業内におけるコミュニケーションをどれだけ充実させるかがとても重要であることを実感する。

最近、食品関係を中心に様々な企業で不祥事が相次いで発覚している。多くの企業が法令を遵守する姿勢を明確に示しているにも関わらず、なぜ企業の不祥事が後を絶たないのか。

その原因は様々だと思うが、一つには、業種・業態に関係なく、企業は効率的な経営によって生産性を向上させていかなければ市場から淘汰される状況にあり、その結果、社会的責任よりも収益を最優先してしまう実態が多くあるからだと思う。

そして、もう一つには、企業内のコミュニケーションが機能していない側面があると思う。企業の不正が発覚するケースの多くは内部告発であるが、経営と現場、現場同士のコミュニケーションが円滑に機能する風通しが良い組織風土が構築されておらず、不正を自分たちの力で改善できる仕組みもできていない。

コミュニケーションの大きな目的の一つは「人」を動かすことである。どれだけ素晴らしいマニュアルを作成し、他社より抜kindでたシステムを構築しても、実際に運用するのは「人」であり、業種・業態に関わりなく企業にとって最大の経営資源が「人」であることに変わりはないと思う。

労働組合の役員として業務に携わる中で、デイズニールランドを経営している(株)オリエンタル

ンドやリッツ・カールトン・ホテルなど、マニュアルを超えるサービスを従業員一人ひとりが実現し、「人」が活き活きと働いている素晴らしい企業を知る機会がある。デイズニールランドにはマニュアルを破つてでも、自分の判断で顧客に感動を与えた話がごろごろしている。企業は人間的な力を最大限に引き出す仕組みや組織風土を構築するとともに、仕事に対する動機付けを与える。従業員一人ひとりには感動を自分たちで見つけだし、作り出すものという意識で日々の業務に邁進する。そのような中で円滑なコミュニケーションが実現し現場の一体感が醸成されることで、企業の組織としての完成度は高まっていくものだと思う。

コミュニケーションの重要性を肌で感じる機会が多いが、一方で、自分のスキル・能力が不足していることもあり、相手に自分の考えていること、思っていることをきちんと伝え、お互いが深く理解し合えることは本当に難しいと感じている。労働組合の役員として、これからも現場のコミュニケーションを向上させる取り組みを常に意識し、自分の立場でできることを判断し行動していきたい。

「最後に」

世の中には多種多様な価値観が存在しているが、物事を判断する基準として、自分自身の価値観ではなく、既成の概念で常識的な無難な考え方を採用することが多い気がする。これは一つの「殻」であると思うし、自分は極力破っていきたい。

8月には31歳になり、産政塾も含めた様々な機会を通じて多くの経験を積み、“気づき”を与えられていることは自分の成長の糧になっていると思う。産政塾を通じて知り合うことができた皆さんに改めて感謝したい。ありがとうございます。

これからも常に目標・目的を掲げ、今より充実した時間を過ごす中で、日々反省を繰り返して成長していく。そんな自分をまた皆さんに披露できるように頑張ります！

「産政塾を振り返って」



株式会社デンソー

島田 裕毅

《プロフィール》

しまだ ゆうき (34歳)

- 1973年 11月 4日 神奈川県生まれ
- 1998年 4月 (株)デンソー入社
現在に至る

＜家族＞ 妻、長女（1歳）

＜趣味＞ 特になし

1. はじめに

昨年のある日、上司から「産政塾へ参加してみないか」と声を掛けてもらった。どちらかと言うと人と接するのが苦手な私は、その苦手意識から「私以外の方がふざわしいのではないか」と思い、参加に対して少し「腰が引けた」のが実際のところである。

しかし、過去に参加した方から「色々な経験ができ、人脈も広がる」との話しを聞き、人と接するのが苦手な私だからこそ、見聞を広め人脈を広げる必要があると考え、とりあえず参加を決意した。

参加を決意したものの、産政塾の活動テーマが「殻を破る」ことだと知り、参加に対して再び気が引けた。なぜかというところ、「殻を破る」ことは、自分の更なる成長になると頭で理解していても、実際に非常に難しく勇気の要ることである。自分の「殻」に閉じこもっている方が「楽」である。

とは言うものの、既に上司に参加する旨を伝えていた中で、今更止める訳にもいかず、数回ある活動に一応参加すれば体裁は整うと考え、申込書を記入した。

上記のように非常に後ろ向きな思いを持ちつつ参加することになった訳だが、実際に参加し、振り返ってみると、素直に「楽しかった」という感想を持っている。活動テーマである「殻を破る」ことができたかというところ、そこまでは至っていないが、様々な貴重な体験やメンバーとの交流を通じて、これまでの自分を見つめ直し、自分の「殻」を知る第一歩を踏み出すことはできたのではないかと思う。そのことについて、各活動内容と共に振り返ってみたいと思う。

2. 活動を通じて

(1) 第2回活動

① 活動内容

『チームワーク、組織力を学ぶ』をテーマに、豊田市中消防署を訪問させてもらった。当日は、消防隊員の方から「チームワークとリーダーの役割」について講演頂いた。また、隊員の皆さんが行う訓練を観るだけでなく、我々メンバーも規律訓練（歩行）やロープ訓練などを実際に経験させてもらった。

② 活動を通じて

通常、消防隊員の活動を目にする機会は多くない。実際に観たのは今回が初めてであり、貴重な経験をさせてもらった。特に、印象に残ったのが、救急要請に応じて患者の容態を確認・処置する場面での訓練であった。その訓練は、意識のない患者を、家族が心配のあまり横から口出しする状況下で、隊員が冷静に処置する為の訓練であった。隊員の皆さんは汗まみれになり、観ている我々の方が緊張するほど、張り詰めた雰囲気の中で行われていた。

この訓練を観て、消防隊員の皆さんのモチベーションがいかに高いかを実感することができた。そのモチベーションの高さはどこから生まれ、維持しているだろうか。活動テーマである『チームワーク、

組織力を学ぶ』からは若干逸れるかもしれないが、その点について、私なりに感じたことを述べたい。隊員の皆さんは、「人の命を守る」という絶対的な目標に向けて、使命感と誇りを強く持っていた。また講演の中で伺った「救助とは訓練をこなして経験を積むことである」ことを全員がしっかり理解していた。この点が隊員の皆さんのモチベーションの源ではないだろうか。つまり、救助という目標を「絶対達成しなければならない」という使命感・その目標を達成することへの誇り・目標達成に向けやらなければならないことをしっかりと理解することが大切であると改めて実感した。

一方、自分自身を振り返ってみると、入社して約10年が経過し、新入社員の頃に抱いていた「やってやるぞ」という思い・使命感が、徐々に薄らいでいるように感じる。何の為にこの仕事をしているのかを忘れることなく、使命感を持つて日々仕事に取り組んでいかなければならないと再認識した。

(2) 第3回活動

① 活動内容

『非日常体験く裁判員制度について知る・考える』をテーマに名古屋地方裁判所を訪ね、実際の刑事裁判の傍聴や架空の事件について裁判員としての模擬裁判を経験させてもらった。

② 活動を通じて

今回生まれて初めて裁判の傍聴を経験したことで、犯罪が身近に起こることであると認識し、恐怖

心を抱いた。これまで、犯罪は私の存在する“世界”とは全く別の“世界”で起こるものだと思っていたが、裁判では被告人が目の前に座り、時には目が合う状況の中で、実際の凶器も示されながら犯行の手口が説明される為、犯罪が非常に身近に感じた。

誰しも犯罪とはかかわりたくないが、現実として身近に発生しているのである。一社会人として、そうした現実を目を背けていく訳にはいかない。裁判員制度が導入されることで、一人ひとりがそうした現実を目の当たりにし、より安心して暮らせる社会にするにはどうすれば良いかを考える契機になるのではないかと感じた。

私自身も、昨年娘が誕生し親になったこともあり、安心して暮らせる社会にしたいとより強く思うようになった。社会で生活する一員として、自分のことだけでなく、“地域や社会をより良くする”といった大きな視点で物事を捉え、考えていきたいと思った。

(3) 第4回活動

①活動内容

『人材育成の現場を知り、情熱を知る／将来の日本のリーダーを育てる』をテーマに海洋学園を訪ねた。海洋学園は、創立間もない中高一貫の全寮制の学校であり、将来の日本のリーダーを育成すべく、単に勉強を教えるだけでなく、日常生活を含めた人材育成に取り組んでいる。我々産政塾のメンバーは、学園の施設を見学させてもらうとともに、寮において生徒と寝食を共にし、生活・勉強の

両面でサポート・指導を行っているハウスマスターの方たちからお話を伺うことができた。

②活動を通じて

海洋学園を訪ね、その充実した施設・一流の教師陣等といった環境の良さにまず驚いた。通常の公立学校とは別世界と言っても過言ではない。そうした環境の良さの背景に「日本の将来のリーダーを育成したい」という強い思いを感じた。また、ハウスマスターの方たちの「生徒一人ひとりに対してどのように接すれば良いかを日々悩みながら、取り組んでいる」との言葉や、事務局長の「この学校の指導・育成の結果は、数年、或いは数十年後にならないとわからない」との言葉を伺い、人材育成の難しさを改めて認識した。

人材育成について、必ず成功するといった方法はないと思う。しかし、「相手の成長を導いてあげたい」という思いがなければ、絶対に成功することはないだろう。私も、職場において後輩と共に仕事をすることで、後輩との接し方や指導に難しさを感じている。時には、忙しさを理由に後輩の状況まで気を配れなくなってしまうがちである。今回の活動を通じて、「サポートしてあげたい」という思いを常に持ちながら、日々後輩と接しなければならぬと改めて決意した。

(4) 第5回活動

①活動内容

『人と自然環境との共生／エコツアーリズムから学ぶもの』をテーマに、屋久杉で有名な鹿児島県

屋久島を訪ねた。屋久島は、自然と人とが共生する“共生と循環”という思想のもと、自然環境の維持・向上と環境産業の発展を両立させるとのエコツーリズムの考え方を推進している。今回の活動では、一泊二日の日程で、屋久島町観光環境課長のお話をはじめ、紀元杉見学・ウミガメの産卵見学・照葉樹林の散策といった内容を通じて、一人ひとりが環境問題についてどのように向き合うかを考える機会となった。

②活動を通じて

地球温暖化の問題をはじめ、環境問題については、地球で生活する我々一人ひとりが取り組まなければならぬものである。しかし、そのことを頭で理解していても、実際に行動するとなると、非常に難しいのが現実である。

私自身については、企画グループの用意した事前アンケートを通じて、これまでの環境問題に対する行動を振り返ったが、何も行動していないのが実態であった。それは、自然環境について心から危機感を抱いたことはなく、“環境問題への取り組み”というところ、何か“崇高”な活動を行わなければならないというイメージを持っていたためである。そんな思いから、今回の活動についても、少し気が重たかったのが正直な気持ちである。

しかし、今回の活動に参加し、照葉樹林の散策時にガイドの方から「環境について難しく考える必要はない。自然を楽しめば、自然に対して興味を持ち、この自然を次の人に引き継ぎたいと思うはず」という言葉を聞き、環境問題への取り組みに対するイメージが変わった。“自然を守らなければなら

ない”という思いから特別な活動を行うのではなく、気楽に自然と接すれば良いのである。散歩の途中で近所の植木や川の様子を目にすることから始めたいと思う。

(5) 第6回活動

①活動内容

『絆(きずな)』をテーマに岐阜県郡上市を訪ね、徹夜踊りで有名な郡上踊りを体験した。当日は、郡上踊り保存会会長から郡上踊りの歴史などについてお話を伺った後、実際の踊りの講習を受け、祭り会場で踊りに参加させてもらった。

②活動に参加して

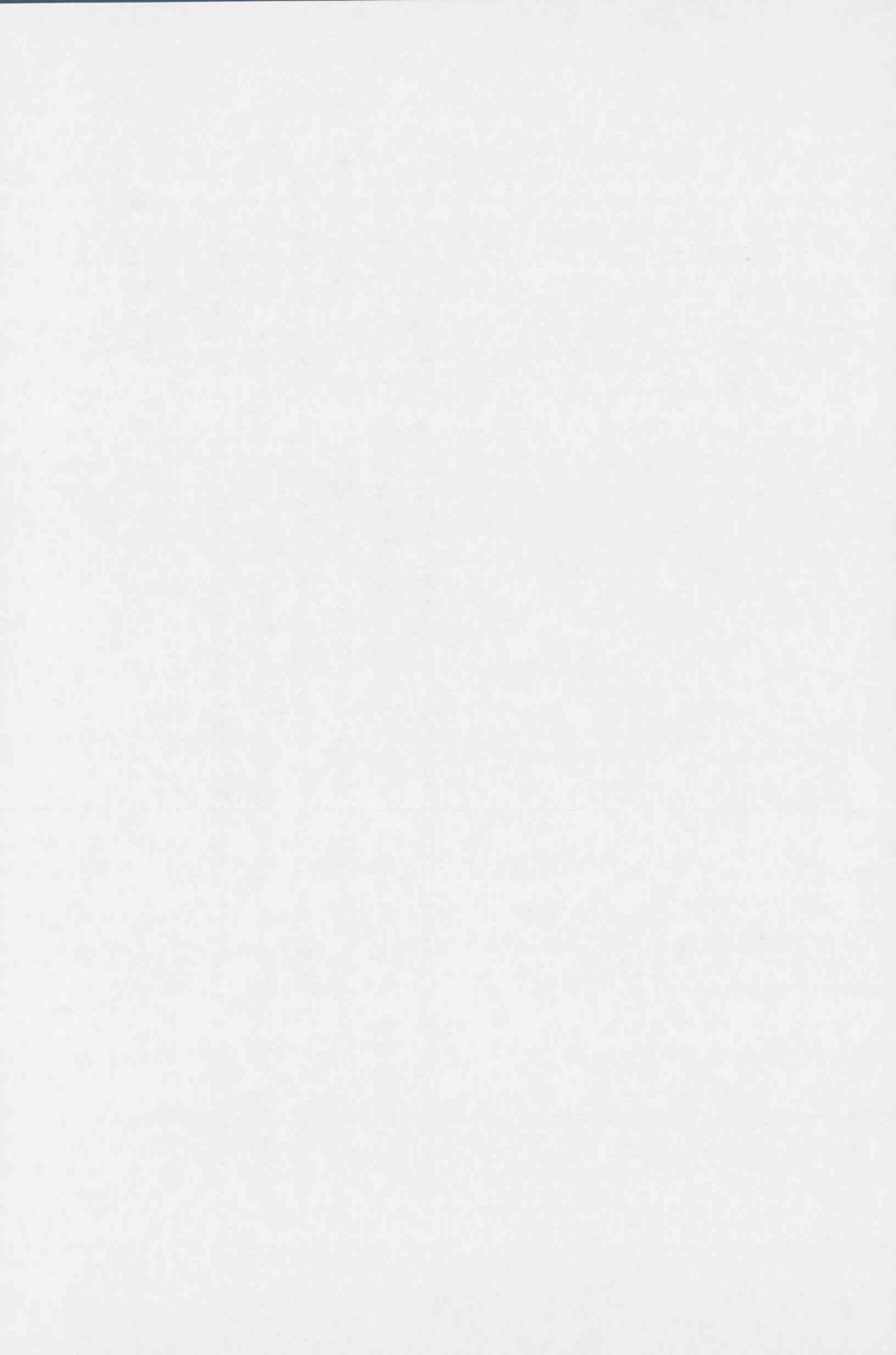
郡上踊りは400年を超える歴史を持ち、江戸時代において土農工商の融和を図るため、それまではバラバラに踊られていた祭りを盆踊りの夜に集め、奨励したことが始まりである。また、多くの旅人を受け入れた結果、踊りの種類が増え、現在の郡上踊りとなった。つまり、他を受け入れることが郡上踊りの原点になっているのである。

また、保存会会長より「多くの方に協力頂いて祭りは成り立っている」「お蔭様で」という言葉を聞き、郡上踊りが400年を超え受け継がれてきた背景に、「感謝の気持ちを忘れない」ことがあると感じた。会社をはじめ社会で生活する上では、様々な人とのかわりが生じる。感謝の気持ちを忘れることなく、人と接するよう努めたいと感じた。

3. やさしい

産政塾に参加したことで、通常では経験できない貴重な体験をさせてもらった。参加にあたっては、“後ろ向き”な思いだったが、通常の生活とは異なる体験をすることで、自分自身を振り返る良い機会を得ることができた。今では、こうした機会を与えてもらったことに感謝している。今回の活動を通じて感じたことを“心の糧”とし、これからの会社生活・人生に生かしていきたい。

最後になりましたが、東塾長はじめ事務局の松井さん、スタッフの方々、また、塾生の方々、そしてCグループの皆さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願います。



精神の大改革 !!

産政塾的 ビフォーアフター



アイシン精機株式会社

白 井 雅 子

<プロフィール>

しらい まさこ (29 歳)

- 1978 年 愛知県豊橋市生まれ
- 2002 年 アイシン精機(株)入社
人材・安全衛生部人材開発 G
配属
- 2006 年 人材開発部海外支援 G 所属
現在に至る

<家族> (まもなく) 夫 (の予定)

<趣味> スキー、F1 観戦、料理
British English に触れること

殻とは？殻の外とは？

「人生について、そして自分について模索を重ねています。新入社員のきらきら輝く目を見て、自分が何かを忘れているような、何かをなくしてしまったようなそんな気持ちにさせられます・・・自分がもつと輝けるもの、もつと集中して心を込めて取り組める何かを求める気持ちを感じています。」（入塾の動機より抜粋）

こんな思いを抱いていたため、私はまさに殻の外に踏み出したい、と思いながら入塾しました。私は、殻については、社会人になり年齢を重ねていくうちに、いろいろなしがらみやら世間体やらにより固められた厚い殻だと捉えていました。産政塾を通じて破ったものの、それは、『自分が自己保身のために固め上げた殻』でした。この殻の存在に気づきつかけになったものの、そして、殻を破るきつかけになったものについて、今一度振り返ってみようと思います。

殻の外へと通じる道はすぐそこにあった！

殻を破るため、我がBグループは『非日常体験』を企画の核としました。厚い殻の外に飛び出すために、いつもとは違うことⅡ日常ではないことを体験し、新しい自分を発見しようと考えました。女装や、鶏をさばく、スカイダイビングなど壮大な企画もあったなかで、結局、たどりついたのは、裁

判の傍聴でした。当初の目的とはすこし違い、日常でもない、でも非日常でもない世界、そんな世界の体験へとつながる企画でした。企画グループだったこともあり、裁判を通して感じたものは少なくありませんでした。

私個人は、裁判所をはじめて訪れたのですが、まず、その独特の雰囲気には圧倒されました。当事者意識のない私たちのような第三者。今から判決を言い渡されようとしている被告人に、傷を負った被害者、そして、それぞれの家族。世間から見れば「悪いことをした」被告人の正義を守る弁護士。この異質な（と私には感じられた）組み合わせの中に突如入った私は、言葉でどのように表現していいのか分からない感情を抱きました。どんな気持ちで裁判の傍聴に臨めばいいのか分からないという困惑した感情でした。

裁判は自分には関係のないものと思っていたのですが、実際に裁判所に足を運んでみると、『普通の、決して特殊ではない家族がいました。もし、私たち家族に、このようなことが起こったら・・・』と、思わず考えてしまうような、そんな『普通』の家族でした。そして、自分には裁判なんて関係ない、と言い切れない、そんな恐れのようなものを感じました。

自責の念に駆られながらも、被告人である息子の非を認め、その更生のために涙ながらに監督責任を受け入れる父親。息子が裁かれているのを目の当たりにし、涙の止まらない母親。『悪いことをした』息子のために涙を流す親たちの姿を見て、傍聴席にいた私にも、親の愛、親の無償の愛が伝わってきました。どんなことがあっても、親を決して泣かせてはいけない、そんなことを強く感じました。

さらに、印象深かったのは、裁判長による判決の言い渡しです。裁判長に対しては、無機質に、事務的に判決を言い渡すだけの冷たいイメージを持っていました。ところが、判決を言い渡した後、裁判長は、被告人に対して諭すように、判決に至るまでの関係者の思い、家族の支え、被害者への償いの心などを忘れないように、と語りかけ、更生への期待を伝えていたのです。その語りかけは、傍聴人の私にも、ずっしりと重く心に響き、裁判の犯罪抑止力を理解できたような気がしました。

「裁判の傍聴」という企画は、派手さや華やかさもなく、地味なものだったと思います。産政塾を通さなくても、裁判の傍聴は可能で、特別なこと、特殊なことをしたわけではありませんでした。そこでも、新しい世界、（というより忘れていた大切なこと）を十分発見できました。自分の身近なところには、まだまだ自分の知らない世界があり、その世界に触れることで、新しい考え方への糸口が見つかることが分かりました。その知らない世界に気づかないがために、得ることができていない何かがたくさんあるのだと、自分の殻に気が付きました。

何事も自分のコミットメント次第！

最近ではもう、若手と呼んでももらえなくなり、仕事量もそれなりに増えてきて、余分なことに首を突っ込むと自分を苦しめることになる、そんな積極性を欠く、逃げの姿勢で過ごすことが増えたような気がします。また、学生時代が遠い昔の記憶になりつつあり、全力で物事にぶつかっていたあの頃

を懐かしく思い出すようになってきました。むしろ、力をコントロールすることに注意を割き、力を出すことが二の次になりがちなのは、と思いながらも、やはり、コントロールしている自分がいます。そんなことから、すっきりしない思いを感じていたのですが、産政塾への入塾の機会を与えられると、「よし、何かをつかんでやるぞ!」と気合が入りました。欲張りな私は、この機会に得られるものは何でも得たいとも思っていました。「産政塾はすごいところだから」「産政塾に参加している人はすごい人たちだから」と、よくも悪くも入塾すれば自動的に何かが変わるかのように思いこんでいました。

女性の塾生がひとりということで、Bグループのリーダーを仰せつかり、皆さんに盛り立てられリーダーとしての役割を果たすべく力を注ぎました。グループメンバーと忙しい合間をぬって集合し、他の塾生にとって最高の企画になるように、自分も企画を通じて何かを得たいと、と知恵を出し合いました。力を出し惜しみすることなく精一杯がんばりました。その結果、いわゆる「おいしいところ取り」に終わらず、達成感を感じ、深く幅のある成果物を獲得することができたように思います。

また、他の塾生の企画に取り組む姿勢にも感銘を受けました。一方で、懇親会で心底楽しむ姿にも、みなさんのパワーの根源を見た気がしました。

当たり前のことですが、まあこのくらいでいいか、と8割の力しか注がなければ、自分が得られるものもその程度でしかないのです。楽をしようと思つてはいけない、面倒くさいは禁句で、目標にしっかり向き合つて、地道にこつこつと進んでいくことが成功への近道だったのだと、反省の思いに至り

ました。

「おかげさま」の心で。

産政塾を通じて得たの大きな収穫の一つは、「おかげさま」の心です。各グループの企画は、バラエティに富んでいましたが、どの企画からも、おかげさまの心を大切にしているというメッセージが伝わってきました。今まであまりおかげさまという言葉を意識したことがなかったため、とても印象に残りました。また、思い返せば、私には欠けていた心だったため、大きな気づきとなって、私の心に残ったのかもしれない。

産政塾に参加するにあたって考えていたことは、閉塞感というのか、この満たされないすつきりしない思いをなんとかしたい、ということでした。他人と比べた時の劣等感に嘆いてみたり、自分に与えられている仕事に対して不満を持ったり、周りの人に当たり散らしてみたり、そんなことをしないですむように、なんとか環境を変えたい、と考えていました。

ところが、産政塾を通して、この考えがいかに自分勝手なものだったかと反省しました。変えるべきものは、環境や他人ではなくて、自分なのだ、と気づいたのです。

自分の考え方、気の持ちようを変えることによって、得るものが変わってきます。見方を変えれば、地元の森でも、屋久島の自然と同様私に語りかけてくれるように、存在価値が変わってきます。人に

対してポジティブに接することなしに、相手からポジティブな反応があるはずありません。こんな考え方をするために共通に必要なものが、おかげさまの心、感謝の心ではないかと思うのです。

周りに対して、反発心や敵対的感情や素直ではない気持ちを持つていると、自分にプラスになることは何もないのだと思います。そうはいつても、いつもいつもニコニコしているわけにはいけないこともあります。そんな時、どのように気持ちを切り替えるか、それはおかげさまの心なのだと思います。この心が思いやりにつながり、関係や環境がよくなり、自分にとって周りの状況が好ましいものになると思います。

つまり、このおかげさまの心を知ること、謙虚な心を持つて、周りの人々に接することができるようになりました。おかげさまの心を大切にすることを覚えた私にとつて、殻というのは、他人によって作られたものではないし、押し付けられたものでもない、と考えることができるようになりました。殻を作っているのは、自分であつて、その殻を破るのも自分次第なのだと思います。

チャレンジ精神！

産政塾を通して、私には、自己成長するために必要な当たり前のことすら欠けていたことを認識することができました。さらに、自分を高めていくためには、やはりチャレンジ精神が必要だということも分かりました。

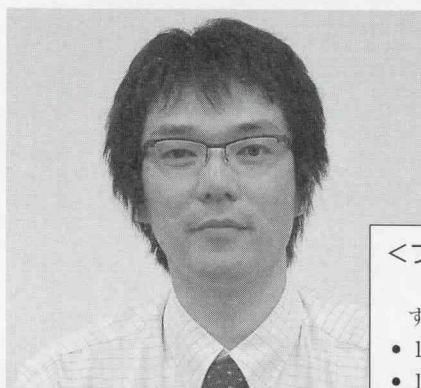
産政塾に参加している方には、このチャレンジ精神旺盛な方が多かつたと感じました。新しい世界は身近なところにもありますが、エネルギーを必要として開拓しなければ見えてこない新しい世界もあります。産政塾で実現困難に思える企画を成功に導いていた皆さんとご一緒させていただき、一步を踏み出して挑戦することの意義を改めて感じました。私は、常に少し冷めたところがあると自己分析しているので、エネルギーシユさも持ち合わせた存在になっていかねば、と考えています。

気づきとひそかな決意

私が産政塾を通じて学んだ、身近なアンテナ、全力で取り組む、おかげさまの心、チャレンジ精神など、これまで記してきたことは、ごく当たり前のことで、何をいまさらと言われることかもしれない。しかし、そのような当たり前のことを見失っていたことに気づくきっかけとなったことは、私の人生にとつては、とても大きな、そして重要な救いになったと思います。産政塾で得られたこのような気づきは、必要な時に思い出し、今後も自分の姿勢、モチベーションをチェックしていこうと思っています。また、身近な世界用のアンテナも、広い世界に届くアンテナもどちらも感度も常にチェックしていこうと思います。

産政塾は自己講座でひそかにずっと続けていく予定です。産政塾の精神は、永遠です！
どうもありがとうございました。

「産政塾へ参加して」



トヨタ車体株式会社

鈴木 雅 司

<プロフィール>

すずき まさし (33才)

- 1974年9月 愛知県生まれ
- 1997年4月 トヨタ車体(株)入社
人事部配属 現在に至る

<家族> 妻、娘1人

◆おしめし

先ずはじめに、このような貴重な機会を与え、また支えてくださった東塾長、松井さん、中部産政研の方々にお礼申しあげたい。また、産政塾の活動へ理解を示し、お土産を持ち帰ることを条件にいつも笑顔で送り出してくれた職場の上司、同僚、部下の皆にも感謝している。この場を借りて一言「ほんとにありがとう。」

第十八期産政塾生として卒業という一つの区切りを迎えるにあたり、これまで参加して感じたことなどを簡単にまとめてみたい。

◆産政塾のテーマについて

産政塾のテーマ「殻の外に踏み出そう」について今考えてみると、「殻」も「踏み出す方法」も決まった答えなんてないんだと感ずる。言い換えれば、答えは自分自身の中にしか無い、すなわち、自分で考え「殻」を規定し、それを自身の基準で超えたとき「外に踏み出す」となるのではないかと。だからこそ、産政塾の活動スタイルである「塾生が主体で行う」ということに意味があるんだと理解した。参加した当初、「殻」Ⅱ「既成概念」・・・「豊かな発想力・柔軟性の欠如」・・・はたまた「失われていく若さ」・・・と考えていた。それが、いろいろな考えを持つ仲間と交流し、様々な体験を行う

活動を通じて、少しずつ変わってきた。

◆自グループの企画について（回顧）

六月二十二日（金）午前九時三十分、海陽学園正門前、雨。日ごろの行いが悪いとイベント当日の天気も悪い。私たちのグループは、今回の企画のホストであるにも関わらず、見事に遅刻した。

「ねらいは完璧！アイデア豊富」当初はとんとん拍子で進んだ企画も、日程が迫るにつれて焦りが増してきた。実行のメドが立たず、日程も決まらない。ムズカシイ。最後は事務局の松井さんを入れた緊急対策会議が行われ、産政塾始まって以来の「企画案なし」という事態を回避した。「あれこれ言っているよりも実行することが大切」、反省。

わがままな私に気長につきあってくれた松井さん、グループメンバー、そして無理なお願いにも快く応じてくださった海陽学園の皆様改めて感謝！

◆各グループの企画に参加して

消防署、裁判所、郡上おどりの保存会など、訪問先は様々であるが、そこで感じたことは、訪問先の方々が皆一様に「熱い情熱」と「プロ意識」を持っているように見えたことである。仕事をするに

せよ、殻を破るにせよ、やはり何事も情熱がなくては……。今の私は、「情熱とプロ意識」があるか、周りの人から「サラリーマンのプロ」・「人事のプロ」に見られているか？ 自らを振り返り、いろいろと考える為のよいきっかけになった。・・が、何よりも、会合を重ねることに打ち解けて、塾生の皆とホンのつつこみ合いができたことが楽しかったのだが。

◆自分の「殻」について

「個性あふれて楽しい、それでいてしつかりとしたねらいがある」・・そんなたとえがしつくりくる。第十八期産政塾の会合は、そんな企画ばかりであった。しかし、そんな中で何よりも私が感銘し、「殻を破るヒント」を感じたのは、何をどこでやるかという企画の内容ではなく、松井さんと各グループの「企画」・「実行」までを推進していくパワーそのものである。皆さんの「自ら率先して実行する力」は、すばらしい。

私自身、入社十年が経った。教えられるより教える立場に変わりつつある中で、実行責任者よりも評論家になりつつあることを感じることがよくある。私自身、今後破り続けていかなければならない殻はこれなのかな。

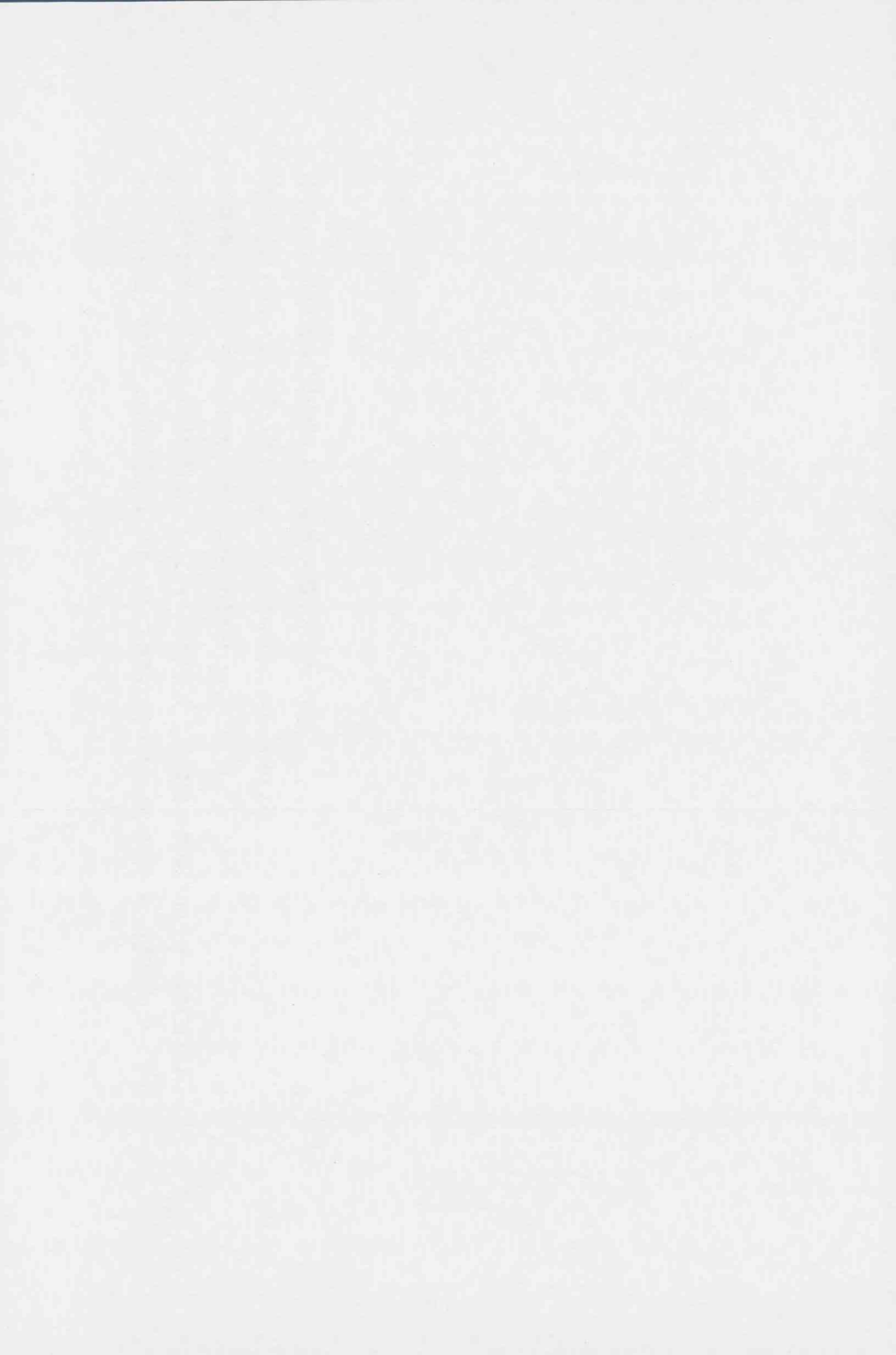
◆やがて

今月（十月）読んだ「産政研フォーラム」に東塾長から塾生へのエールが記載されていた。

短期的に成果が求められる昨今、このような将来への投資的な育成セミナーに参加させていただいた意味を重く受け止め、私たち塾生は頑張らなくてはいけない。

塾長からのことば「学び身につけることはまだたくさんある」

さいごに自分に言い聞かせて、本稿を締めくくりたい。



たくさんの「殻」



中部電力労働組合

高橋 弘行

《プロフィール》

たかはし ひろゆき (38 歳)

長野県飯田市出身 1969 年 1 月 31 日

水瓶座 A 型

- 1986 年 中部電力株入社
- 2004 年 中部電力労働組合本部執行委員
現在に至る。

〈家族〉 妻 1 人 娘 2 人 (中 1、小 3)
犬 1 匹

〈趣味〉 スポーツ全般 (バドミントン、野球、
水泳、ランニング)

【はじめに】

土木出身の私は、中部電力入社後、土木構造物の建設や保守の仕事に携わってきたが、平成16年の6月に突然の転機が訪れ、それまでと一転し、労働組合の役員としての生活が始まった。どちらかと言えば、技術者の端くれとして物相手の仕事をしていたが、人を相手にした仕事となり不安を抱きながら始まった専従生活も3年目を迎えていた。

産政塾に参加するには労組の推薦がなければ参加出来ないもので、きつかけは選んで頂いたことによるが、産政塾のテーマ？である、「殻の外に踏み出す」は、自分の中では苦手なことであり、足りないこと、そして必要なことだと思い前向きに参加しようと決め望むことにした。

【開塾式】

開塾式では、自己紹介の後、グループ毎に企画を練ることから始まった。私は、以前からキツザニア・東京に興味があり、産政塾への参加が決まった時から是非行きたいと思っていたが、あつさり否定されてしまった。当然と言えば当然である。キツザニア・東京は、子供がいなければ興味がわかない施設であり、独身者も多い産政塾において否定されるのは当たり前といえれば当たり前なのかもしれない。

自分の企画があっけなく没になってしまい意気消沈している中、環境に関するテーマが浮上してきた。仕事柄、環境に携わっていたことから、興味があったものの、環境に関するテーマであり若干固い企画になりそうなそんな雰囲気の中、グループ討議は終了したが、その後のグループ会合においては、私を含めどちらかと言えば慎重派の2人と、なんとかなる派の3人との攻防が繰り広げられた末、事務局の松井さんを説得することとなっていった。

【非日常体験 ～裁判員制度について知る・考える～】

第1回目の「消防署を訪ね、チームワーク、組織力を学ぶ」企画には参画できず、今回が初めての参画となった。裁判員制度??、間近に迫っている制度ではあるものの、自分には無関係な制度だと思っていたが、今回の参画を通じ誰もが当事者となりうる制度なんだということを理解することできた。

テーマの通り、裁判所に行くこと自体が非日常体験であり、当日に遭遇する1つ1つの出来事に興味が湧いていた。まずは、裁判所の概要について説明を受けた後、実際の裁判を傍聴することとなった。「窃盗」と「傷害」事件の両方を傍聴することができ、特に傷害事件の傍聴では、被告人の風貌から傍聴席との距離のなさに若干恐怖を覚えながらも、検察と弁護士の主張に耳を傾けていた。裁判所でのやりとりだけしか聞いてはいないが、事件を起こした背景にはいろんな要因が隠されていることを

感じる事ができたのと同時に、万が一自分が裁判員に選ばれた場合の難しさを感じながら、午前中のスケジュールを終えた。

午後からは、裁判員制度の概要と模擬裁判を体験した。模擬裁判は、傷害事件のビデオを判決の手前で一時中断し、グループ毎に判決を下し、その後、判決結果を見るというものであった。判決を下すための知識が何もない自分にとっては、感覚でしか判断できない状態であったが、裁判所の方にヒントを頂きながら、「殺意があるか」「執行猶予の考え方」「他事件における裁判結果」等を参考にグループ内で検討をした。結果は、ビデオ内での判決結果より甘い判決内容であったが、裁判員制度導入前に貴重な経験をする事ができた。

「人と自然環境の共生について学ぶ」

我がAグループのテーマである、「人と自然環境の共生について学ぶ」の実行を迎えるまでには、夏休みの宿題と同じで、せっぱ詰まった状況に陥るまではなかなか企画が決まらずに、環境をテーマにした企画にすることは決まったものの、行き先と目的がなかなか決まらない状態が続いた。慎重派の私は、職場の理解が得られやすい企画を考えるが、企画内容のインパクトが足りず、押し切ることができなかった。

そうこうしている内に、期限も迫ってきたこともあってか、難しいと思っていた屋久島への企画づ

くりが始まっていった。産政熟史上初の離島への企画でもあったが、他のグループのご協力により費用面での問題をクリアーし、事務局の松井さんの応援により企画の目的も何とかクリアーすることができた。そして何よりも、Aグループみんなの「屋久島へ行くんだ」という熱意により企画を完成させることができた。

そして、いよいよ出発の日を迎えた。中部国際空港はとても良い天気であり、企画実行には絶好のコンディションと言いたいところであったが、目的地である鹿児島地方は前線が停滞しており、いつ雨が降ってもおかしくない状況であった。心配が的中してしまったのだ。雨が多い屋久島ということはわかっていたが、自然をテーマにした今回の企画においては、自然に触れあうことが最大の目的であり、雨による中止が最大の問題であったのだ。

心配をよそに、屋久島上空からの眺めはよく、初めて見る屋久島の海の美しさに感動しながら、空港に降り立った。この時点ですでに目的の半分以上を達成した気持ちになってしまっていた気がした。最初の訪問箇所である屋久島自然館では、屋久島町安房支所の日高課長から、屋久島の自然環境の歩みや、観光と自然環境の維持・向上といったエコツーリズムの取り組みについてのお話を伺うことができた。中でも電力会社に勤める自分にとっては、屋久島の自然の中に電気を送れずトイレが設置できないといった課題に興味が湧くと共に、解決策はないものかと考えながら話を聞いていた。その後、紀元杉や樹齢1000年以上の杉が立ち並ぶヤクスギランドを散策し、自然の恵みをいっぱい受け、とても気持ちがよい時間を過ごすことが出来た。

2日目は、エコツーリズムのツアーガイドであるYNACの案内のもと、世界遺産に登録された西部照葉樹林を歩きながら、植物が生き延びるために変化をしていく様などについて説明を受けた。今にも降り出しそうな天気であったが、西部照葉樹林を抜け海辺に立ったときにこれが屋久島なんだという風景を見ることができ、そのすばらしさに酔いしれていた。今回の企画を通じ、屋久島には屋久島の良さがありそれを守っていく、自分の身の回りにも同じような多くの自然があり、その自然を少しでも守っていく。そうした活動をしていかなければならないことを、より思うことができたということに屋久島来た意味があったのではないのかと思う。

ツアーも終え搭乗手続きのため屋久島空港へ行くと、鹿児島付近が大雨のため鹿児島空港への着陸ができず宮崎空港か福岡空港への着陸になるかもしれないという状況で、しかも飛行してみないとわからないというものであった。順調に来ていた企画も、最後に怪しい雰囲気になったが、鹿児島空港に無事到着することができ自然と笑みがこぼれていた。

【郡上おどりを体験し、絆の大切さを学ぶ】

最後の企画である第6回の会合は、『絆（きずな）』というテーマで、郡上まつりの400年の歴史や文化に触れ、郡上おどりを体験することで、人と人との繋がりが『絆』の大切さを学ぶものであった。私は、会社生活の半分以上を岐阜で過ごしていたが、1度も行ったことがなく、前々から行ってみた

いと思っていたので、とても楽しみにしていた。

当日は、郡上おどりを継承しているおどり保存会の会長である藤田様から、郡上おどりの歴史について、お話いただいた。

今回のテーマは「絆」であったが、郡上の地においても人間関係が希薄化しており運営は難しくなってきたということであり、その中でも、保存会の皆さんの「人への感謝の気持ちを忘れないという思いで守って行きたい」という言葉が印象的であった。

夜には郡上踊りに参加し楽しいひとときを過ごすことができたが、唯一心残りだったのが、踊り上手の人に渡される『踊り免許』をもらえなかったことである。

【殻とは】

産政塾に、参加するにあたり、思い描いていた「殻の外に踏み出す」は、人間的に一回り大きくなる、そんなイメージであった。今回のセミナーを通じて殻の外に踏み出せたどうかはわからないが、殻について考える機会を持つことができたのは確かである。産政塾のテーマである「殻を破る」について現地点での答えとしては、殻はどこにでもあり、経験は全て殻であり、またその周りにはいくつもの殻がある。出来るだけ多くの殻、つまり経験が、知識となり価値観になっていくのではないのか。

人生何十年と生きてきた考え方や価値観が劇的に変化することはそうそうあることなく、1つ

1つの積み重ねが大きなものとなっていくのではないか。

「殻の破り方」は自分がどのような思いで殻を破るのか、「破る数」は、多くの殻を破れば、より多くの経験、知識となり、「破った後の行動」により、いかに自分のものになっていくのかが変わっていくのではないかと考える。

今後の行動において、少しでも多くの殻を破るよう意識して行きたい。

【おわりに】

今回、このようなセミナーに参加でき、日常では体験できないことを学ぶことができた。

事務局の皆さまには大変お世話になりました。この場をお借りしまして、お礼申し上げます。特に松井さんは、これだけの個性派を相手に、いつも笑顔で対応されていました。そのような姿にも多くを学ばさせていただきました。ありがとうございました。

産政塾を振り返って



デンソー労働組合

田 中 栄太郎

《プロフィール》

たなか えいたろう (34 歳)

- 1973 年 8 月 熊本県生まれ (広島県育ち)
- 1998 年 4 月 株式会社デンソー入社
開発部配属
- 2006 年 9 月 デンソー労働組合執行委員
現在に至る

＜家族＞妻、長男 (7 歳)、長女 (5 歳)、
次男 (3 歳)

＜趣味＞ゴルフ、野球

はつめい

産政塾が閉塾して、はや数ヶ月経つが、今思い返しても本当に楽しく、有意義な企画ばかりで、毎回、産政塾がある日を楽しみにしていたことを思い出します。

「殻の外に踏み出そう」というテーマは、一見、漠然としていて、掴み所がなく、難しく感じますが、「(犯罪以外なら) 何でもあり?」という運営精神の元、様々な分野で活躍している塾生が集まって、みんなでワイワイ情熱を持って議論しながら真面目に、かつ楽しみながら作り上げたからこそ、素晴らしい企画ができたのだと思います。

また、各企画とも、普段の生活を送っていると、めったに経験できない内容であることも、その一因となっているのでしょうか。

このような素晴らしい企画に参加することで経験し学んだ事を一つひとつ振り返りながら、産政塾のテーマである「殻の外に踏み出そう」について、自分なりに考えていきたいと思います。

【第1回 開塾式】

開塾式で印象に残っていることは、塾生の個性的な自己紹介もさることながら、やはり、東塾長の挨拶でした。塾長である前に全トヨタ労働組合連合会の会長である東塾長は、労働組合の執行委員と

なって半年足らずしか経っていない私にとっては、非常に遠く大きな存在であり、どのような話をされるのか、必死にメモを取っていたことを思い出します。挨拶の中で特に印象に残っているのは、「リーダーの条件は、どれだけ多くの情報を自分のものにできるか。自分が信じるものを持ち、情熱を持って行動に移せるか」であるというお言葉でした。職場の代表として労働組合執行委員という役割を担っているながら、その責務をこなすだけで手一杯であった当時の私にとっては、気を引き締められる思いで聞いていたことを思い出します。

【第2回 消防での実体験を通じ『チームワーク、組織力を学ぶ』】

豊田市消防本部で規律訓練・ロープ訓練を体験するとともに、消防隊の出勤訓練を見学し、講話を聞いて、チームワーク、組織力について学ぶというこの企画。心に残っている事が2つあります。

まずは、隊員達の訓練に取り組む姿勢です。特に、救急隊員による人工呼吸・心臓マッサージ訓練は衝撃的でした。始まる前は、よく見る人形が出てきて、「ああ、いつものやつか」と少し冷めた目で準備しているところを見ていましたが、訓練が始まるや否や、そんな気持ちは吹っ飛びました。脈拍を計りながら、必死に人形に問いかけたり、周りに声をかける隊員、計器を見ながら脈拍などの状況を逐次報告する隊員、必死に心臓マッサージを行い蘇生を試みる隊員、全員の顔が真剣そのもので、それは、もはや訓練ではなく、実際の救急現場にいるような気持ちになったのは、私だけではないと

思います。日頃の訓練から本番さながらに真剣に取り組まないと、本番で十二分に力が出せず、人の命を救えないでしょう。わかっていてもなかなかできることではないと思いますが、隊員達のすごい訓練を目の当たりにして、改めて、その重要性を痛感しました。

もう一つは、消防指令長の春谷さんの講話の中での「チームワークは、個々の力があれば、自然にできる。チームワークを高めるためには、訓練により個人の能力を高めることが大事。」という言葉。チームワークを高めるためには、メンバーがチームの目標とそれを達成するための個々の役割を認識した上で各々の役割を全うすることが重要ですが、それは、リーダーが教えるのではなく、個々が自ら考え、判断し、行動に移すことが大事で、それができるように、個々の能力を鍛え、高めるという意味だと理解しました。職場では、繁忙の中で、なかなか後進の育成が進まないのが現状ですが、改めて、後進の育成と自分自身の成長が、チームワークを高めるためには、必要なだと痛感しました。

【第3回 非日常体験 ～裁判員制度について知る・考える～】

第3回は、我々Bグループが担当した「非日常体験を通じて、いままで気づかなかった世界、経験したことのない世界に触れ、新たな自分を発見する」という企画。非日常体験として、取り上げたのは、「裁判」。名古屋地方裁判所を訪ね、普段経験することのない裁判の傍聴や擬似裁判を通して体験し、「人を裁くとはどういうことか?」「安心して暮らせる社会には何が必要か?」について、改めて考え

るとともに、皆で論議しまとめていくプロセスの重要性を学ぶ事を狙いとなりました。

私も初めて裁判を傍聴しましたが、証人席で涙ながらに被告人の今後の生活をどのように監督するか説明する父親や、傍聴席で被告人の判決結果を深刻な面持ちで聞く家族や友人を目の当たりにし、改めて、罪を犯すことの重みを再認識させられました。参加した塾生も、裁判の傍聴や擬似裁判に臨む真剣な表情から推測すると、各々何かを掴んでもらえたのではないかと思います。

裁判では、必ずしも十分な証拠や証言が揃っている訳ではなく、仮説を立てて真実を突き詰めていかなければなりません。また、裁判の結果は、人の人生に多大な影響を及ぼすため、いろいろな角度から十分かつ冷静に検討し、誰もが納得できる結論を皆で論議し決めていく必要があります。そのためには、少数派の意見も尊重し、皆が納得するまで話し合うことが必要だと思います。

とりわけ、今回の企画を立案にあたっては、このことが実践できたと思います。Bグループが掲げた「非日常体験」というテーマを、具現化するために、何度も休日に集まり、真剣に論議を重ねました。Bグループのメンバーは、各々、現状に対する問題意識を持ち、意欲も高く、企画に対する思いを持っており、まとまるまでに、かなり難航しましたが、妥協せずに、全員が納得するまで話し合えたことが、企画の成功に繋がったと思います。企画立案までのプロセスは、私にとっても非常にいい経験となりました。

【第4回 人材育成の現場を知り、情熱を知る 〱 将来の日本のリーダーを育てる〱】

将来の日本を危惧し、リーダー育成に大いなる情熱を持って取り組んでいる「海陽学園」を訪問し、人材育成の教育現場の第一線を体験・体感するという企画。最新の設備を備えた充実した施設や、各分野の一流のスタッフ生徒の生活面をサポートする体制など、目を見張るものばかりで、このような環境のなかで教育を受けられる生徒達がうらやましく思えました。3児の父親である私としては、我が子にも、こういう環境で勉強させてやりたいという思いが募るばかりでした。我が子に才能があり、お金が用意できればの話ですが……。それは、さておき、この企画の中で一番印象に残っていることは、サブ的に体験企画として行われたリーダーシップ育成ゲームです。リーダーには人に理解させ納得させることが必要ということ、チームに分かれ、与えられたお題（例えば、日本食と洋食など）について、それぞれの良いところをアピールし、第3者にどちらが魅力的に感じたか判断してもらい、勝敗を決するゲーム。単純なゲームですが、奥が深い。勝敗のポイントは、お題が決まってから3分間という短い時間の中で、聞き手を納得させうる論理的な説明を組み立て、より効果的に聞き手に伝わるように説明する順番を練ることと、聞き手の心に印象づけるしゃべり方。結果として、我がチームは、お題にも恵まれません（?）、2連敗を喫しましたが、自分に足りない物が何か、改めて再確認できました。

【第6回 絆（きずな）】

400年の伝統がある郡上おどりを体験し、日本古来の文化と、日本人が大事にしてきた、人との繋がり「絆」の大切さを改めて感じるという企画。正直、行く前はそれほど乗り気ではなかったが、踊ってみるとこれが結構楽しく、気づけば、踊りが上手な人のみ貰えるという「踊り免許」を貰うために必死になって練習していました。本番で、「免許」を貰えた(?)かどうかはさておき、汗を流しながら、みんなで輪になって同じ踊りを踊ることで、忘れかけていた日本の伝統の良さや、一体感の心地よさを体で感じる事ができ、大変有意義でした。いまでも、自分の部屋に飾ってある「免許」や踊りで履いた下駄を見るたびに、思いにふけっております。

「殻の外に踏み出す」ために

このような産政塾で得た様々な体験を踏まえ、改めて「殻」について考えてみたいと思います。殻とは自らがこれまでの経験に基づいて無意識に作っている行動範囲を狭める壁のようなものではないかと思えます。新しいことにチャレンジする機会があつたとしても、努力や労力が必要だとわかると、億劫になり自らその機会を閉じてしまつたり、初対面の人と接する機会が合った場合でも、相手の顔や表情、仕草、話し方で相手の性格を想像し、苦手なタイプ、自分にとって有益ではないタイプだと判断すると、相手を深く知ろうとせず、遠ざけてしまつたりするもの、自らの殻がそうさせるものではないでしょうか。自分の成長を止めるのは、周囲の人でも与えられている環境でもなく、自分自身

だと思っています。何事も「できない」と諦めた瞬間、全ての可能性が消え、できることもできなくなってしまう。ここ最近の自分を振り返ってみると、労働組合執行部という人生の中で大きな転機に直面し、想定以上の環境変化の大きさと責任の重さに圧され、チャレンジの歩幅を狭くしていた気がします。そのことに気づいていなかった訳ではないが、あえて見て見ぬふりをしていました。それでは駄目だと気づかせてくれたのが、産政塾の各企画で出会えた様々な分野で活躍している方々の言葉であり、現地に赴き肌で感じた様々な体験であり、共に飲んで、笑って、語り合った個性的な産政塾のメンバーであつたと思います。「殻」をつくるのも、破るのも、自分自身。「殻の外に踏み出す」とは、己に克ち、自らの歩みを止めないこと。これが、産政塾を通して、導き出した私の答えです。

このような大変有意義な経験をさせていただいただけでも、東塾長をはじめ、事務局の方々のおかげだと思っております。本当に感謝しております。ありがとうございました。

組織力 ～ チームワークとリーダーシップ ～



中部電力株式会社

中 川 利 文

<プロフィール>

なかがわ としふみ (33 歳)

- 1974 年 11 月 三重県津市 生まれ
- 1997 年 8 月 中部電力株式会社 入社
岐阜支店 営業部に配属
- 1999 年 8 月 岡崎支店岡崎営業所
- 2000 年 8 月 人事部
現在に至る

<家族> 妻、長女

〈はつめい〉

昨年の秋も終わり頃、『産政塾』っていう社外の研修があるけど、行ってみるか。」とはじめてこの話をいただきました。会社に入って、はや10年。そのうち、2／3以上を人事部門に籍を置き、社外の人間と接する機会もあまりなく、デスクワークを続ける日々を送っていた私にとって、新たな人間関係を構築する出会いの場の始まりでした。

そして、長いようで短かった8か月間、普段の会社生活では体験できないさまざまな社外の場所に訪れることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

まず、東塾長はじめ産政塾事務局の皆さん、18期生の皆さん、そして、産政塾に参加する機会を与えてくれた会社、職場の皆さんに感謝いたします。

さて、この8か月を振り返ってみて、様々な場所を訪問し、共通して必要と感じたものは、「組織力」「チームワーク」とリーダーシップ」の重要性でした。

〈ぐ〉都合主義の『殻』に閉じこもった日本社会

まず研修の話をいただいたとき、テーマである『殻の外へ踏み出そう』に大変関心を持ちました。

『殻』って何だろう。」と考えてみたとき、

○ 自分自身を不利益なものから守るためのもの

○ 自分が正しいと思ひ込んでいるもの

○ 自分が打つて出ることができず、閉じこもっている場所
といったことが頭をよぎりました。

このテーマを念頭に、会社組織を思い起こすと、

○ 「それはうちの部署の仕事ではない」といった相変わらずの縦割り社会における部署の『殻』に
閉じこもっている世界

○ 「近頃の若いヤツは、昔はもつと愛社精神があつた」といった世代間の壁、仕事に対する価値観
の相違による取り組み姿勢の壁

○ 「自分に甘く、他人に厳しい」、「すぐにいらつき、キレル」、「悪いと思つても謝らない」といっ
たご都合主義の『殻』に閉じこもっている若者の増加

といったものを感じることがよくあります。

また、昨今の社会情勢に目を向けると、

○ 自分の親や子どもを平気で殺す事件が多発し、社会もその多さに麻痺・無関心化
○ すぐに、明確な理由もなくキレル子どもの急増

○ 登校拒否など自分の世界に引きこもり、社会との対話を拒否する者の増加
○ 学校の先生のサラリーマン化、子どもの体罰に対して保護者の過度な反応

など、日本人それぞれが、社会全体として各自がご都合主義の殻に閉じこもってしまい、外に出てこない傾向にあります。

これらの背景は、核家族化の進行や、これに伴い祖父母など子どものしつけを行う者がいなくなってきたこと、家族の団欒の時間の減少などが考えられます。

改めて現代社会における親の役割について考えてみると、昔の親は、親の役割などあまり考えなくとも、社会全体として、子育てをする仕掛けをたくさんもっていました。が、個人主義になって自分から昔より好きなことができるようになった分だけ、「自主的な個人」としての子どもを育てる責任も大きくなったことを覚悟して、大人がもう少し反省することが必要な時期にきています。

ところで、日本人の姿はもとともこのようなものだったのでしょうか。

「自分の運命や置かれた環境を、たとえそれが不条理なものだったとしても、それをすべて受け入れ、その範囲の中で前向きに生きていく」といった姿勢は、日本人が世界に胸を張って自慢をできる美德であったと思います。『国家の品格』といった日本という国やそこに住む日本人の品格や道徳観に関する書籍に高い関心が集まっているなか、改めて日本人の良さについて考え直すと、あるアンケートにはこのようにあります。

①日本人が元来持っているものは何か。↓「謙虚さ」、「礼儀正しさ」、「情緒を重んじる」、「思いやりの気持ち」

②「日本人が失いつつある」と感じているものは何か。↓「礼儀正しさ」、「謙虚さ」、「思いやりの

気持ち、「恥ずかしいことをしないという考え」

③「日本人が残しておくべき」と思うものは何か。↓「礼儀正しさ」、「思いやりの気持ち」、「謙虚さ」

④「日本人がもともと持っている」考え方は何か。↓「個人主義」、「合理主義」
となっています。

熾烈なグローバル競争など企業や我々を取り巻く環境が大きく変化しているなかで、これまで大切にしてきた価値観を置き去りにしたままで、これからの日本は大丈夫でしょうか。

いまこそ、企業社会においても、ご都合主義の『殻』を破り、日本人の美徳を再認識し、熾烈なグローバル競争社会に一致団結して取り組んでいく必要があるのではないかと感じます。

〈豊田消防本部での体験研修〉

このように感じているなか、今回の産政塾の我々の企画チームは、「組織力×チームワークとリーダーシップ」をテーマに、①日本人が大切にしてきた価値観の素晴らしさを体験する、②組織をまとめ、組織を引っ張るリーダーの役割を知ることを目的に、豊田市消防本部中消防署を訪問しました。

（１）日本人の美徳に対する問題認識

産政塾に参加している同世代のメンバーの日本人の美徳に対する問題認識は次のとおりでした。

①日本人の美徳について

- ・礼儀正しく、勤勉であり、助け合いの精神を持っている。
- ・人の見えないところで努力する気持ちを持っている。

②日本人の価値観の変化について

- ・自己中心的になっており、お金があれば何でも手に入る世の中というモノがあふれている時代であり、モノを大切にせず、ハングリー精神がなくなってきた。
- ・ゆとりがなく、競争に力点が移り、利益重視の結果、助け合いの心が希薄化してきている。

③今後の日本人の将来像について

- ・自己中心的な流れに歯止めをかけるため、組織の中では、強いリーダーシップ、社会においては、日本人の価値観を再認識するための教育・しつけが求められる。

(2) 消防での「組織力×チームワークとリーダーシップ」

レスキュー隊員30年の方が我々に熱く語っていただいた「組織力×チームワークとリーダーシップ」への思いは次のとおりであった。

「われわれの最大の目標は、人の命を守ることである。そのためには、組織が強くなければ実現できない。組織が強くなるためには、個々人の力を高めなければならない。救助とは訓練をこなして経

験を積み。この言葉に尽きる。

リーダーが、何のために何をいつまでに行うかという明確な目標を部下に持たせ、優劣ではなくその効果を確認することが大事である。なぜ、この作業をしているのか、教わる者の立場に立つて、本質を伝えることが何より大事である。リーダーはやらせてみせる。頭で教えるのではなく、体で教える。と相手に伝わる。

また、組織が強いだけではいけない、他組織との連携も重要である。人の命を守るためには、レスキュー隊員だけでなく、救急救命士などの援助に関する組織との構成があつてこそ実現できる。お互いが情報を共有し周りを見ながら行動することが大事である。」

(3) 体験研修を通じて

① 実体験を通じて学んだこと

- ・ 個々の役割認識がしつかりしており、規律を守ることの大切さを個々人が認識している。
- ・ 組織力を最大限発揮するには、一人ひとりが組織の中で使命感を持つて役割を果たすことである。
- ・ チームの明確な目標を掲げ、チームのベクトルが同じ方向を向いており、そこに向かって引つ張っていくリーダーが必要である。

② 今後、組織のなかで生かせることは何か。

- ・ 組織の中での役割認識を常に持ち、その役割を果たすために、個人の能力の向上、自己研鑽に常

に励む必要がある。

・部下を育てるには、愛情を持ち、できないことに腹を立てず何回でも言って教える必要があるとともに、リーダーには、目標を明示し、そこに部下を情熱をもつて導いていくことが求められる。

〈チームワーク・リーダーシップの基本的考え方〉

チームワーク

リーダーシップ

この2つは、コインの裏表のようなものだと思います。素晴らしいチームワークは、適切なリーダーシップのもとに発揮されるからです。

昨年開催されたWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）では、王監督のリーダーシップの発揮のもと、日本代表チームは、野球の本場である米国で、日本人選手の攻守にわたる素晴らしいプレーとそれを生み出したチームプレー（チームワーク）で見事世界一になり、我々に「日の丸」を強く意識させました。

王監督の采配は、各選手の良いところを上手に引き出し、日本チームを優勝に導いた大きな原動力となりました。

チームワークは、チームが個人の能力を高めながらワークすることによって、そのチームに生み出

され、根付いていくことになります。

(1) 働く人がレーバー化しているのをワーク化する

人のあらゆる活動を観察すると、外から見た形は同じでも、2種類の活動に分類されます。

⑦レーバー…奴隷的・機械的活動。やらされている気持ちが高い。

⑧ワーク…人間的・創造的活動。自ら目標を立てて実行できる。

(2) レーバーとは

上司が目標の設定、計画の立案、評価の仕事を行い、担当者は、思考の入る余地がなく、常に上司の指示通りに実行するのみといった活動を行います。この場合、人間は、思考の入る余地がないため、仕事がつまらなくなり、モチベーションの低下という悪循環に陥ります。

(3) ワークとは

人の一般的な活動は、まず目標を自ら立て、それを達成するために、自ら計画・実行し、その結果をみて、足らないところがあれば、さらにやり直してがんばるという形で循環します。

このような活動をするとき、人間は充実感を感じ、人間的活力、すなわち、創造的で進取的な態度、倫理的な責任感などが高まってきます。

(4) チームのなかでこそワークができる

チームワークとは、その集団を構成する一人ひとりがワークして、互いに助け合い、1+1が3にも4にもなるような力を出す集団活動のことです。

このことが成立するためには、その集団が「共通の目標」を持つことが必要です。

目標は、あくまで個々人の主體的なものだが、それらを集団の目標としてひとつにすることにより、チームが成立することになります。

「共通の目標」を持つためには、リーダーの役割が重要になります。

リーダーが全員と一緒に話しながら、集団全員が共通の理解をすることが必要です。そして、その理解が各人の心に挑戦すべき共通の目標意識となつて現れてくることになります。

訪問した豊田消防本部のレスキュー隊員は、「人の命を守る」という最大の目標に向かって、個々が訓練をこなして経験を積み、リーダーが情熱を持つて部下を指導・教育することにより、チームワークを醸成し、共通の目標を認識させています。

(5) 担当者が実行策をたてる

各人の心に共通の目標が生まれた時、チームははじめて、その目標を達成するための行動を始めることになります。

従来のやり方では、実効策を策定するのは上司であり、担当者たちは、上司の命令どおりに、与えられた実効策を実行します。

しかし、チームワークのできた集団の場合、実効策の策定とその実行とは、原則的に切り離し得ないものとなります。担当者が自らの具体的な実効策をたてるようになります。

そして、チームワークのできた集団でのリーダーの役割は大きく次のとおりとなります。

① 計画・実行段階に入ることの決断

実行に移るためには、失敗の可能性に対する覚悟が必要であり、一身にその責任を負って勇氣ある決定を行う必要があります。

② 計画・実行にあたっての役割分担の決定

各人の適性をよく見て、実行分担者を選定する必要があります。

③ チームの目標に向かって情熱をもってチームを導いていく

チームワークにおいては、すでにリーダーを含めて全員に共通の目標が把握されているので、それ以上にリーダーが、具体的な実効策までを策定し、命令する必要はなくなってきました。

訪問した豊田消防本部のレスキュー隊員は、リーダーの的確な指示により、日々の訓練で培ったチームワークで、命を守るという使命感のもと隊員それぞれが役割認識を持ち、各自がそれを全うすることにより、現場での迅速かつ正確な行動につながっています。

〈21世紀のリーダー像を考える―1人のリーダーから全員がリーダーの組織へ〉

最近、フジテレビのドラマ『踊る大捜査線』が10周年ということで、再びTVで放送されています。これまでの『踊る大捜査線』シリーズのなかで、『踊る大捜査線 THE MOVIE 2』において、事件解決の後、主人公の青島刑事は、上司の室井管理官に対して「しびれるような命令をありがとうございます」と感謝の言葉を投げかけています。

「ありがとうございます。」という言葉は、下から上に対する謙譲ですが、「しびれる」というのは、逆に対等の仲間へ（もしくは上から下へ）「よくやったな」と誉め、ねぎらっているような表現です。

青島刑事と室井管理官の関係は、「尊敬される先輩と追隨する後輩」という人間同士の素朴な信頼関係が根底にあるようですが、「人と人の関係」として組織を見たときには、こうした特定の個人間の関係は、組織と個人の間の新しい関係（現代の新しい忠誠心）を象徴しています。

組織というものは、そこで働く者に対して、なんらかの忠誠心（ロイヤリティ）を求めます。しかし、その忠誠心は、時代とともに変化してきています。

かつて日本の高度成長を支えてきたのは、「滅私奉公」の忠誠心で企業に仕えた者だといわれますが、いまやプライベートの生活を顧みずに、ただひたすら会社や仕事を優先するような忠誠心は、個人の働く意欲を高めることはできないし、企業の成長にもつながりません。

これからの時代の変化のスピードが速く、安定成長が難しい時代では、従来のような機械的な組織

よりも有機的な組織の方が有利であり、絶えざる成長や変革を求めるならば、多様で多彩な人材が働く現場の最前線からのボトムアップのリーダーシップと意思決定、そしてそれを支える個人と個人のネットワークが重要な役割を果たすことになると思います。

これからの多様で多彩な人材のなかのリーダーには、次のことが求められます。

- ① リードする個人の側に、意識的なイニシアティブをとらせること
- ② 組織全体と各人の向かうべき方向について、明確なビジョンを持つていること
- ③ 傾聴と理解の能力
- ④ 受容と共感の能力

つまり、全員にリーダーシップを取らせ、的確な見通しをもとに、一人ひとりに必要なケアを行い、彼らの意思に耳を傾け理解しようとし、どんな部下も拒まず受容する姿勢を持つていることがこれからのリーダーに必要となります。

これからのリーダーは、経営者であり、プロデューサーであり、教育者であり、メンターであり、同時に一人何役もこなす必要がでています。これをひとりでこなすのは大変なプレッシャーです。

これからのリーダーは、単独のリーダーがいて、そこに部下がつくというのではなく、複数の人間によって、相互補完的に務められるものかもしれません。

『踊る大捜査線 THE MOVIE 2』の最後で、室井管理官は、「全捜査員、聞こえるか。自分の判断で動いてくれ。本部への報告は厳守だ。現場の君たちを信じる。」と呼びかけています。

室井管理官は、映画のなかで、リーダーとして、ビジョンを言葉にして呼びかけ、問題解決のためのコミュニティを組織化し、人々を説得し、権限を委譲し、主体的な参加を促す、これからのリーダー像として描かれているのかもしれない。

〈おわりに〉

先般の7月16日の新潟県中越沖地震では、大手部品メーカー、リケンの柏崎事業所の生産ラインが停止し、自動車各社が頼っていた部品の供給が止まりました。

18日までに700人に膨れあがった自動車各社の応援部隊は、作業着はばらばらだが、「23日まで工場を再開する。」という明確な目標に向けて、混成チームのチームワークと個々の役割認識・リーダーシップで世界が驚く1週間で生産ラインの復旧を果たしました。

これは、まず、派遣された方の個々人の能力の高さと役割認識、そして目標の明確性が、ご都合主義の『殻』を破り、日本人が本来持っている勤勉さ・助け合いの精神を生じさせ、一致団結して目標に向けて取り組むことのできた一例だと思います。

これからの熾烈なグローバル競争社会に勝ち抜いていくためには、各人が常にスキルアップし、ご都合主義の『殻』を破り、日本人の美徳を心に、情熱を持って「組織力×チームワークとリーダーシップ」で取り組んでいくことが必要であると感じます。

産政塾での活動を振り返って



刈谷市役所

早川 啓太

<プロフィール>

はやかわ けいた (29 才)

- 1977 年 9 月 愛知県刈谷市 生まれ
- 2000 年 4 月 刈谷市役所入所 建設部
用地対策課配属
- 2006 年 4 月 福祉健康部
国保年金課配属
現在に至る

<家族>両親、妻、長女 (2 才)

<趣味>映画鑑賞、麻雀

へちめじい

上司から、「職員研修への応募者がいなくて、職員課が困つとるみたいだで、お前どうだ！」の一言で僕の産政塾での活動は始まった。昔から、なにかの代表になつたり、人前で何かを発表することが、それほど苦には感じない性格で、自分からやりたいと手を上げる程ではないにしても、やりたい人がいなくて擦りつけ合いになるようなら、ほぼ100%引き受けてきたように思う。特に、小学校や中学校の級長・副級長決めは、決まらないといつまでたつても帰りの会が終わらないという大変過酷なものだった。そのため、立候補者がいないと分かると僕が決まって、立候補して帰りの会を終了させていたように思う。しかし、今考えると本当は自分がやりたいと思つている子もいたのではと考えるようになった。僕は、たまたま決断が早い人間だからすぐに、僕がやつてもいいかな。という結論に至つたが、中にはやつてみたいけど勇気を振り絞つて手を上げるのに時間がかかる子もいて、あの長時間に亘る帰りの会は、そういった子が自分の殻を破るための貴重な時間であつたのではないかと思う。それなのに、僕は正直言つて本心からやりたい訳でもないのに、この時間が早く終わればみんなも早く帰れて喜ぶだろうというくらいにの気持ちで立候補していた。このような考え方は、ひよつとして唯の僕の思い過ごしかも知れないし、クラスのマナーは本当に僕に感謝してくれていたのかもしれないが、産政塾へ参加して、殻というものを意識したからこそ、今になって、このような考えが生まれたのだと思う。少し話が横へそれてきたが、ここからは産政塾での各企画ごとに、僕の思いを自

由気ままに書いていこうと思う。

△第1回 開塾式▽

まず、メンバーを見たときの感想としては、みんなエリートに見えたというよりも、エリートだと思っているように見えたというのが本音だ。確かに、自分をよく見られたいという感情は誰もが持っているものだし、時には背伸びして頑張ることも必要だと思うが、何より大切なのは自分を知ること、そして、知ってもらうことだと僕は考える。これは、簡単そうだが非常に難しい、なぜなら自分と言うものが刻一刻と変化、成長していくからだ。ただ、自分を知ってもらうことは時間が解決してくれる問題であると思う。仲間を作るためには時間が必要であり、一緒にいる時間が長ければ自然と自分の事は分かってもらえると思う。僕は、この産政塾で、一人でも多くの仲間を作りたいと言う思いでこの開塾式を迎えていた。

△第2回 消防署を訪ね、チームワーク、組織力を学ぶ▽

この企画では、全7回の企画の中で僕が最も心を打たれる言葉と対面することになった。それは、消防署の春谷氏の講話の中に出てきた「チームワーク」の定義の部分だ。今までチームワークと言え

ば、助け合いというイメージでしかなかった僕にとつては、体に電気が走ったような衝撃を受けたのを今でも覚えていたが、春谷氏は、「チームワーク＝個々の向上だ!」と言われた。このような発想は今まで考えたこともなかったが、考えてみれば確かにそうかも知れない。個々の能力が高まれば今まで以上に迅速かつ正確な対応ができるようになり、その個々が集団となつて1つの目標に向かつて走ることにより、大きな成果につながる。そこにこそ、かけがえのないチームワークが生まれるのだろう。今まで僕は、能力のある人のレベルまで、能力のない人を押し上げることがチームワークの始まりのように思っていたが、それは違っていたのかもしれない。特に、僕ら公務員は、5年もすれば他の課へ異動となり全く違った仕事を一から覚えなければならぬので、異動のあつた年は必死に仕事を覚えて早く一人前になろうと努力する。しかし、3、4年が経過して仕事も一通り覚えてくると、新しい人に仕事を教えることだけで満足してしまっている面は確かにあるように思う。やはり、常に向上心を持ち、自分を磨く努力を怠ることのないようにしていきたいと思う。

△第3回 名古屋地方裁判所を訪ね、裁判員制度について知る・考える▽

この企画では裁判の傍聴という初めての経験をすることになったのだが、正直言つて非常に面白かつたと言うのが率直な感想である。面白いという表現は適切でないのかもしれないが、一度も傍聴をしたことのない人には是非お勧めしたい。この企画の前までは、僕も犯罪なんてしないから関係な

いという思いでいたし、テレビ等でおおよその流れは分かっていたのでわざわざ傍聴までいかなくてもという考えだったが、この企画を通して強く感じたのは、犯罪をするのは同じ人間であり、それを裁くのも同じ人間であるということ。また、犯罪には被害者が存在し、誰もが被害者にはなりうると言うこと。まして、今後は裁判員制度の導入により、僕らが裁判員として人を裁くことになる。もはや、他人事では、ありません。この裁判員制度導入のねらいは、犯罪の起こる過程を理解し、安心して暮らせる社会には何が必要かをみんなで考えることにあります。世の中で多発する犯罪に少しでも目を向け、自分なりにその過程の裏に潜む問題や、被害者、加害者の心理を考えたりすることが必要であると思う。この件に関しては、無関心は罪であると考え、貴重な時間を利用して今回学ばせていただいた、裁判員制度の内容について少しでも多くの人に広めることが、僕の使命であると考えています。

△第4回 海陽学園を訪ね、人材育成について学ぶ▽

この企画は、他の研修への参加のため残念ながら不参加でしたが、この海陽学園は設立当時のキャッチフレーズ「日本のエリートを育てる」に非常に興味があり、今後、この学園の動向に注目しています。

△第5回 屋久島を訪ね、人と自然環境の共生について学ぶ▽

この企画では、屋久島という産政塾へ参加していなければ一生行くことのなかったような場所へ行かせてもらった。とても、楽しかった。

本当はこれだけの感想で終わりたいが、屋久島町安房支所の日高課長が、講話の中で、エコツアーの旅行客のトイレをどうしたら良いかという、悩み相談（山中にトイレを設置しても、電気や水道を引けないし、汲み取り式等にしても、ヘリコプターが止まれるようなスペースがないので、汚物の回収ができないため現在、トイレを設置できていない）をしていたのを思い出したので、自分なりに少し考えてみようと思う。…とは言っても、僕がこの場ですぐに画期的なアイデアが出るわけもなく、全員がオムツをしてエコツアーに望むとか、トイレを設置した横に森を伐採して、ヘリコプター専用の乗降り場を作る位の案しか浮かんでこないが、あの課長の真剣な顔は今でも忘れませんし、本当に困っているのが手にとるように伝わった。このように、自然と共生するためには、数々の困難に遭遇することでしょう、その際、みんなで考えること、他人事で終わらないこと。これが、自然環境を守ることにつながるのだと僕は考える。この本を読まれた方も少し考えて見て欲しい。

△第6回 郡上おどりを体験し、絆の大切さを学ぶ▽

この企画では郡上へ行き、郡上おどりに参加した。保存会の会長からは、四百年の歴史を誇る郡上おどりを後世へ伝えていくことの苦勞と近年、郡上の人を含め、人と人との絆が弱くなってきた

とのお話があった。昔は、若い人への指導は大変厳しいものであり、また、その厳しさの中に愛情があった。しかし、いまの若い人は厳しく指導したら、すぐに、ついてこなくなってしまうので、やさしく、やさしく、おだてながらの指導をしなければ、なかなかついてこないし、郡上おどりに対しても、騒音や交通規制に対する苦情が多くなっていることを言われた。これに関しては、郡上おどりに限らず身近な生活においても数多く存在していることで、利益重視の至上主義がもたらした副作用であると僕は考える。僕の両親はテレビのニュースで凶悪な事件を見聞きすると決まって、今の世の中はどうなっているのか、昔は、もっと良い世の中だったと洩らす。ただ、僕らは今を生きていかなければならないし、この現実の中でベストを尽くすことが大事であり、郡上おどりに関してもやめることは簡単だが、あらゆる困難を乗り越え、継承していくことで、はじめて絆が生まれると思う。

郡上おどりは、時間を忘れて、お年寄りから子供まで純粋に楽しめるので、是非家族で一度は参加してみたい。

△第7回 閉塾式▽

いよいよ、すべての企画が終了した。産政塾のテーマでもあった“殻の外へ踏み出そう”について塾生全員で議論した。僕なりの考えでは、殻は、自分で自分の可能性を決定することにより生まれるものだと思う。自分はこのことは苦手であると思うとそこに殻ができる。そして、その苦手を克

服したとき殻を破ったと感じる。その繰り返し過程を成長と呼ぶのではないだろうか。ただ、殻を決して悪いものとは思わない。殻は、時に自分を守ってくれる、自分が傷つくのを未然に防いでくれる。大事なことは、殻を意識すること（自分と正面から向き合うこと）であって、殻を破ることではないと考える。唯、僕らは、無限の可能性を秘めていることと、一人で生きているのではないことを決して忘れてはならないと思う。

＜やぐら＞

日々の忙しい仕事の最中、このような貴重な経験を刈谷市役所を代表して参加させていただき本当に感謝しています。また、東塾長、事務局の松井様を始め、塾生の皆様、本当にありがとうございました。そして、これからも末永くお付き合いしていきます。

産政塾を振り返って



全トヨタ労働組合連合会

平 賀 隆

《プロフィール》

ひらが たかし (37 歳)

- ・ 1970 年 8 月 愛知県豊田市生まれ
- ・ 1989 年 4 月 アラコ (株) 入社
トリム製造室配属
- ・ 1990 年 10 月 シート製造室へ異動
- ・ 1998 年 10 月 カバー製造室へ異動
- ・ 2004 年 10 月 3 社合併 (アラコ (株)
豊田紡織 (株) タカニチ
(株)) により現在のトヨタ
紡織 (株) へ
- ・ 2006 年 9 月 全トヨタ労働組合連合会へ
出向

＜趣味＞ ショッピング
音楽鑑賞 (コンサート)

はじめに

今回この第18回産政塾に参加させて頂きありがとうございました。

閉塾式が終わってしまい、業務に追われる日々が続く塾誌、フォーラムも書かなくてはと思いながら時間だけが過ぎて行き、何とかフォーラムは書き上げたが塾誌までにはなかなか行かなくて松井さんに「いつまででない」と聞きながら先延ばしていたが、いよいよ締め切りもなくなってきたので、産政塾に参加したことを振り返りたいと思う。

きっかけ

私が全トヨタ労連に来たのが、昨年の9月でした。労働組合の経験をまったくない私が不安ながら日々取り組んでいたときに、上司と呼ばれて『産政塾というのがあり、ぜひ参加しておいで』と言われました。これに参加する人はいろんな業種の人たちが集まるからいい勉強になると言われました。そのときのパンフレットに目を向けると、ある言葉が目に入ってきました。書かれていた言葉が「殻の外に踏み出そう」と書かれていました。すぐく目が引かれたのが『殻の外』と言う言葉でした。以前にある研修で「殻を破れ、そして輝け」と言うスローガンがあり、4ヶ月というとても過酷で辛い研修を受けたときは『本当に殻を破れたのだろうか』と思っていました。あれから数年たち、改め

て「殻を破れる」いい機会だと思い参加させていただきました。

第1回 開塾式

どんな人たちがこの産政塾にくるのか期待と不安の中、開塾式が始まりました。参加している人の顔ぶれを見ていけると同じ年代の人たちや私より若い人が参加されていて、この半年間でともに成長しながらいろんなことを学んで殻の外に飛び出そうと思いました。プログラムも進んでグループに分かれて、今後の企画について話をしました。私たちの企画は最後になり、時間をかけながら内容を詰めていくことになりました。懇親会ではそれぞれ打ち解け合って第18回の産政塾がスタートしました。

第2回 消防での実体験を通し、「チームワーク、組織力を学ぶ」

豊田市の消防本部で今回の企画がスタートしましたが、すごく衝撃的でした。救急隊の搬送までに何をしなくてはいけないかを実践を交えながら見せていただきましたが、冷静に状況判断をしながら患者、家族に対しての接し方など訓練をしているからこそできるのだと感じました。以前に普通救命講習を受けて心臓マッサージ、呼吸のやり方などを教わりましたが、とっさになったらできないだろうと思いました。いつでも冷静にならなくてはいけなことをこの場では教わりました。実体験では、

運動不足のために体が動かず大変でした。規律訓練ではチーム全体のことを考えてお互いに周囲を確認しなくてはいけないことを改めて学びました。印象的なのは「人の命を助けるためにそれぞれが何をしなくてはいけないか」と言われ隊員が目的を持って日々訓練をすると言われたことでした。何をするにも目標を持つてやることで、自ら行動する内容が決まることを教わり、チームワークの重要性を感じました。

訓練では指揮官の指示で隊員が状況判断しながら敏速に行動し、チームワーク、組織力の大切さを改めて実感しました。

第3回 非日常体験〜裁判員制度について知る・考える〜

裁判のニュースはよく耳にするが、実際に裁判を傍聴するのは始めてで、なんだかやるせない思いになりました。

実際の裁判を傍聴して見て、これが現代社会の現実と言うことを見せつけられたように思います。メンバーとも話をして自分たちに何ができるのかを改めて考えさせられたと思います。その後の模擬裁判員としてそれぞれ意見を出しながら判決を内容を決めるときに、自分の考え、主張を伝えることが求められていることを学んだと思います。この経験はいろんな人に伝えていくことが、殻の外に出る一歩だと思いました。

第4回 人材育成の現場を体験し、情熱を学ぶ 「『将来の日本のリーダーを育てる』」

「将来の日本のリーダーを育てる」ということで、海陽学園にお世話になりましたが、どんな教育をしているのかすごく興味を持ちながら施設見学をさせてもらいました。私が学生のころと比べれば、ものすごく設備が整っていると思いました。教育についても先生方が生徒に情熱を持って接していることでした。これは自分にとってもいい勉強になりました。体験した剣道では「礼に始まり礼に終わる」という礼儀の重要性を感じて、改めて礼儀の大切さを学んだと思います。

第5回 人と自然環境との共生 ～エコツーリズムから学ぶもの～

この産政塾での泊まり企画である屋久島は、自分にとって楽しみの企画でした。当日は塾生の悪運が強いのか天候にも恵まれて現地に着くことができました。屋久島自然館では環境や自然について学んだが、自然との共生をしていくことの難しさを教えていただきました。私たちも温暖化対策といながら何に取り組んでいるのだろうと考えてしまいます。今回のこの経験でエコに対する取り組みをみんなが考えて、取り組んでいかなければいけないと思います。夜のウミガメの産卵はなかなか見られないと言われてましたが、みんなの見たいの思いが通じたのか産卵に立ち会うことができました。

ちよつとここでハプニング。写真を撮ったらフラッシュが・・・係員に注意されてしまいました。別の意味での殻を破ってしまいました。

2日目はエコツアーガイドで針葉樹林を散策しましたが、森や動物に出会いながら自然の大切さを考えさせられました。自分たちにできることは環境をどのように守っていくのかを周りの人に伝えていかなくはないけないと感じました。

第6回 「絆」

今回の企画は私たちCグループの企画で、開塾式からテーマ案は出ていながら具体的な内容については、それぞれが課題として持ちかえって調べたことをメールでやり取りし、また、Cグループのメンバーと事務局の松井さんにも入ってもらいながら内容を詰めていき、郡上おどりを体験することです。人と人のつながりを学ぶことに決まりました。Cグループのメンバーとは打ち合わせで「絆」はより一層深まりました。メンバーみんなで郡上に説明を行くときに、私がいなくてメンバーに任せてしまったのはすごい心残りでした。最終打ち合わせも参加できずにメンバーがまとめたことを聞いて当日に望みました。

名古屋駅で集合した後は、バスで一路郡上に向けて出発して、塾生それぞれにクイズを出しながら場内は盛り上がり塾生との「絆」もより深まりました。郡上おどりを練習するときには一部の塾生が

浴衣を着てより一層雰囲気が出てきました。悪戦苦闘しながらおどきも覚えていざ本番へ。おどき会場は時間が経つにつれて一般の観光客も混じっておどきも最高潮に達しました。塾生も汗だくになりながら伝統の踊りを時間が来るまで堪能していました。時間が経つのは早いもので帰宅の時間を向かえまして一路名古屋駅に向かいましたが、終電に間に合うかとヒヤヒヤしましたが、何とか乗り遅れる人がいなくて良かったです。

改めて思うことは、伝統を守って伝えていくのは難しいことを体で学んだと思います。この経験を職場に行かせるようにして行きたいと思います。Cグループメンバーでこの企画に参加できて良かったです。

第7回 閉塾式

第18回産政塾も閉塾式を迎えてしまった。業務の都合で退席して、みんなとの意見交換ができなかったことが心残りです。

最後に

今回、いろんな企画に参加させていただき自分は「殻の外へ踏み出そう」に対して本当に踏み出せ

たのだろうか。

私はこの産政塾の企画に参加することが殻の外へ踏み出したと思います。なぜなら、違う業種のメンバーに出会ったこともそうだし、現地に自ら出向いて体験したこともそうだと思います。また、たくさんの人と知り合いになりいろんな考え方を学んでより視野を広く持つことを学びました。普段ではできないことをより多く学んだと思います。さらに殻を破るには、自ら進んで行動して行き産政塾で学んだことを実践していくことで成長していくことだと思います。

最後になりましたが、東塾長、事務局の松井さん、そして第18期塾生みなさんに、貴重な体験をさせて頂き、大変お世話になりました。心から感謝しています。ありがとうございました。

産政塾を振り返って！



株式会社豊田自動織機

廣 田 真 朗

《プロフィール》

ひろた まさお

- 1974 年 京都府京都市生まれ
- 1997 年 株式会社豊田自動織機 入社
共和工場総務室配属
- 2003 年 グローバル人事部へ異動
～現在に至る

＜家族＞妻 1 人

＜趣味＞ラグビー観戦・ウォーキング
ショッピング

はじめに

産政塾に、参加する事になって最初は、正直に言うところ「面倒くさそうやなあ」と思ったが、上司も産政塾の卒業生だった事もあり、「いろいろ面白いことが経験出来るぞ」「異業種の人達と知り合える」「仕事の息抜きになる」等励ましていただき、前向きに参加しようと思った。ただ、「最後の卒業文集はちよつと大変やけど・・・」と言われた事が引つかかっていたが・・・今、それを実感している。

第1回 開塾式

期待と不安を胸に臨んだ開塾式だった。私の持ち込んだ企画「大間のマグロー本釣り体験ツアー」は、事務局の松井さんの「テレビの見過ぎちゃいますかあ!」の一言で即、幻の企画になった。今頃、数百万のマグロを釣り上げていたかもしれないと思うと残念である。(笑)

第2回 豊田市中消防署を訪ね、「チームワーク、組織力を学ぶ」

「チームワーク、組織力を学ぶ」というテーマで、豊田中消防署で開催された。実際に規律訓練やロープ訓練を体験させていただき、非日常的な体験をさせていただいた。(高所恐怖症の自分には、かな

り辛かったが……) また、豊田消防隊員の訓練を見学させていただき、レスキュー隊員の本番さながらの迫力ある動きや大きな声に「命を守る」という大きな使命感が感じられ心が熱くなつた。「チームワーク」とは何か?を自分なりに考えてみた。私自身、ラグビーをしていた事もあつて、その経験からも僭越ながら少し述べさせていただくと真のチームワークとは、「仲が良い」とか「協調性がある」というものではない。一人一人が強くなる事で他に迷惑をかけない。さらに他のチームメートのミスをかバーできるぐらい強くなつて余裕を持つことが出来て、生まれてくるものだと思う。

第3回 名古屋地方裁判所を訪ね、『裁判員制度について知る・考える』

午前中に裁判を傍聴した。それまでは、テレビドラマ等では見慣れた光景だったが、実際、被告人の家族や友人がいる傍聴席に、自らも座り傍聴すると何とも言いがたい複雑な気持ちになつた。被害者の立場を考えると、許すことができない重い犯罪もあるが、被告人が罪を償つた上で、やり直せる環境社会・仕組みづくりは、もつと必要だと思つた。そうしないと、職に就けない等社会になじめず、で結局、再犯を犯してしまう確率が高くなつてしまうのでは……午後からは、自分たちが裁判員となり、模擬裁判を体験した。人を裁くことの難しさ、責任の重さを認識するとともに、もし、今後、自分が裁判員に選任された場合は、「自分の感覚」を大切にして評議に参加できればと思う。

第4回 海陽学園を訪ね、「グローバル化時代の人材育成について学ぶ」

海陽学園とは、学力と人間的強さを兼ね備えた人材を育成するために、全寮制の中学、高校の一貫教育を行っている学校との事だった。充実した施設、情熱を持った一流の教師を集め、真のリーダーを育てるのが目的で設立した学校との事で、その豪華な施設に驚いた。生徒達も皆、優等生のようなだった。多感な時期だけに、勉強だけでなくスポーツや恋愛などいろいろ経験した方が良し、教科書だけが勉強ではないと思う。子供たちには、無限の可能性がある。個性を大切にして、伸ばしていくてもらいたい。「リーダーに必要な資質」とは何か？を自分なりに考えてみた。

- ・自分の判断に確信を持ち、もし他の全員が反対しても押し通す勇氣
- ・他の意見を尊重できる度量の大きさや柔軟性
- ・そして何より、最後まで諦めない、真摯な姿勢

第5回 屋久島を訪ね、「人と自然環境の共生 ～エコツーリズムから学ぶ」

「世界遺産 屋久島」を訪ねて、環境問題について、今後、自分達がどのように向き合っていくのだろうか考えることをテーマに開催された。樹齢1000年以上も生きている屋久杉や雄大な滝、鹿や猿など野生動物を発見し、自然の偉大さを体感できた。このような豊かな自然は、100年後、

200年後も残っているであろうか？今、自分にできる事は何だろうか？屋久島から、帰ってきて「エコバック」を買った。でも、あんまり使えていませんが…（すいません。）

第6回

群上おどりを体験し、「日本の文化、人と人との繋がり」「絆」の大切さを実感」

岐阜県郡上市を訪ね、郡上まつりの400年の歴史や文化に触れ、郡上おどりを体験することとなった。郡上おどりの事は、テレビのニュースで見るぐらいしかなかったし、正直やる前までは、踊りなんか恥ずかしいといった気持ちもあったが、講師の指導のもと、郡上おどりを練習し、夜に行われる郡上おどりに参加した。会場の真ん中に据えられたおどり屋台を中心に、地元の人達や観光客とともに、輪に交じり、生演奏の三味線などに合わせ、踊った。輪の中に入ると不思議とこれが、かなり楽しい。踊りが上手いとか下手とか関係ない。たぶん、郡上の情緒ある風情や町並みが、そういう気持ちにさせてくれたと思う。帰りのバスの時間があつたので、途中で帰らなければいけなかったが出来ればもっと踊っていたかった。帰るのが惜しい気持ちで郡上を後にした。

伝統の継承とは？古いやり方を踏襲することが、伝統なのか？それはただ古いやり方を真似しているだけで、何もしていないと同じことではないだろうか？今回、参加した群上おどりも、基本となる部分は変わらなくともその時代、時代にあわせて少しずつ変化してきたに違いない。だからこそ、今

もたくさんの人から愛されている「まつり」なんだと思う。「殻の外へ踏み出そう」のテーマについて「殻の外へ踏み出そう」のテーマについて「殻の外へ踏み出そう」のテーマについて自分なりに考えてみた。「殻」と聞いて真っ先にイメージした事は「保守的」「安定志向」という言葉が真っ先に浮かぶ。「満つれば欠ける」という言葉がある。月というのは、新月から始まって、三日月になり、半月になりやがて満月になる。しかし、満月になったと同時に、そこからすぐに欠けはじめる。人の心も同様で、現状に満足して、「もうこれでもいい」と思ってしまうえば成長できなくなる。「殻の外へ踏み出す」のに必要なものは、挑戦し続ける「勇氣」だと思う。現状に対し「否定形」をつけて「創造的な破壊」をする事で新しいものの、価値を生み出す。私自身も、入社して早や10年、ラグビーも引退して数年が経ち、会社生活にも慣れ、緊張感がいくらか薄れて来ている時期にあつたと思う。今、自分に何かに挑戦しているか？と問いかけると正直、胸を張って言える状況ではないが、今回、産政塾に参加させていただき、自分自身を見つめ直す良い機会になったと思う。

【最後に】

今回、産政塾に参加しなければ、経験できない事を体験させていただき、自分自身を耕す場を与えていただいた事に感謝している。あらためて「人との出会いの大切さ」や「挑戦し続ける事の大事さ」を気づかせてくれた。今後も、この出会いを大切に、交流を続けていきたい。

また、東塾長はじめ事務局の松井さん、スタッフの方々、また塾生の方々には、本当にお世話になりました。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、今回お世話になった皆様、アントニオ猪木氏が引退のリングで残した言葉でもあり、一休和尚の詩をお贈りし、筆を置かせていただく。

「道」

この道を行けばどうなるものか？

危ぶむなかれ

危ぶめば道はなし

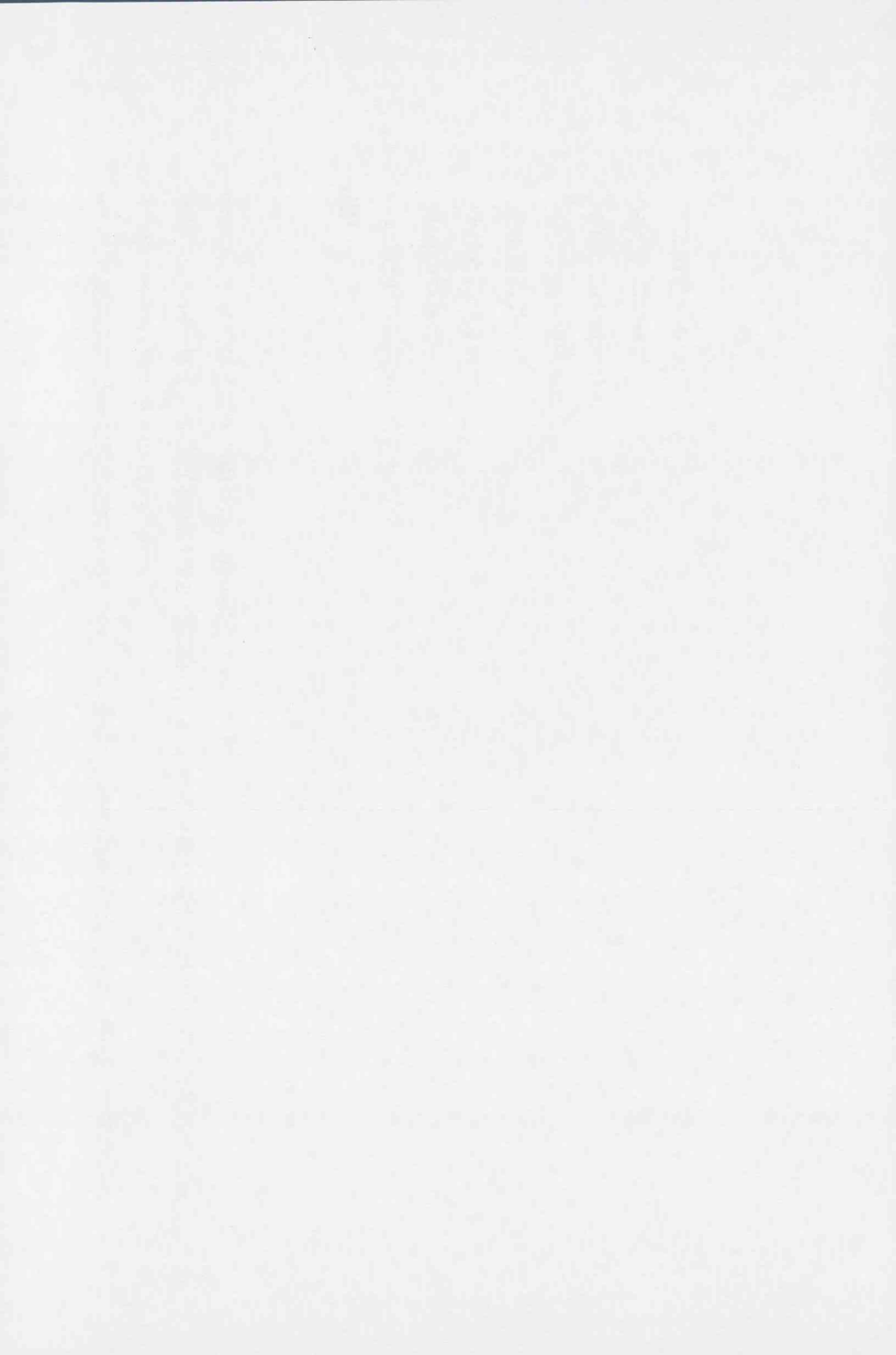
踏み出せば

その一足が道となり

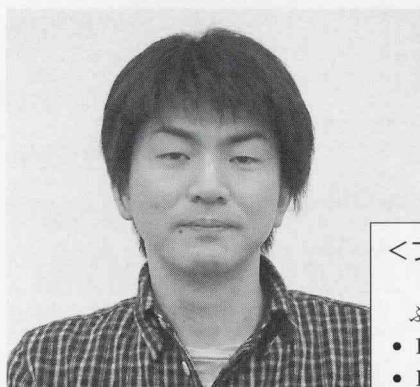
その一足が道となる。

迷わず行けよ

行けばわかるさ



リスタート



丸栄労働組合

藤田 茂 憲

<プロフィール>

ふじた しげのり

- 1970 年 愛知県名古屋市生まれ (36 才)
- 1993 年 ㈱丸栄入社
- 2006 年 丸栄労働組合 名古屋支部執行委員
現在に至る

<趣味> 音楽、プロ野球観戦、読書、
掃除、自転車に乗る事

〈はじめに〉

まず、このような貴重な経験を積む機会を頂いたことに感謝したいと思います。組合経験もほとんどなく、執行委員としての活動がほとんど出来ていない私に、ステップアップするチャンスを与えてくれた丸栄労組の皆様、忙しい時期にも気持ち良く送り出してくれた職場の皆様には大変に感謝いたしております。

今回の経験は、今までの社会人生活を振り返り、新たにスタートする為の大きなきっかけとなりました。他業種の方と共に苦勞して企画を形にしていく中で、初めて社会人としての自分を客観的に見つめる事が出来た気がするのです。

〈参加まで〉

昨年の暮れ、組合委員長から産政塾への参加のお話を頂いたときは正直、どういった活動をするのかまったくイメージできませんでした。（実際、活動の内容が本当に理解できたのは開塾式当日だったような気がします）参加へのチャンスを頂いた時は戸惑いも大きかったです。執行委員とはいってもキャリアは半年にもなっていないませんでしたし、営業部での日常の慌しさを思うと、不安が大きかったのも事実です。ただ、大きなステップアップへの期待に胸が膨らんでもいました。思えば22才で入

社して、（友人や取引先との関係を除外すれば）今までの長い間、全くの他業種の方と関係を持つ機会などありませんでした。増してや、一緒に企画を立案、実行となればこの先こんなチャンスは二度とないだろうと。それに、漠然と抱えていた不安がありました。自分は知らず知らずのうちにスポイルされてしまっているのではないか？正しいと思っていた常識は、本当は間違っているのではないか？大袈裟に言えばその答えを見つけられるのではないかと思つたのです。他業種の方はどういった発想をして、どのように企画を実現していくのだろうか？どんな環境の中で、どんな壁を感じ、どうやって乗り越えてきたのだろうか？それは自分の感じている壁とどう違うのだろうか？気付けば、私はその場で参加させて頂く事を組合委員長にお願いしておりました。

〈産政塾スタート〉

緊張の開塾式。私は人見知りで、わりにあのような場ではドキドキしてしまうたちなので、人知れず気合を入れて会場に向かったのを覚えています。そして、グループ分けして自己紹介。おお、偉大な会社ばかり。エリートだ。口を開いた途端、はあ？って言われるんじゃないのか！それは嫌だぞ。怖い。……ともあれ、私たちのグループはEグループとなり、企画実行日は6月の中旬となりました。そして、グループでの打ち合わせスタート。

よくも、みんな、ポンポンとアイディアがでるなあ。機関銃のように語り、視点のちがう様々なア

アイデアが議題に上り、ある物は消え、ある物は次のステージに上がっていく。咄然と感心している間にタイムオーバー。ああ。今から、報告会。誰が発表するの？ええ、俺？アイデアはたくさん出たけど、まだ何も決まっていないじゃないか！うう、しまった。どうするのだ？あつ、君、この状況を面白がっているだろう？笑っている場合じゃないぞ！

発表の場では「情熱」というテーマと現状のアイデアの方向性のみを発表いたしました。事務局より、ご意見を頂戴して、再度グループ内で議論。会場を後にする時には、「劇団を訪問する」という具体的なアイデアが固まりつつありました。その時はなかなか良いアイデアだと思っていました。が、実現に向けては険しい道のりが待っていました。

〈企画実現に向けて〉

思い返せば、随分呑気にその後は過ごしてしまったなあと、その時期のことは反省してしまいます。春闘の時期にもあたり、皆さん忙しい方ばかりなので、なかなか集まれる日時が決められない。一回目の会合では「劇団路線」を再確認して、2回目の会合（といっても2人だけの）では具体的にアタック先をピックアップ。第2回の産政塾の集まりでアタックの段取りを決めました。これで4月になっています。6月に出来るのか？不安を抱えながらも、ついに実現に向け、本格スタートです。

まずは、私がある劇団の代表者に電話でアプローチ開始。うっ、こちらの意図が説明しにくい。と

ところで私たちの事はなんと説明すればよいのだ？むこうも変なりアクションだ。やばいぞ。結果から記せば、最初のこのアプローチは見事に大失敗。しかし、事務局の協力もあつて、次の候補の劇団を訪問できることになりました。劇団の事務所は稽古場も兼ねた薄暗い建物。昭和の香りが濃厚に漂います。劇団の方からは結成当初のご苦労、栄光の日々、そして現在の問題をお話していただきました。しかし、劇団という団体の性質上、どうしてもプロテスト的な思想が、（もちろん悪質なものではありませんが）ネックになってしまふのと、人間的、時間的な問題で私たちが当初企画していた（みんな演技の練習をしたり、講義を聞いたり）内容が難しいとの判断が、後のメンバーとの話し合いの中で決まり、この「劇団企画」自体がここで頓挫してしまいました。この時点で5月中旬。企画実行日まで一ヶ月をきっていました。

《飛躍》

しかも、私の百貨店での業務がこの時期からオーバーラップするように忙しくなり、正直、産政塾自体に関わる時間がほとんど持てなくなっていました。

そんな時、「海陽学園を訪問」この企画が他のメンバーの中から急浮上しました。「将来の日本のリーダーを育成すべく全寮制で中高一貫した教育を目指す海陽学園。この学園の教育への情熱に触れ、自らを見つめ直す契機とする」いいじゃないか、すごい。しかも、サブリーダーの方たちがすでにアプ

ローチして、先方に出向ける段取りになっている。いつの間に。やっぱり、みんなすごい。刈谷のトヨタ車体さんのオフィスを借り、遅くまでアプローチ作戦会議。お菓子も持ち込んで、楽しい。いかに、遊んでしまう。さて、先方訪問日は6月4日。ぎりぎりのスケジューリング。グループのギアは、いきなりトップに入っていました。

6月20日。企画は無事終了しました。大成功。4日に学園を事前訪問、先方への最終アプローチの場や企画のツメの会議、そして実際の決行日に、またまたメンバーの口の機関銃は火を吹きまくり、気が付いたら帰りのJRの快速に揺られていました。

〈振り返って〉

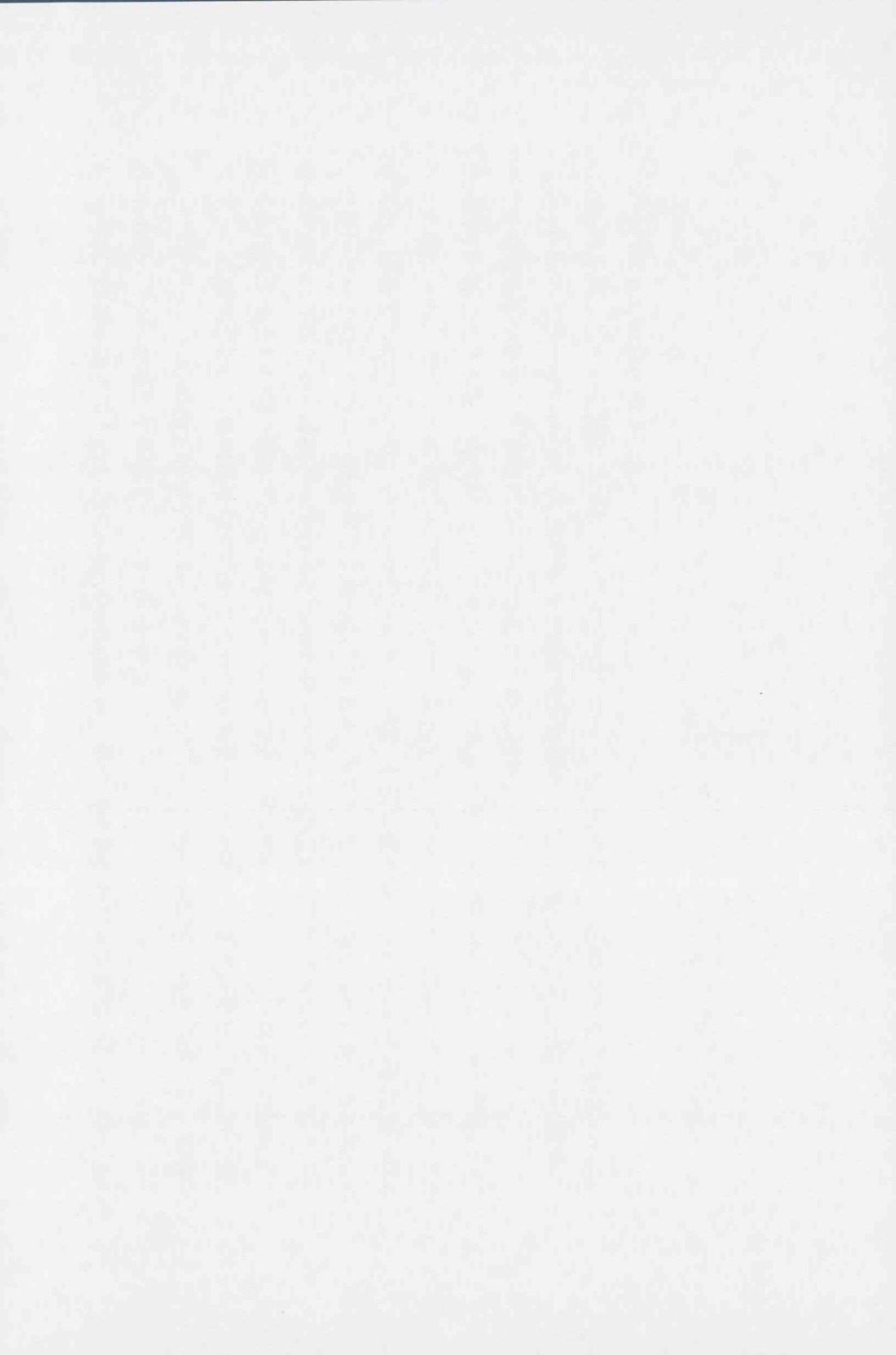
さて、この楽しいバタバタで私はいったい何を学び、どう自分を振り返れたのでしょうか？正直、まだ分かりません。グループの方と企画を通じて働けた事は大きな刺激になりましたし、企画を完遂させるそのパワーには圧倒されました。しかし、同時に共通点を感じる事も多く、ほっとしたというの、また本音ではあります。この経験が本当の意味で自分の糧になっていくのは、あるいはこれから先につかるであろう限界や、壁を乗り越えた時なのではないかと思えます。

ただ、今の時点で1つだけ強く心に残っている事があります。それは普段の生活でも、仕事でもとても大切な事なのではないかと思っています。そして、それは私が長い間忘れていたことでもあります。

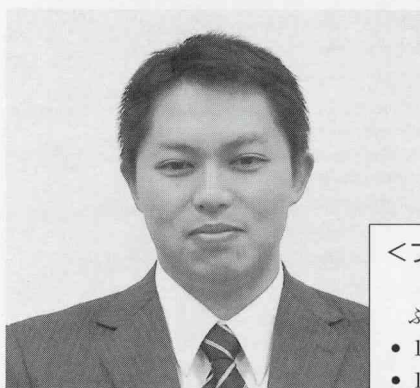
す。それは物事を成功させるために不可欠な要素です。それは素直でポジティブな心です。こう記してしまふと、なんだか当たり前のことのようにですが。

「ヒリズム」この感覚が社会全体に大きな影を落としているような気がします。そして、極論すれば、この感覚がすべての歯車を狂わしているような気がするのです。今回の活動で、私はただの一度もそんな否定的な空気を感じたことはありませんでした。振り返ってみると、これが、私と他の有名企業の方との違いを一番感じたところでもあります。どんな企画でも皆さん全力で、真正面からぶつかっていました。そして、すべての企画が成功を納め、楽しい思い出となったのです。それは当たり前で、感動的な発見でした。少しでもシニカルな気持ちで取り組めば、全てが寒々しい結果になっていたでしょう。わたしも社会人生活が長くなり、何もかも分かったつもりでいましたが、多くのものを失ってしまいました。そして、どこかネガティブな気持ち心が心を支配していたのかもしれませんが、それが私の限界を作り、私の殻になっていたのだと思います。

つらく感じる事もありましたが、実りも多い貴重な半年間でした。今、思っている以上にこの経験は、この先私が迷ったときの指針になってくれるかもしれません。再スタートをきるための大きなエンジンが心に宿った気がするのです。



良き出会いに感謝



トヨタ車体労働組合

舟 橋 史 洋

<プロフィール>

ふなはし ふみひろ (35 才)

- 1972 年 12 月 愛知県生まれ
- 1995 年 4 月 トヨタ車体株式会社入社
- 2006 年 9 月 トヨタ車体労働組合
専従執行委員
現在に至る

<趣味>スキー、ゴルフ、ドライブ

1. はじめに

私がこの産政塾に参加することになったきっかけは、昨年の9月に労働組合の専従執行委員になり、組合の副委員長からこの会の紹介を受けたからです。それまでは、お粗末ながらこの会自体の存在を知りませんでした。したがって、自分で探してきて、自ら積極的に手を挙げたわけではありません。言い方を変えれば、上司から与えられた業務という感覚でした。正直、当時は忙しくなりそうで面倒くさいとも少しは思っていました。ところが、過去に弊労組から塾生として参加した先輩方に「産政塾って何?」「行ってみてどうだった?」の類のことを聞くと、皆一様に肯定的な回答をしてくれました。ちよつと忙しくて大変かもしれないけど間違いないこれから組合活動をしていく上で役に立つと認識させられ、参加を決意しました。

2. 開塾式にて

事務局から事前に連絡を受けていたのでどんなものを準備したら良いのかわからなかったが、自分の企画案を持って開塾式に臨みました。私は誰と、どんな人とグループを組むことになるのか不安な気持ちで参加しました。初めて顔を合わせる人たちばかりで、どう切り出せばいいのか戸惑いながらも、同世代の人の集まりということに少しだけ安心感を得て意見交換を開始しました。過去の自分の

経過から思うに、日頃同じ職場で顔を合わせていても、一つの企画案を作り上げるのはそう簡単なことではないのに、今回はいきなり初対面の人たちと企画案づくりをしなければなりませんでした。お互いの考えを述べ合っているうちに、グループ企画の日程順が我々のDグループが一番最初になってしまいました。本番当日まで3カ月弱。しかも今期の一番バッター。不安はますます大きくなりました。

3. Dグループの企画

我々Dグループは、「チームワーク・組織力を学ぶ」をテーマにし、自衛隊への体験入隊をしようと言を進めていきました。過去にも産政塾で自衛隊に入隊したことがあることを聞き、これなら大丈夫と思っていましたが、近隣の自衛隊では日程が都合つかないことが判明。その理由は、4月は新入隊員の教育の時期で、我々の受入れは困難であるとのことでした。これは困ったことになったと思いました。自分一人だったら壁にぶちあたった状態になったでしょう。しかし、同じグループの仲間の意見、事務局のアドバイスもあり、新たに消防署で訓練の体験をするというアイデアが出てきました。しかも、豊田市消防署であれば、この産政塾にも豊田市役所からの塾生がいるし、既に産政塾を卒業した先輩にも豊田市役所の方がみえる。これなら受入れは間違いないと思い、少しほっとしました。3月初旬、Dグループの皆で豊田市消防本部を訪問し、4月の本番当日の打合せを、消防署の方とさせていただきました。私としては、もう何も問題なく受け入れていただけるものと思い込んでいた

のですが、打合せを進めていく中で、消防署の方から、「今日は私が対応していて、もちろん受入れは受諾しますが、問題があります。4月1日に定期異動がありまして、私が4月10日の本番当日、ここにいるかはわかりません。また、異動の規模も多い時は署員の約半数が異動します。したがって、受け入れる側としては、新しい組織になったばかりでまだ統制が充分とはいえない時期に当たります。本来ならば受入れを断りたいタイミングです。」といわれてしまいました。ひよつとしたら、異動で人がかわつたら直前で受入れ拒否されてしまうかもしれないという不安が私の頭の中をよぎりました。でも今更消防署をあきらめて他の企画を考える時間もないし。消防署の方からは、もし自分が異動になった時には、しつかり申し送りをしていただけるということを聞いたので、全く不安なしという訳ではないが、打合せも細部項目、細部スケジュールに渡ってほぼ済んだので、大丈夫だろうと考えました。

4月10日の当日は、天候にも恵まれ、開催することができました。規律訓練では隊列を組んでのラニングや指揮者の掛け声に従つての整列、ロープ訓練では地上数メートルのところを綱渡りなど私としては日頃不足がちになっている体を動かす体験も行いましたが怪我もなく、無事やり終えることができました。消防署の方の講演では組織の中で大切な「チームワークとリーダーの役割について」話をしていただき、私としては、「個々人の役割認識が大切であること」、「報連相が大切であること」をあらためて認識させられました。

4. 他グループの企画に参加して

第3回産政塾の裁判員制度の企画は、人生の勉強になりました。刑事裁判の傍聴では、判決が確定した被告人に対して裁判官が被告人を諭すように判決の内容の説明をされていました。日本の裁判官は一人でも多くの案件を抱えているにもかかわらず、事務的に裁判を行うのではなく、被告人を、一人の人間を更生させようとして事にあたっている姿に感動しました。また、今回のテーマである裁判員制度の模擬体験では、映画を見て、自分が裁判員になったらどう考え、どう判断するのかを体験することができました。日本の裁判は、犯罪者を懲らしめるためだけのものではないので、犯罪を犯した被告人をどう裁けば更生させられるのか、また、一方で被害者の痛みも考えて刑罰を考えなくてはなりません。裁判員の考えひとつで、被告人、被害者の人生を左右させることになります。今回は模擬裁判だからまだ少しは気が楽でしたが、もし実際に自分が裁判員に選任されたらと思うと不安です。ただ、自分一人の意見で決めるわけではなく、他の裁判員、プロの裁判官とも議論をして決めるので素人考えで間違った判決をすることは防げると思います。裁判員に選任される確率は、10,000人に3人の割合ということなので、実際自分が一生のうちで裁判員に選任されるかどうかはわかりません。しかし、今回の経験は模擬裁判であったとはいえ人生を考えさせられる貴重な経験でした。また、2009年の5月には施行されるこの裁判員制度を早い時期に経験できたことも有意義でした。

第6回産政塾の郡上おどり体験は、伝統文化の継承の難しさに共感しました。今の時代は盆踊り以外にも娯楽はたくさんあります。特に若者は、わざわざ盆踊りを楽しもうとは思わないでしょう。私も、今回のこの企画がなければ、郡上おどりを体験することはおそらくなかったと思います。生演奏のおはやしの屋台を囲んで皆で輪になって踊るという経験は貴重な経験でした。この産政塾の開塾式では、それまで何のつながりもなかった人たちが集まって、それでも1つのことを皆で話し合って進めてきました。郡上おどりも何のつながりもない人たちが1つのおはやしの屋台を囲んで一緒に踊りをすることによって、不思議と一体感が生まれていたように思います。はつきりとはわかりませんが、見ず知らずの大勢の人が集まって、1つのことをやるということのすばらしさを感じることができました。

5. 終わりに

1月の開塾式から、8月の閉塾式まで、1年たらずの期間でしたが、あつという間に過ぎてしまいました。開塾式の時に産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」だと言われました。今回参加させていだいて、自分が殻の外へ踏み出せたかはわかりません。ただ、企画をしているときに問題点にぶつかった時にそのことを一人で悩んでいるうちは殻の中にいるということかなと思いました。何でも人に頼れば良いということでは決していないが、そんな時には、仲間に相談して、助けてもらう、これが何も意識せずに普通にできるようになったら殻の外に飛び出したことになるのではと思っています。

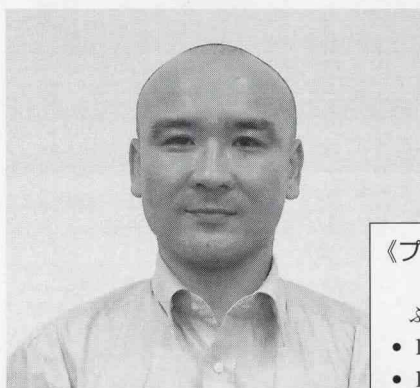
す。

残念ながら私はすべての企画に参加することができませんでした。第4回の海陽学園、第5回の屋久島、それから閉塾式。これは、自分がスケジュール調整をやりきれなかった結果であり、おそらく、何らかの自分の殻に入っている部分かと感じ反省しています。

この産政塾は、従来の自分の行動範囲ではおそらく一生経験することがないであろう体験ができたという点でとても意義深いものがあると思います。しかし、それ以上にこの産政塾で得ることができた大きなものは、新しい人との出会いだったと思います。開塾式の時はいずれの人ばかりで不安でしたが、その仲間で1つの企画を考え実際に運営をして、体験をして、お互いをまだ少しだけですが知り合うことができました。また、この会に参加する人たちがこの地域の様々な業種の人であることも意義深いと感じました。通常の仕事の範囲では、知り合う機会がない異業種の人との交流は、今までの自分とはちがった考えを教えてもらったり、中には、やっぱりそうかと共感させられたりというところもありましたが、自分自身、考え方の幅が少しは広がったかなと思います。今回の出会いをこの会だけで終わらせることなく、今後も大切にして続けていきたいです。

今回は、色々不安になったこと、困ったことがありましたが、周りの人に支えられることで、乗り切ることができたと思っています。この産政塾の塾生と、また、事務局の方と出会えたことに本当に感謝です。

『もう 1 人の自分探しの旅へ』



豊田自動織機労働組合

古 川 憲

《プロフィール》

ふるかわ けん

- 1968 年 5 月 愛知県常滑市生まれ
- 1987 年 4 月 株式会社 豊田自動織機
製作所 (当時) 入社
技能専修学園にて学ぶ
- 1988 年 3 月 共和工場
電子事業室 勤務
- 2005 年 11 月 安城工場
安全衛生環境 G 勤務
- 2006 年 9 月 豊田自動織機労働組合
専従執行委員
現在に至る

〈家族〉独身

1. 殻って何だろう？

労組専従役員となつて間もない2006年11月、これから取り組むべき課題についてあれこれ考へているところへ、『産政塾』参加の打診。凝り固まりつつある自分の脳をほぐして柔軟性を取り戻す良い機会と捉え、参加を申し込んだが、『何が起こるのだろうか』という不安感とは裏腹に、好奇心、ワクワク感がたまらなかつた。

思い起こせば学生の頃から未知の世界に興味を持ち、臆することなく飄々と足を踏み入れていくことは、良きにせよ悪しきにせよ（？）それなりにやつてきたつもりだが、いつしかこのワクワク感を感ずる機会も減り、その感覚さえ薄れてきたように思う。

きっとそこには自分で気づいていない『殻』があるのだろう。と、短絡的に答えを導いてしまうことと自分が自分の『殻』なのかもしれない。いや、こんな堂々巡りの自問自答を繰り返すことが『殻』なのか？

いずれにしても自分の足りない脳であれこれ考えていても仕方がない。『殻の外へ踏み出す』ためにも、まずは自らの『殻』探しに出発しよう！

2. 各回に参加して

全ての回に出席をする意気込みで参加したが、第1回の開塾式後の懇親会を拠所ない事情により急遽欠席したことを皮切りに、以降2回の欠席となつてしまったことは本当に心残りではあるが、参加させていただいた3回の会合で感じたことを綴ってみる。

名古屋地方裁判所では、2009年までに施行される裁判員制度を学ぶにあたり、実際の裁判を傍聴するという、まさに非日常で衝撃的な体験をした。被告と被害者、原告側検察官と被告側弁護士、それを裁く裁判官、小さな法廷ではあるが様々な立場の人々がここにいる事実、そして1人の人生が変わっていくという事実。薬物、傷害、窃盗など罪を犯したものが罰せられることは社会秩序の中で必要なことだとは解つていても、そこ至るまでの社会的背景や人の心情は事実であつて事実では無くなるという無情さ。

そのような状況下におかれながら、裁判員は私情同情を挿まずにあくまでも事実をもとに判決を導かねばならない。6人程度での合議となるが、被害者の人生を狂わせたことを踏まえながらも被告の人生を左右するものであり、自身の考えをしつかりと発言し他者の考えを受け入れ、深い論議を通してひとつの方向性を導くという合議の真髄を再認識した。

裁判自体は淡々と進行して事務的とも感じたが、判決後に裁判官が被告へ対して再起を促す諭しの言葉を掛けていたことが非常に印象的であつた。

海陽学園ではある意味、俗世と隔離された全寮生活と超一流の講師による授業から想像していたの

は、生徒にあせりと極度の緊張があるのではないかと思っていた。しかし、学園の建学の精神に掲げられた通り、生徒達は実に明るく元気に挨拶をし、テキパキと行動するなかでも笑顔が絶えなかったことが非常に印象的であった。厳しさの中にも愛情をもつて接する講師やハウスマスター・フロア・マスターの心が確かに伝わっていると感じた。

教育・育成とは、競争社会の中で生きる術を教えるだけでなく、礼儀、礼節、感謝、気品、思いやりの心を大切にする人格者を育み成長を見守ることなのだと思えた。これは現在の学校教育だけではなく、企業内あるいは地域社会における教育・育成にも通じるものではないだろうか。

400年の歴史を持つ郡上踊り体験では、技能・技術の伝承とコミュニケーションやチームワークの礎である“絆”について考える。

“伝承”については多くの企業で抱える課題の一つだが、日本の伝統文化においても後継者育成と技の継承が課題となっており、郡上踊り保存会の藤田会長のご講義では、稽古で踊りの型やお囃子の技を伝承できても、お囃子の支えがあつて踊ることができるといふ“おかげさま”の気持ちや、詩に込められた意味を理解して表現をするといった心の継承をはかることは難しい、とのお話があつた。子供の頃から様々な地方を周り色々な人々との関わりを経験させることで、自信を持たせ技に磨きをかけてと共に、踊りの魂と伝統文化を支える心の継承をはかっているそうだと。

こうした人と人のつながりのなかで、“絆”という字が示すように、糸の半分を誰かが持つていて、その相手と心から打ち解けた時、“絆”が生まれるのだろう。自分と出逢った人々全ては、自らが放

つもう一方の糸をあらゆる角度から持つてくれて、そこに立つ自分のバランスをとりながら支えてくれている。その絆をより深めていくためにも、「おかげさま」の精神を忘れてはならない。

3. おわりに

自分を取り巻く『殻』とは、人には見えていても自分には見えないものかもしれない。社会の枠や自身の殻のなかで創り上げられた『かくあるべき』姿にとらわれ、悩んだ末に『もう限界だ』と思う瞬間、人は自己抑制により限界線を自分の頭の中で創ってしまうのだらう。それが「壁」や「殻」といわれるものであるならば、一旦立ち止まり自らがおかれた現状を認識し、次の一步を踏み出す勇氣と、子供の純粋な好奇心から湧き上がる「何で？何で？」と人に聞いていたころのように、自分の素直な気持ちを言動で表すことが今の自分に足りないところかもしれない。

『こうなりたい！』『こうしたい！』といった信念をもって目標を達成していく自己実現に向けて、素直な自己顕示欲からくる自愛とともに、謙虚な気持ちでの慈愛を大切に育みながら生きていこうと思いつつ、結局いまままだ見えずに破りきれない自分自身の『殻』を叩くばかりで、今日もまた『もう1人の自分探しの旅』を続けている。

最後になりますが、この産政塾を暖かく見守っていただきました東塾長をはじめとする中部産政研の皆様、貴重な時を共に過ごし強い絆で結ばれた18期生同期の皆さん、最後までご迷惑をおかけした

しました事務局の松井さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

なんか、どっかのお坊さんみたいかな。：

前向きな姿勢



豊田合成株式会社

水 野 栄

《プロフィール》

みずの さかえ

- 1972 年 11 月 愛知県稲沢市生まれ
- 2005 年 7 月 豊田合成株式会社入社
人事部配属

〈趣味〉読書、ギター、ピアノ

1. はじめに

昨年上司から産政塾への参加を打診された時、是非行きたいと申し込みを行った。

異業種交流や様々な活動を通じて視野を広げるとともに、自分自身をさらに成長させるためにも、今後の課題を見つけないといけない思いであった。

新しいことに踏み出す時やチャレンジする時は少なからず勇気がいるものである。

私もできれば安定した場所に身をおきたいと思うこともあるし、特に今回は目の前の仕事を考えると最後まで出席できるかという不安もあった。

しかしこうした、折角の機会を逃すと、仕事でもプライベートでも、思わぬところで運を逃してしまいうものである。

塾誌を書きながら振り返ると、産政塾は、日常とは異なる得難い経験をすることができる、また自分を見つめ直す大変有意義な機会だったと思う。

訪問先の講師の方々、事務局の方々、第18期生の皆さんには心から感謝したい。

2. 活動を通じて

産政塾の活動は、全体を通して「基本の大切さ」を改めて考えるきっかけとなった。

豊田消防署では、実体験を通じて、消防署の方々がいかに日頃から意識を高くして訓練に取り組んでいるかを肌で感じることができた。

一人ひとりの役割をきちんと果たすためにも、組織内での「礼儀」や「規律」は徹底されており、その一端を訓練の中で体験することができた。

育てる対象者を「愛情を持って伸ばす」ことが重要という話には、厳しい指導の中にも、指導者の方の人柄が感じられた。

また、「勇氣は誰でも持っているが、その勇氣をだすことが大切」という言葉には重みがあった。

それは使命感からくるものであるのが、私には、なすべきことを何としても実行していく勇氣・使命感があるだろうかと考えさせられた。

海陽学園でも、「身だしなみ」、「言葉遣い」、「礼儀」などの基本を重要視して、職員の方々が情熱を持って、将来を担う若き人材の育成に取り組んでいた。

剣道の授業においても、先生が特に伝えたいこととして話されたのは、「礼に始まり礼に終わる」に象徴される「礼節」、そして「相手を尊重し、感謝する気持ち」であった。

3. 初心に戻る

誰でもこうした基本の大切さは「知っている」が、「実践する」ことはなかなか難しいものである。

例えば入社したばかりの時は、誰でも身だしなみはきちんと整え、始業時間にはきちんと席につき、周囲にはしっかりと挨拶し、上司・先輩のアドバイスも素直に聞き入れ、その日の仕事に精一杯向っていると思う。

それが何となく仕事の見通しがつくようになると、適度に手を抜いたりする時があるのではないだろうか？

私も初心に返り、常にプロ意識を持つて仕事に臨まなければならない。

そのためにも入社したばかりの時、私が考えていたことを振り返ってみたいと思う。

4. 3つの効果

05年に入社した際、私は中途社員（私）に期待されていることは何かを考えていた。

それは「補完効果」、「波及効果」、「相乗効果」の3つであった。

「補完効果」は、端的に言う「人が不足している」ということを解消するものである。

経営計画上、将来に向けて増員しておきたいということであるし、あるいは経営目標の達成に向け、必要な能力を持つ人材を採用したいということでもある。

すなわち、中途社員（私）は、会社が不足している知識（発想）を有するプロフェッショナル人材であることが求められ、そういう自覚で、常日頃から自己研鑽していく必要があると考えた。

次に「波及効果」は、新しい風を入れることで、職場を活性化させ、より良い職場環境をつくっていくことである。

会社（職場）をより良い方向へ変えるチャンスともなる。

ただし悪い影響を与えないよう、中途社員（私）は自らを振り返り、常に謙虚な姿勢で仕事に取り組む必要がある。

社会人としてのマナーは当然あるべきものとして、職場により良い効果をもたらす人材として、「品格」や「前向きな姿勢」は「職務遂行能力」とともに最重要であると考えた。

最後の「相乗効果」は、前述の2つの効果とも関連するが、新しい人材は、プロパー人材への刺激となる。

簡単に言うとう「○○さんには負けたくない」という気持ちが芽生え、自己啓発に取り組んだりする。そうした中で、仕事を通じて知識を共有することで、双方が高めあい、レベルアップすることができる。今振り返ってみると、未だそれほどの効果もあげられておらず、恥ずかしい限りである。

しかし一つ言えることは、こと前向きな姿勢や情熱に関しては、今も入社当時と何も変わっておらず、むしろ高まっているほどである。

それは熱心に私を指導し、叱咤激励してくれる職場の上司・先輩のおかげである。

そこには私を動機づける（私が意気に感じる）何かがある。

5. 意気に感じる

「意気」とは国語辞典によると、「何かを進んでしようとする気持ち」のことである。

通常、礼儀正しい人、日頃から協力的な人、仲の良い人、尊敬している人に対しては、依頼された仕事に対して、積極的に協力できる。

相手に対しきちんと目的を確認することはもちろん、依頼事項に対して、「こうした方が良いのでは」という提案を行うとか、不足している事項を自発的に補うとか、より良い方向へ進めていくことが自然とできる。

つまり「この人のためなら」と意気に感じて、依頼事項に対して110%とか120%の対応ができていく。

一方失礼な人、高圧的な人、自分勝手な人、他人に否定的な人に対しては、仕事をする際、あまり協力したいという気持ちがおきない。

これは相手に働きかけたい、働きかけようとする自分自身への動機づけが足りないからである。

しかし、企業人としては、どんな場合でも「依頼事項」、「必要とされること」について100%対応する姿勢が必要だと思う。（好き嫌いで仕事を進めていては会社が成り立たない）可能であれば＋ α （プラスアルファ）の対応をすることが理想であり、まず自分がそうすることで、相手も＋ α で対応してくれることがある。

そういう関係をいかに築くことができるかで、結果的に自分自身を向上させたり、良い結果を生むことに繋がっていくと思う。

ただ失礼な人……に対しても、その人の状況やタイミングでたまたまそういう場合があったかもしれないので人格の決めつけは禁物である。

もう一步その人に踏み込むことで、その人の違った一面も見つけられるかもしれないし、その人も仲の良い人がいるということは、良い点は必ずあるはずだと思う。

つまりどんな人にも長所と短所はあるのだから、自らを振り返って謙虚な気持ちで対応することが大切である。（少なくとも他山の石にする）

ただしどうしても、その人と人間関係を築けないと悟ったとしても……、それでも企業人として100%の対応をしたいと思う。

きちんと対応する姿勢を周りの「心ある人」は必ず見ているし、その時の行動に対し、周囲の共感が得られれば、職場の協力的な関係に広がりが生まれると思う。（波及効果である）

人間は気持ちに左右され、それが結果に大きな影響を及ぼすことも多い。

ただ1日の大半は会社で過ごすのだから、気持ち良く仕事をしたいし、だからこそ自ら進んで業務に取り組み、1日を充実したものにしたいと思う。

6. 今後に向けて

会社の全員が、目標達成に向けてベクトルをあわせ、知恵を結集したら、一体どれほどのことができるだろう。

私は人事部に身を置く立場として、そうしたことを念頭において、社員一人ひとりが前向きに、意欲的に仕事に取り組める人事施策や職場環境づくりを進めていきたい。

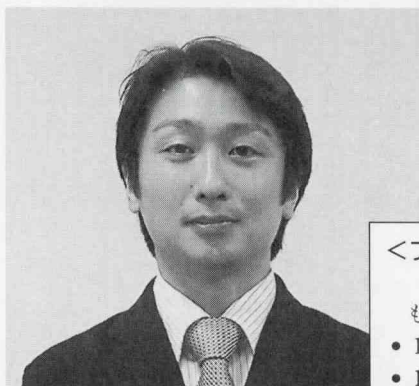
それが、会社の成長や毎日頑張っている社員とその家族の幸せに繋がっていくと思うと、やりがいもある。

そういう意味でもまず自らが前向きな姿勢で仕事に取り組みたい。

会社（職場）をより良くしていくために必要なこと、その答えは一つではない。

しかし最も重要なのは、それを実現しようとする「情熱」や「志」ではないだろうか。私は考えている。

少年易老学難成



トヨタ自動車労働組合

森 谷 東 也

<プロフィール>

もりたに とうや (33 歳)

- 1974 年 4 月 岡山県に生まれる
- 1998 年 4 月 トヨタ自動車(株) 入社
- 1998 年 7 月 第 1 調達部配属
- 2006 年 9 月 トヨタ自動車労働組合専従
執行委員
現在に至る

<家族>独身

<趣味>メタボ対策(水泳、ジム、散歩など)、
ゴルフ(まだ初心者ですが)、
旅行

〈はじめに〉

「少年易老学難成」昨年の大晦日に89歳で亡くなった私の祖父は、私が幼い頃、この言葉を何度も言い聞かせてくれた。入社して10年が経ち、三十路も十分超えた今、「おじいちゃんつ子」であつた私は、改めてこの普通の諺を痛感し、噛み締めている今日この頃である。

私は、1998年にトヨタ自動車に入社し、調達部門にてバイヤー一筋で8年間を過ごし、昨年9月より労働組合の専従執行委員となつた。そして今回、縁あつてか、産政塾メンバーの一員にさせていただいた。わずか半年間ではあつたが、産政塾では多くを経験し、学ぶことができ、私にとって大変有意義な時間となつたと思う。

〈入社〜組合専従まで〉

私が会社で所属していたのは、調達（購買）部門である。「調達（購買）」というと、世間一般的には、残念ながら良いイメージを持つていただいている方が少ないようだ。しかし、私は入社以来調達部門一筋ということで、大変愛着を持つている。ご参考までに、その調達部門について、少し触れさせていだきたい。

トヨタ自動車では、車を作るのに必要なものは全て調達部門で購入している。「部品」はもちろん

のこと、ボデーの鉄板やバンパーを作るための樹脂材料などの「資材」、加工したり組付けしたりするのに必要な「設備」や「金型」、出来上がった製品を運ぶ「物流」も調達部門が発注・価格決定を担当している。この調達金額は、製造コストの約8割を占め、トヨタにとって大変重要な部門の一つと位置づけられている(らしい)。ちなみに、トヨタのグローバルな調達金額は年間8兆円にも上り、それはオーストリアやノルウェーの国家予算を上回る規模である(らしい)。

調達部門のミッションは、以下の通りである。

- ① 最も良い製品を(品質)
- ② 最も競争力のある価格で(価格)
- ③ 最も早く(タイムリーに)
- ④ 長期安定的に 調達することである。

この、「良い(美味しい)」「安い」「早い」という、一見どこかの牛丼屋のような単純なミッションを達成するために、実に多くのことを行っている。入社した当初、先輩から「見積を数社から取って、安いところに発注するだけなら誰でもできる」と強く言われたことがある。トヨタの調達部門は、ただ単純に「買う」だけではなく、車両のコンセプト段階から開発プロセスにも関与するVE活動や、サプライヤーさんの製造プロセスに入り込んだ工程改善活動など、関連部門やサプライヤーさんと一体となった様々な活動を日常的に実施している。

「サプライヤーさんはパートナー」「共存共栄」と言った言葉も、よく先輩に言われた。当初は何か

違和感を覚えたこの言葉であるが、働いているうちに、その通りであると痛感したものである。先日
の新潟県中越沖大地震でも顕著に表れたように、ボルト一本欠けただけで車は作れない。オープンで
フェアな取引を大前提とした上で、現在お付き合いしているサプライヤーさんの困り事に、調達とし
てどう対応するか。これも調達マンとしての重要な基本姿勢の一つであり、私のDNAの中に深く刻
み込まれた。

そんな調達部門で8年間過ごし、実に多くの方々に、社会人・トヨタマン・調達マン（バイヤー）
としてのご指導をいただいていたと思う。部門内の上司や同僚はもちろんのこと、営業さんを中心と
したサプライヤーの方々、技術・生技部門など関連部門の方など、幅広く交流をさせていただける職
種で働いてきたことは、現在の私の人格を形成する上で、大きな影響を与えたと思う。

〈組合専従をして〉

今から丁度1年程前、私にとって大きな転機が訪れた。まがりなりにも8年間調達部門で育ち、一
人前（とはまだまだ言えなかったが・・・）のバイヤーとして、少し大きな仕事も任せて貰えるようになっ
ていた頃であった。また、トヨタに入社した頃からの夢であった、海外赴任の「適齢期」にようやく
近づいていた頃でもあった。そんな時、私にとっては、正に「晴天の霹靂」であったが、労働組合に
執行委員として専従することとなった。当初は正直複雑な思いがあったのは事実である。しかし、こ

の新たな世界に飛び込み、「組合員とその家族の真の幸せの実現」のために、職場では絶対に体験することがないであろう様々な活動を通じて、多くを学んでいることも事実である。

〈産政塾での活動を通じて学んだこと〉

組合専従をしてすぐ、縁あつてか、産政塾に入塾させていただくことになった。入塾するにあたり、まずは過去の塾生を調べてみた。そして、その錚々たる顔ぶれに驚いた。こんな立派な塾に、私のようなものが在籍しても良いものかと感じたものである。

◇ #1 開塾式（1/16）

産政塾の入塾申し込み用紙を送付してから1ヶ月、ようやく開塾式を迎えた。しかし、前日よりひどい腹痛に悩まされ、病院に行ったところ、その頃流行していた「ノロウイルス（非細菌性急性胃腸炎）」に感染していたことが判明。いつも流行に遅れ気味の私である（07/10現在…マイブームは、「そんな関係ない！オッパッピー！」である…真似していたら、先日「森谷さん、それはもう古い」と言われてしまった😓）のに、こういうところだけは敏感である。もしかしたら、入塾にあたり、精神的に緊張していたのかもしれない。皆様に病気をうつしてはならないとのことで、急遽欠席させていた。

◇ #2 豊田市中消防署を訪ねて「チームワーク・組織力を学ぶ」(4/10)

私にとって始めての産政塾の会合となった、消防署視察&体験。少し緊張して訪問したが、皆、温かく受け入れてくれた。実際に規律訓練などを体験し、とても充実した一日となった。とりわけ、消防現場31年の春日様のお話で、「チームワークを向上させることとは、個々の力の向上である」という言葉には、大変感銘を受けた。「チームワークとは、助け合うこと」かなと、漠然と思っていたが、その後の規律訓練や消防訓練見学を経て、「なるほど、究極の場面で組織としての力を最大限発揮する為には、基本動作の徹底や状況判断など個々人の力を高めなければならないのだ」ということを痛感した。

◇ #3 名古屋地方裁判所を訪ねて「非日常体験く裁判員制度について知る・考える」(5/11)

開塾式に引き続き、今回は欧州へ海外出張中であつたため、欠席。後に、「模擬裁判などを実施し、とても為になった」という、他の塾生の話を聞く度に、出席できなかったことを悔やんだ。

◇ #4 海洋学園を訪ねて「グローバル化時代の人材育成について学ぶ」(6/22)

日本の「イートン校」を目指していると言われる海洋学園。ハード面・ソフト面ともに正に一流である。「戦後ということ(東大教授)」「冥王星問題の背景とは(東大教授)」「ロボットと石器(産業技術総合研究所理事)」といった、各界の第一人者による特別講義。私は、大学時代にさえ、こんな面

白そんな授業を受けたことが無い気がする……立ち寄った中学1年生の教室には、私には絶対に解けないであろう数式がホワイトボードに残っており、壁には数学オリンピックの案内が掲示してある。美術室や音楽室も一流だ。剣道の先生は日本に数人しかいない8段の名士。見るもの、聴くもの全てに驚愕し、感嘆し、羨望した。これだけ知的刺激を受ける環境にいれば、「学ぶ」ことは「楽しい」はずだ。しかし、ハウスマスター（教員の資格を持った寮の先生）・フロアマスター（各企業から派遣されてきた各フロアの先生）からは、大変なご苦労をされている様子が伝わってきた。今の我々から見れば、ここの生徒たちはとても恵まれた環境にいると感じるが、遊びたい盛りの中学生が、親元から離れ、寮で団体生活するのは、彼らの立場にたてばつらいかも知れない。そのつらさを克服し、恵まれた環境を最大限活かして多くを学び、この学校から日本の未来を引っ張っていく、真のリーダーが生まれてくることを願いたい。

◆ #5 屋久島を訪ねて「人と自然環境の共生」エコツーリズムから学ぶ（7/2・3）

唯一の泊まり企画、かつ私の所属するAグループの企画である。「屋久島」の言いだしっぺは私であり、事務局の松井さんを困らせたものだ。しかも、私は企画段階に海外出張が重なり、ほぼ何もできなかった。いわゆる言いつ放しである。しかし、企画はドンドン進行し、当初危ぶまれた費用面を含め、課題が解決していく。出張から戻る度に、「えっ、もうこんなに決まっているの?」と、メンバーの企画力・行動力に脱帽した。

そして、訪問時。正に世界遺産の屋久島である。「屋久島自然館訪問」「屋久杉ランド視察」「ウミガメ産卵視察（有志のみ）」「YNACCエコツアー」など、盛りだくさんであったが、全てが印象に残る、屋久島でなければ経験できない体験となった。特に、「YNACCエコツアー」では、偉大な自然の中で森歩きをしながら、「自然環境の維持・向上」と「観光産業の発展」を両立させるエコツーリズムという考え方を学ぶことができた。（ちなみに、本年6月「エコツーリズム推進法」が成立し、平成20年4月より施行される。今後、この法律に則り、各施策を検討していくとのこと。今回を契機に、この法律の動向を注視していきたい。）

◆ #6 郡上踊りを体験「日本の文化、人と人との繋がり」「絆」の大切さを実感（8/8）

最後の企画である6回目の会合では、脈々と400年もの歴史を持つ郡上踊りを、郡上八幡にて体験した。小学校のお遊戯以来の「踊り体験」であったが、やはり何事も自主的に行動することは大切である。なんとなく踊れるようになってくると、とても楽しく、あつという間に時間が過ぎてしまった。生演奏に合わせて、皆が一心不乱に踊る楽しさ。こんなことも、産政塾全員の一体感を醸成してきた一因であろう。（ちなみに当日いただいた『踊り免許』は、我が家の一等地に誇らしげに飾つてある。）

以上の会合を重ねて、8/8の閉塾式を迎えた。各会合では、「チームワーク」や「リーダーシップ」、「環境」、「絆」など、多くを学ぶことができた。しかし、一番学んだのは、同世代に、これだけユニー

クで情熱溢れる方々がいるということである。東塾長のお言葉の通り、まずは「歴史」を学び、「情熱」を持つて、何事にも前向きに「行動」することが出来る人間となるべく、今後も少年の気持ちを保持して学び続けていきたい。

〈最後に〉

最後に、改めて産政塾の事務局・塾生にお礼を申し上げたい。東塾長には、お忙しい中、各会合や懇親会にご参加いただき、多くのことをご教示いただきました。塾長の尽きない前向きな情熱と、我々と同じところにまで目線を下げてお話しいただける姿勢に、改めて尊敬の念を抱きました。閉塾式後の懇親会での「ガンバローコール」を含め、正にリーダー像を、身をもつてご教示いただいていたように思います。事務局の松井さん、ありがとうございます。本当に一生懸命、各企画を支えていただきました。ありがとうございます。そして、最後の最後に、大変楽しく、多くを学ばせていただいた塾生の皆さん。大変ありがとうございます。先日は、一部メンバーと、第1回産政塾有志刈り大会を実施させていただきました。今回芝刈り大会会長のご指導のおかげか、その次の芝刈りでは自己ベストを更新することができました。（こんなところまで「学ばせて」くれる産政塾メンバーですごい！）そして、11月末には早くも同窓会を実施予定です。今後も末長く、よろしくお願い致します!!

第 18 回産政塾に参加して



フタバ産業株式会社

矢 野 悟

《プロフィール》

やの さとる (27 歳)

- 1980 年 1 月 岐阜県岐阜市生まれ
- 2002 年 4 月 フタバ産業株式会社入社
- 2002 年 6 月 人事部 配属
現在に至る

〈家族〉妻

〈趣味〉テニス、トレーニング

○はじめに

今回幸運にも入社5年目という比較的早い時期に産政塾に参加することができ、非常に楽しく、貴重な経験ができました。

私が産政塾を知ったのは2年前、同じ部署の先輩が参加されたことがきっかけでした。その先輩が参加する際の軽い足取りをみていつか自分もと思っていました。まさかこんなに早くチャンスが巡ってくるとは思っていなかった。誘いがあったときは即答で参加を決めました。

即答した割には、ついていけるか不安でしょうがなかった私ですが、それを暖かく受け入れてくれた18期のメンバーや、事務局の皆さん、また快く送り出してくれた上司、職場の方々に感謝しつつ体験したことや考えたことを綴っていきます。

○殻にうつって

産政塾のテーマは「殻を破る」ということなのでまず殻について書くかと思ひ、書き始めましたが、殻とは何なのか、殻を破るとはどういうことなのか自信を持って語れるほどのものはないのが正直なところ。せめて産政塾に参加する前と、参加後の変化を比較して書いてみようと思います。

産政塾参加前…欠点解消が大事

「殻」＝「自分の欠点」だとか「固定観念」であると考えていました。具体的には欠点は「引っ込み思案」「コミュニケーション能力不足」など、固定観念は「どうせできない」と感じる気持ちだとか。それゆえ「殻を破る」とは活動を通じて欠点が克服されたり、視野が広がることで固定観念が解消されたりすること漠然と考えていました。

産政塾参加後…自分の進む先を決めて、情熱を持って進むことが大事

産政塾に参加中や、参加後もこの原稿を書くためにも「殻」について色々と考えてきましたが、殻とは現在の環境だったり、自分の能力だったり、固定観念だったり、と多種にわたり、幾重にも重なって自分の周りを取り巻いている障害の総称だと思います。

そうすると自分の周りは殻だらけですし、殻について考えると自分の欠点や、できないことばかり考えることになってあまり楽しくありません。

そのような中で産政塾を通じて出会った人たちのことを考えると、たぶん自分の欠点を解消しようと動いているのでなく、自分が目指すものに情熱をもつて進んでいたように感じます。

やはり自分の周りの殻を見渡す前に、自分が目指すものを明確にするのが大切なのではないかと思

いますし、その目指すものに向かって進んでいく過程での苦労や努力が、産政塾が目指すような「殻を破る」ということではないでしょうか。

たぶん完璧な人間にはなれないので全ての殻を破る必要はなく、自分になりたいものの前に立ちふさがっている殻を中心に破っていけばよいのではないかと考えています。

○産政塾での活動

第1回 開塾式

不安7割、期待3割の心持で迎えた開塾式、はじめの自己紹介は堅い雰囲気で緊張感が漂っていました。自分が何を話したかは全く覚えていませんが、皆さんの発言は積極的で立派なものばかりで、産政塾への意気込みを強く感じました。

その後グループに分かれ企画の検討。グループのメンバーが良さそうな人ばかりで安心して討議することができました。

この時点で自分たちの企画は多少不純な動機を含むマナー研修企画でした。準備時間が欲しく順番は一番最後を選びましたが、この準備時間が長いことが逆のプレッシャーになるとは…

第2回 豊田市中消防署を訪ね「チームワーク、組織力を学ぶ」

産政塾での最初の企画、消防署と聞いた時はついぶん堅い企画だと感じましたが、終わった時には「転職するなら消防士か」と妄想するほど感銘を受けた企画でした。

特に印象深いのは講義いただいた春谷さんの「個の力が上昇すれば、チームワークも自然に上昇する」という言葉。馴れ合いのチームでは結果がでないことをはつきり教えていただきました。

また、訓練を見学させていただいた際にはその真剣さに圧倒され、人命救助に対する使命感を強く感じました。確かに人命救助に訓練以外の練習は出来ないもので、いかに訓練が大事か理解できますが、自分の仕事のリハーサルの姿勢と比較考えると情けなくなります。これからは消防の使命感に見習おうと心に誓った一日でした。

第3回 名古屋地方裁判所を訪ね、「非日常体験」裁判員制度について知る・考える」

裁判所で裁判を傍聴し、模擬裁判を体験。月並みですが、人が人を裁く難しさを実感しました。特に裁判では起こった現象だけでなく、その時の心情まで類推して判断を下さなければならぬ点により難しさを感じます。

これから一般人が参加する裁判員制度が始まりますが、従来の量刑の決め方が、どのように変わっ

ていくのか注意してみたいと思います。

個人的には量刑の重さに抑止力としての重さを加えていただきたいと思います…

第4回 海陽学園を訪ね、「グローバル化時代の人材育成について学ぶ」

巷で噂になっていた海陽学園を見学。本来ならなかなか見学を受け入れてもらえないらしく、貴重な体験をさせていただきました。

余談ですが届いた案内では徒歩圏内のような記述がありましたが、無理だろうとタクシーで行って正解でした。産政塾ではときどきこのような自分が試される機会があるようです…

さて肝心の学校は金持ちのエリート学校という印象をもっていた私ですが、大間違い。

現在の日本の教育を憂い、高度な学習と、様々な体験を全寮制の隔離された空間で行うことで、これから日本を背負ってたつ人材を育てるとの意気込みを強く感じる学校でした。

どこで聞いたか忘れましたが学園の皆さんからは「人材教育は情熱だ!!」という言葉が印象残っています。

この三河地域から日本を背負ってたつ人材が多数輩出されるのを期待したいと思います。また、産政塾のメンバー誰かの子供が入学する日が来るかもしれません。それも楽しみです。

第5回 屋久島を訪ね、「人と自然環境の共生」エコツーリズムから学ぶ

秋に旅行に行こうとしていた屋久島に期せずして行くことになりました。嫁には事前調査というところでなんとか許可をいただきつつ。それ以外にも仕事の繁忙期と重なったため行けるかを真剣に悩みましたが、周囲の理解でなんとか参加できました。

さて屋久島は公共事業と観光が産業の2本柱になっているなど覚悟していた以上に自然しかない島でした。

1日目は屋久杉を中心に見学、2日目は西部の照葉樹林を散策しました。(他に海亀の産卵観察ツアーもありましたが私は欠席) 景色はまさに「もののけ姫」の世界で眺めるだけでも素晴らしいが、屋久島に残る自然の価値はツアーガイドさんの説明があつて初めて理解できることが非常に多かったと思います。(例えば西部に残っている照葉樹林は海岸線から何kmにも渡つて原生林が残っており、それが希少であるとか、屋久杉は種が珍しいではなく、普通の杉が屋久島の環境によつてあれほどの成長をとげるものであるとか) そんな形で色々と説明をうけながら、一番考えさせられたのは「人間と自然は共生できるのか」ということでした。

屋久島では観光客の増加に伴い、エコツアーなんていいながらも確実に自然はダメージをうけているとことです。人間が生きていくためには産業が必要ですし、これについて考えると悩みは深いですが、ツアーのガイドさん曰く難しいことは考えず、すばらしい自然を見て感動し、それを守りたい

と感じる人を増やしていくことが大切とのことでした。

対策に特効薬はないですし、これからは私も個人レベルからできることをこつこつやっていきたいと思っています。

また、屋久島に来たことで逆に自分が住んでいる地域の自然についての無知さを知ったことも収穫でした。(ガイドさんから愛知県の自然について聞かれて全く答えられず) 身近なことに目を向けいくことが大切だと実感しました。

あと我々は「海亀の産卵はフラッシュ撮影しても許されることなのか」ということは今後継続して議論していく必要があると思いますので、追記しておきます。

第6回 郡上踊りを体験し、「日本の文化、人と人との繋がり絆の大切さを実感」

最終かつ待ちに待った我がグループの企画、開塾式から数えると7ヶ月という長い準備期間の間に色々と紆余曲折はありましたが、最終的にはこれからも産政塾の繋がりを大切にしていきたいという思いもあつて「絆」をテーマにすることにしました。

当日の踊り保存会会長の藤田様の講演では、「おかげさま」という言葉と、名(迷?) 司会振りを発揮した浅井リーダーの腹を抱えて笑う姿がとても印象に残っています。

個人主義に傾きつつある世の中で、「おかげさま」にあらわされる他人や、今あるものに感謝する

気持ちを忘れてはいけなことを痛感しました。

この日の終わりは実際に祭りに参加、個人的には免許を目指し無心に踊っていました。残念ながらすばらしい踊りを披露したメンバー？と違って、免許をいただけなかったものの、参加することで祭りが楽しく、魅力的だからこそ400年にわたり長く続いてきたということを実感しました。

会社など団体に置き換えてみても「絆」をつくるためにはその団体を魅力的にすることを考える必要があるのではと思いました。

産政塾で考えてみても企画が魅力的だから魅力的なメンバーが集まる。魅力的なメンバーだからより良い企画ができるとの好循環でなりたっているのですね。

さてこの日は23時名古屋着の強行企画、皆さんお疲れ様でした。

第7回 閉塾式

あつという間の半年間でした。名残惜しいように感じましたが、同窓会などで、今後の再会を楽しみにしつつ閉塾となりました。

おわりに

もともと人と話すのが得意ではない私ですが、人生を振り返ってみても多くの人との出会いによって育てられ、成長できたように思っています。

今回の産政塾でも半年間という短い期間でどれだけ成長できたか分りませんが、多くの人と出会い、色々なことを考えたことは、今後の自分の糧になると信じています。Cグループの皆さんはじめ同期の皆さん、事務局の方々、企画にご協力いただいた方々本当にありがとうございます。今後ともお付き合いをよろしく願います。

『18期産政塾の感想』

産政塾事務局

松 井 英 治

第18期産政塾が終了しました。今年も、月1回の会合を通し、お互いが打ち解けながら、あつという間に8月の閉塾式を迎えることになりました。私にとっては、3年目の産政塾の運営となりました。さすがに3年目になると、慣れもあり、先を読むことも可能になり、若干の余裕を持って、開塾式を迎えられました。今思うと、1年目は右も左もわからず、日々不安に感じ、どのように進めていこうかと必死になっていたことを思い出します。3年の経験は、とても大きく感じる。慣れから来る『大丈夫』という安心もあつたのも事実である。今年の運営にあたり、昨年の塾生から、グループの枠を超えた話し合いの場の要望が強く、グループメンバーの枠をはずし議論したり、みなで議論する場を設けたりするなど運営上で工夫を盛りこむことにしました。

さて、産政塾は、入社して10年前後。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力もつきつつあり、異業種30代前半の若者が集い、『殻の外へ踏み出そう』をテーマに、人材交流する場です。

今期の企画を振り返ってみますと、

【第1回】

『殻の外へ踏み出そう』とする同じ目的を持った総勢25名が、初めて顔を合わせ、心なしに緊張した面持ちの中で、開塾式を開催しました。そうした中で、グループにて企画立案を行い、その後、全員で意見交換を実施した。その意見は、とても自由な発想・アイデアが多く飛びかった。実現が不可能と感ずるような案でも、塾生の皆さんが、本気になって、『実現させよう』という意気込みが伝わ

てきた。今年も自ら考え、意欲溢れる人材が集まり、活動のスタートを切りました。

【第2回】

この会合では、日本人の大切にしたい価値観を見つめ直しながら、チームワーク、組織力を学ぶことを目的に開催した。当日は、最初に、『日本人の美徳・美しさとは何なのか、』など塾生皆で論議した。事前に、問題意識などを共有化したことにより、より関心を持って、この企画に取り組むことができた。その後、消防現場31年ベテランの春谷さんより、長年の実体験に基づいた『チームワークとリーダーの役割』について、語っていただいた。その中で、「救助とは訓練をこなして経験を詰め」、「明確な目標を部下に持たせ、優秀ではなく効果確認をすること」、「本質を伝えること」、「体で教える。自らが垂範すること」、「チーム全員の動きに気を配ること」などのお言葉はとても印象に残った。その後、実際に、訓練を体験した。規律訓練の歩行動作では、個々の基本動作をきっちり行うことが大事であることと、統率を保つためには、お互いが周りを見ること、リーダーがしつかり方向性を示すことが重要であることを体感した。また、豊田消防隊員の訓練を見学し、命を守るという大きな使命感を持ったレスキュー隊員の意識の高さに圧倒された。ここでも本気を見ることができた。また、塾生の姿勢も、何か掴んでやろうと本気で取り組んでおり、大成功に終わった企画であった。

学んだ事：個々の基本動作をきっちり行うことが大事である。お互いが周りを見ること。リーダーはしつかり方向性を示すこと。本気で取り組むことの大切さを知る。

「救助とは訓練をこなして経験を詰め」。

【第3回】

この会合では、裁判員として国民が選任される裁判員制度が2年余りに迫っていることから、名古屋裁判所を訪ね、いままでに経験したことのない裁判を体験しながら、裁判員制度への理解・関心を深めることにした。裁判所の厳格な雰囲気の中、心なしか、皆の背筋が伸びていたことを思い出す。恥ずかしながら、私自信、裁判の傍聴のみならず、裁判所に入ることすら、始めてであった。傍聴では、被害者の心情や被告人の生活環境など事件の背後に潜む社会環境もわかり、人を裁く重みを感じるとともに、社会格差など社会問題についても考えさせられた。実際に、皆で模擬裁判を実施した。当初は、人を裁くことの難しさから不安を感じていた塾生であったが、事件の争点を絞り込み、時に立ち返りながら、深い論議を通し、全員が理解・納得し、判決に至った。最後に、裁判員制度の狙いでもある、安心して暮らせる社会について何が必要なのか、塾生みなで論議した。皆の意見は、教育の充実、警察体制の強化などハード面での対応に加え、地域コミュニティの充実など、地域でのコミュニケーション（話し合い）の重要性について、意見が多かった。おそらく、今回の体験を通してわかるように、話し合う中で、多様な意見を聞き、皆で論議しまとめていくことの重要性を認識できた1日であったと思う。

学んだこと…多様な意見を聞き、皆で論議しまとめていくことが重要。

【第4回】

この会合では、海陽学園を訪ね、教育現場の第一線を体感することにより、人材育成を考える機会とした。当日は、金子チーフマネージャーと仲間事務長より、海陽学園の設立の主旨など概要をご説明いただいた。また、生徒と寝食をとにもするマスターの皆様のお話を聞くことができた。海陽学園の皆様の、日本の若きリーダー育成という壮大なる目標を掲げ挑戦している姿勢や、子供の成長を心底から願い、情熱を持って取り組んでいる教育現場を体感することでき、人材育成の重要性を再認識するとともに、人づくりは、教える側の必死さゆえに成り立つものであることを痛感した。また、剣道8段の名士である大嶽先生による授業を体験し、大人になるといつい忘れがちになる礼儀・礼節を重んじることの大切さを改めて学んだ。その後、塾生みなで、リーダーには、人に理解させ納得させる能力が必要であることから、お題をもとに2つのグループで相対する主張を行うリーダーシップ育成ゲームを実施した。自らの体験をもとにした主張や、グループ内で一貫した主張は、説得力を増した。今ごろ、塾生それぞれが、求められるリーダー像を考え、その実現に向け、学ぶ姿勢を大事にし、意欲を持って取り組んでいると思う。同時に、リーダーの役割でもある部下の育成についても、情熱を持って取り組んでいると思う。

学んだこと…人づくりは、教える側の必死さゆえに成り立つ

知識のみならず、礼儀・礼節が大事。体験をもとにした主張や一貫した主張は、説得

力を増す。

【第5回】

この会合では、『人と自然環境との共生／エコツーリズムから学ぶもの』というテーマで、世界遺産に指定されている屋久島を訪問した。屋久島の豊かな自然に圧倒される中で、自然環境の維持・向上と産業の発展を両立するエコツーリズムという取り組みについて、学ぶことができた。やはり印象に残っているのは、エコツーリズムのガイドに認定されているYNACの方達の案内のもと、自然の森である西部照葉樹林を歩きながら、森の生きるしくみについて学んだこと。YNACの皆さんは、熱心にしても楽しく、ご説明いただき、われわれも、知識が増えるにつれ、質問をしたり、森への興味が深まっていった。そのYNACの皆様に、『環境について我々は何をすべきか?』と聞いてみたところ、「そんなに難しく考えないでください。自然を楽しめば、おのずと自然に興味を持ち、そして、この自然を次の人に引き継ごうという心が芽生えてきます。それが、環境への取り組みの第一歩に繋がってくるのでは」とのアドバイスを頂きました。実際に、YNACの方達は、とても活き活きと楽しく取り組まれていたことを思い出す。確かに、何事も関心を持つことが大事である。関心がなければ、知りたいと思わない。そこで終わってしまう。今回の企画立案でも、本音を言うのと、屋久島について聞いたときは、事務局ながら実現は難しいと思っていた。そうした中、企画メンバーが、本気になって、事前調査をしていた。その資料はすさまじかった。いつしか私も屋久島に関心を寄せるようになり、

インターネットで調べたりもした。もちろん、大きな課題となったコストについても、投資と効果を考え、相見積りやプログラムを変えたりするなど企画グループの工夫があつたことは言うまでもない。行動したから、わかつたことがいっぱいあつた。誰もが環境問題については、わかつているが、なかなか行動に繋がらない。なぜなのか？短期的には自分には直接的に影響がない。長期的には間接的に影響がでくる。もっと創造力を高め、関心を持つことが大事なのであろう。

学んだこと…関心を持つと、もっと知ろうとする。それが行動への第一歩。

百聞は一見にしかず（実際に目で見ると、理解力に差あり。）

【第6回】

この会合では、『絆（ぎずな）』というテーマで、郡上を訪ね、郡上まつりの400年の歴史や文化に触れ、郡上おどりを体験することで、人と人との繋がりを『絆』の大切さを学ぶとともに、産政塾の『絆』を更に深めることを目的に開催した。当日は、郡上おどりを継承しているおどり保存会の会長である藤田様から、郡上おどりの歴史について、お話いただいた。「おかげさまで、郡上まつりも400年がたつ。この郡上まつりは、準備段階を含め多くの方の協力なくして成り立たない。」とのお言葉は印象的であつた。その後、講師の指導のもと、おどりを練習し、郡上まつりに参加した。地元の人達や観光客とともに、塾生も輪に交じり、踊つた。だれかれも皆、汗をかきながらも自然に笑顔に包まれ、一体となつた踊りはとても美しく圧巻であつた。産政塾のより一層の絆が深まつた会合となり、すつ

かり皆で打ち解けていた第18期産政塾でありました。

学んだこと…おかげさまで、感謝の気持ち大事。笑顔で満ち溢れた絆、とても爽快

【第7回】

最後に、『殻とは何か』、『殻の外へ踏み出すためにはどうすればよいのか』、そして『今後の決意』を皆で論議した。自分なりにまとめると、殻の外へ踏み出すためには、様々なことを経験し、そこから得た知識をもとに関心を持ち、次なる行動を起こす。時に行動は、苦勞を伴う。継続的に取り組むためには、現状を打破しよう、自分を変えようというやる気・情熱が必要である。では、情熱とは何か。おそらく、強い意志と、ねばり、いかに本気になつて取り組むかであろう。

この議論に参加するたびに、自分もがんばらなくてはいけない、という気持ちにさせられる。今年も、この産政塾の事務局をやり、皆さんの真摯な取り組みとしつかりとした考え方に触れることで、より一歩踏み出すことの大切さを改めて感じる事ができた。

○私の経験からリーダーとは何か考えてみた!!

私は、入社してすぐに、QC活動で小集団のリーダーに選ばれた。理由は、メンバーは、ベテランの大先輩であつたからである。そのときは、リーダーというものは、皆をぐいぐいと引っ張るものと思ひ込んでいた。もちろん、入社1年目の私にはベテランを引っ張ることは難しく、活動がすぐに停

滞した。そんな時に、声をかけてくれたのが、上司である。「もつと、役割を振れ。リーダーというものは、引つ張るだけではない、今の現状をよく見ろ。お前が知識・能力ともに一番未熟だ。どうすれば良いかわかるだろう。」引つ張ることは難しく、メンバーをやる気にさせることが必要であることは、その時の私でも気付いた。言いにくそうに、それぞれに役割をお願いすると、止まっていた活動が動き出した。さすがベテランである。個々の力で何とか乗り越え、3年立つと、わがサークルは工場でベスト5に入るサークルになっていた。私もリーダー3年目を迎え、この実績に甘えていたところもあった。そんなときに、他サークルから来た中堅のメンバーから、厳しいお言葉があった。「何がリーダーだ、メンバーに恵まれただけじゃないか、人のふんどしで仕事をするな。」とても悔しかった。でも、ベテランの方達に頼っていたことは否めない事実である。負けず嫌いの僕は、QCの本を読み漁った。同時に、自らテーマと目標を設定し、改善を進めることにした。まずは、現状把握。「ここが改善の肝だ」、とよくベテランメンバーは言っていたのを思い出す。前後工程にも足を運びながら、業務フローと工数表を作成した。それをやるだけでも、大変なパワーが必要であった。「何しに來たのだ。仕事の邪魔をするな。」と邪魔者扱い、かなり凹んだことを思い出す。この経験は、何もないところからスタートする難しさと、相手をお願いする為には、しつかり狙いを伝えることの重要性を気付かされることになった。また、不思議なもので、現状の実態を把握すると、様々な課題が浮き彫りになってくる。現地・現物・現認とはこのことだ。この改善は、業務の工数低減と標準化を図り、QC発表会で工場の代表にもなった。資料づくりに際しても、定時後、工場全員で助けてもらっ

た。今思えば、結局は、自分の力だけではなく、人の力に頼っていた。また、あきらめそうになった時に、上司とベテランの方達が自然に励ましてくれていたことを思い出す。

この経験は、いまでも自分の仕事の糧になっている。『リーダーとは何ぞや?』という問いに対し、思うにビジョン・目標を明確にし、常に周りを見ている人。部下にとっては、誰かが見ていてくれると思えば、大きな力となる。いつしか、あのメンバーで仕事をしてみたいと思う。その日のためにも、様々な経験を積んで、自分が成長しておきたい。恩返しをしたいと考えているが、そのときのメンバーは、すでに退職する人もでてきている。少しの寂しさがありがとうという言葉でいっぱいである。

○18期産政塾の皆様へ

この産政塾を通し、皆さんと接することができ、いろんな考え方に触れることもでき、改めて自分の原点を見つめ直すことができました。まずもって、有り難うございます。

今回の18期産政塾のメンバーは、表にでてグループを引っ張る人もいれば、裏方に徹し縁の下の力持的な存在としての確なアドバイスをしている人もいた。状況を瞬時に捉え、企画立案が思い通りに進まなかったら、行動力のある人が先方との調整をしたり、遅れが発生したら、次の案を考え持ち込んだりするなど、自らが考え・行動していたことを思い出す。それぞれが役割を認識し、協力しながら、取り組んでいた18期のメンバーであった。第2回の会合で、組織は個人の集合であり、個人が自分で考え、正しく行動することが大事である。同時に、リーダーはその方向性を示してあげること

が大事ということを学んだ。このような組織は、この変化の激しい時代に対応できる組織なのである。まさに、18期産政塾のような組織ではないかと思う。

そのようなことを踏まえると、「救助とは訓練をこなして経験を詰め」という言葉にもあるよう、個人として、普段からコツコツとまじめに本気（一生懸命）で取り組み、個人が強くなること（タフ）が必要なのである。同時に、リーダーとして、組織の方向性を示すことが必要なのである。今ごろ、それぞれが求められるリーダー像を考え、その実現に向け一生懸命に取り組んでいると思うが、1つだけお願いしたいことは、上司の立場になった時、部下に関心を持つて上げて欲しいと思う。関心を持つことは、行動の一步である。部下にとっても、それは大きな力となり、仕事への関心を持ち、行動へと繋がっていくものである。

以上のような行動を持続するための基盤は、やはり、東塾長の好きな言葉である「情熱」なのである。みんな閉塾式の時、「情熱」について、熱く語ってました。この情熱（挑戦意欲）を持ちつづけるためにも、18期産政塾のつながりを大切にしていきたいと思います。私は、産政塾を通して、おかげさまで、76名の塾生と出会い、様々なことを学ぶことができました。今でも、頼れる存在として、お付き合いさせていただいております。個人的な業務や、今回の会合でのアプローチする際にも、かつての塾生さんに、大変助けられました。皆さんにとっても、ここでの繋がりは財産になるかと思っています。ぜひ、プライベートも含め、交流を図っていただきたいと思います!!

そう言えば、皆様から多くの運営上の課題・要望を頂きましたので、事務局でしっかり論議し、19

期の産政塾の取り組みに繋げていきたいと考えております。

この18期産政塾も無事成功に終わったのも、多士済々たる塾生達がいたからこそであります。これまでの活動に感謝するとともに、それぞれの職場で、より一層ご活躍を楽しみにしております。

（東塾長の号令のもと、皆でやった頑張ろう三唱、思い出します!!）

最後に、ご多忙の中、業務のスケジュールを調整し参加いただいた塾生の皆様、また送り出していただいた職場の皆様、そして企画を実行する上で大変お世話になった関係各位には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

次世代を担う若者たちと接して

(季刊誌産政研フォーラム No.75 の巻頭言の記事から)

中部産政研 理事長

東 正 元

中部産政研の教育・研修事業の1つに「産政塾」がある。これは「殻の外へ飛び出そう」をテーマに、幅広い業種から若手のリーダー層を塾生として派遣いただき、塾生自らが発案・企画・実践し、その中でホンネの議論を交わしながら、自らを磨く道場とも言うべきものである。今年の産政塾は1月にスタートし8月に終了した。私自身も塾長として塾生たちと行動を共にした中で感じた事を紹介したい。

今回の塾生は総勢25名、ほとんどが30歳前後の若い層で、製造業、サービス業、役所などの出身であった。開塾式早々から皆で議論を交わし企画を進めた。その内容の一端を紹介する。ねらいを明確にし、座学、現地現物、体験、学んだことの全員共有という図式になっている。

*「チームワーク・組織力を学ぶ」では豊田市消防署を訪問。人の命を守るという使命を果たすためには、基本に忠実、個々の力を高める、チームとしての役割の認識と完遂、リーダーの明確な指示、これらが必要要件。それは緊張感と規律ある訓練を繰り返すことで修得できること。これらをレスキュー隊員の訓練の見学と自らの訓練体験から学んだ。

*「非日常体験・裁判員制度について知る・考える」で、名古屋地方裁判所を訪問。裁判傍聴と模擬裁判を通じ、人を裁くことの重みとその背景にある社会問題、安心して暮らせる社会には何が必要なのかなどを学んだ。

*「人材育成の現場を知り、情熱を知る・将来の日本のリーダーを育てる」では、海陽学園を訪問。

チーフマネジャーやハウスマスター（寮での指導者）からのお話し、授業と寮生活も見学。ハウスマスターはきめ細やかに生徒と交流を図り、性格と心の変化を読み、良いところを気付かせ伸ばし、その中で人として大切なことを教え、若きリーダーに育てようとしている。学力だけではなく道徳心や人格形成に力を注いでいること、人を育てる情熱と責任感を感じ取ることができた。

* “人と自然環境との共生”エコツーリズムから学ぶもの”では、世界遺産の屋久島を訪問。自然の雄大さ奥深さに包まれながら、自然を守っている方たちの情熱と地道で大変な努力と苦勞に触れ、環境問題への取り組みの必要性と何にも増して自らが行うことの大切さを学んだ。

* “ぎずな”をねらいに、郡上まつりを訪問。保存会の皆さんから、生い立ち・歴史について話を聞く。400年もの間、多くの人に親しまれている理由は「お蔭様で」の言葉に集約される。「協力してくださる方、参加してくださる方」への感謝の思いと日本文化を継承したいとの情熱であった。また全ての人が踊りを通じて一体になれる楽しさも実感。

こうした研修の中で、塾生から感じたことは、まずチームワークと行動力である。職場も違い、業務多忙の中で、連携をとりあいカバーしあいながら、企画・調整・準備・実施を成し遂げ、しかもその内容もアイデアに富み充実したものであった。自らが動き、チームでやり遂げることは、仕事のみならず日常の生活の中でも重要なことであり、塾生たちの能力の高さを感じた。

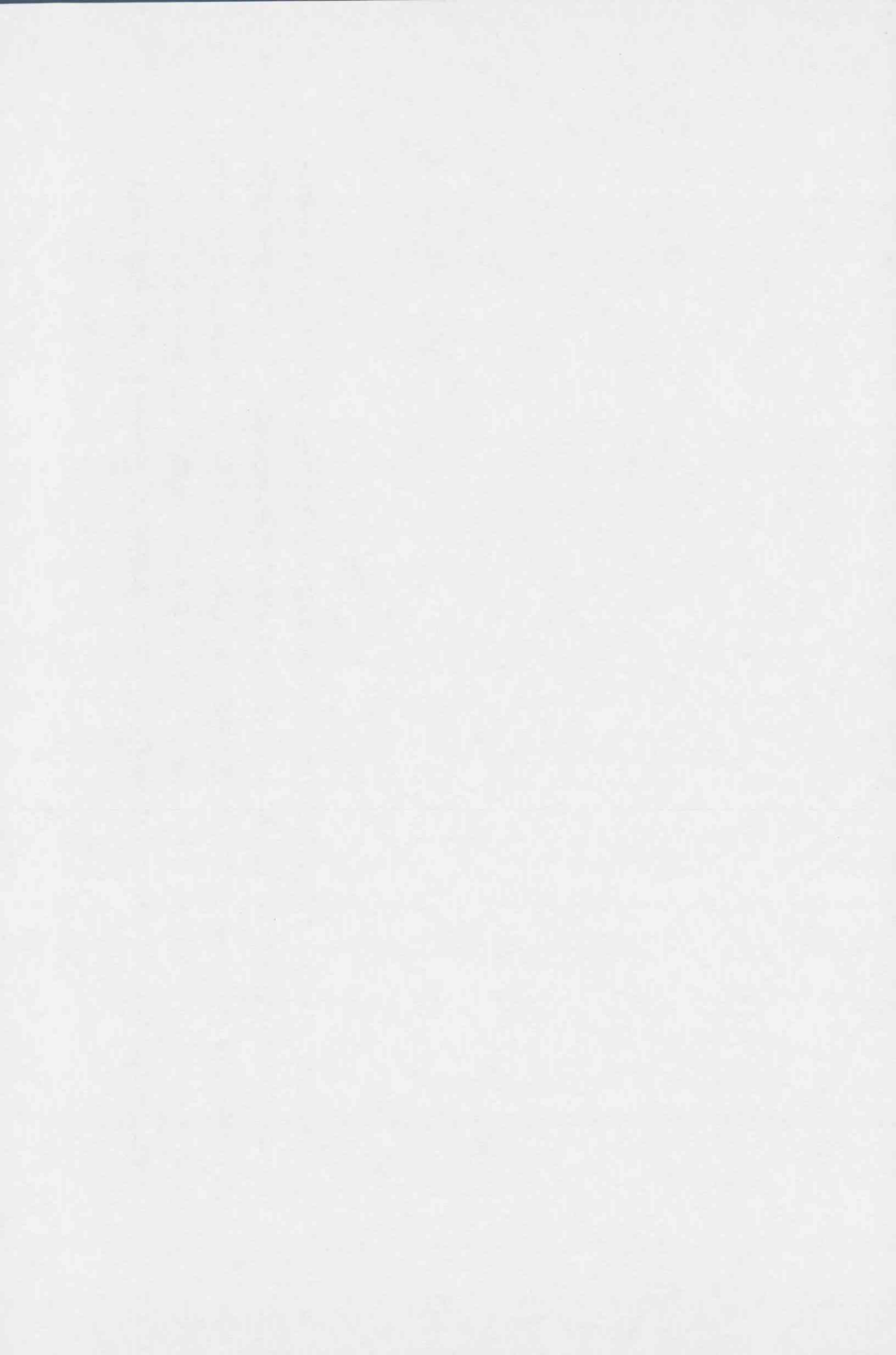
次は、発言力、ユニークさ（型にはまらない）である。このことは全般を通じ感じられた。リーダー

シップ育成ゲームというのがあった。ふたつのグループに相對するテーマ（例えば海が良い⇔山が良い、洋食が良い⇔和食が良いなど）を与え、それぞれ全員がグループでの一貫性を保ってディベートするもので、準備時間3分、発言一人30秒というゲームである。私自身、頭の中で何を主張できるかやってみたが、なかなか難しく、どのような展開になるのか興味をもつて聞いていた。結果は私の予想を超えるものであった。なるほどと自然とうなずけることやそんな観点もあつたのかと思うことが示され、笑いを誘いながら分かりやすく話をするユニークさもあり、個々人の主張点にダブリがなくチームとしての一貫性も保たれていた。チームをまとめたリーダーの働きが目に見え、浮かぶものであった。

3つ目は取り組む姿勢である。私も塾長として参加し、塾生たちの議論に加わる機会があつた。また体験の場にも参加した。それを通して感じたのは、何かを吸収しようとする意欲である。意欲を前面に出すタイプと表に出さないタイプがあるが、共通して態度・顔つき・目つきでその意欲を感じることができた。知識を高め視界を広げ能力アップしていく上で重要なことである。

今、人材育成が喫緊の課題だと言われる。それは人材が育っていないとの危機感の裏返しでもある。しかし今回の塾生たちを見ると、良い人材が育っていると心強く感じた。企業の中にはこうした人がまだ多くいるはずで、磨けば光る原石がまたのごとくあるのではないかと思う。成長する過程で必要なことを教え、やる気を引き出し、活躍できる場を提供していくなど、人を育てる行動をすれば心配はいらない。ボールは育てる側にあるのではとの認識もある。

最後に塾生にエールを送りたい。産政塾で共にした仲間を大切にして欲しい。それは将来の自分の人生における宝である。また将来への夢を持つて欲しい。夢は成長のエネルギーになる。そして夢を実現するため、果敢に行動して欲しい。感動できる感性を磨いて欲しい。感動は心を豊かにする。何事にも情熱を持ち、一生懸命取り組めば感動は生まれてくる。繰り返しになるが、学び身につけることはまだまだたくさんある。何事にも前向きに情熱を持ち、そして貪欲に吸収して欲しい。頑張れ！



產政塾活動記錄

《第1回会合》

期日：2007年1月16日（火）

場所：カバハウス

内容：第18期産政塾開塾式、
塾長挨拶、塾生自己紹介、
グループディスカッション
懇親会

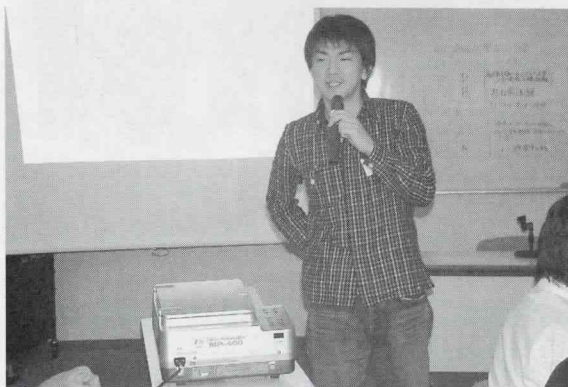


18期産政塾に集った塾生



東塾長より塾生へ激励
の言葉

グループ討議では論議
も闊達に



各リーダー、企画への
熱い思いを語る

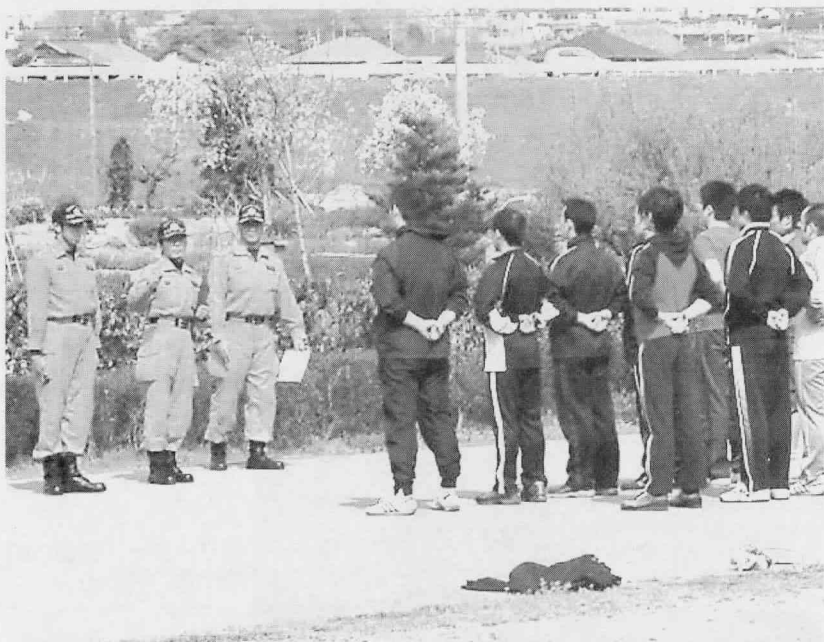
《第2回会合》

期日：2007年4月10日（火）

場所：豊田市中消防署

内容：「チームワーク、組織力を学ぶ」

講話、施設視察、討論、訓練、プロの技を見る
懇親会



規律訓練を体験

個々が基本動作をきっちり行う、同時に周りを見ること。



消防現場 31 年の春谷
様による講演
『チームワークとリー
ダーの役割について』
：救助とは訓練をこな
して経験を詰め

体験を通し学んだこと
を論議



消防の出動訓練など見
学
：本番さながらの訓練
に圧倒

《第3回会合》

期日：2007年5月11日（金）

場所：名古屋地方裁判所

内容：「非日常体験 ～裁判員制度について知る・考える～」

講話、裁判傍聴、模擬体験

懇親会

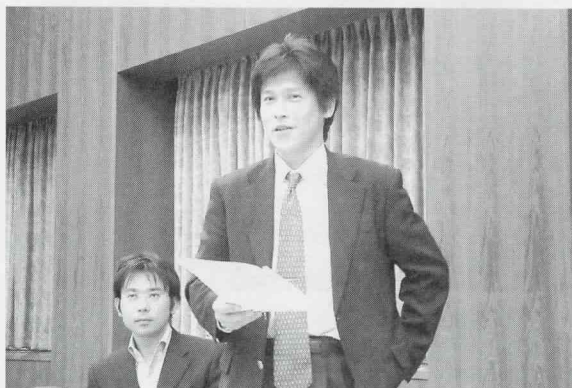


裁判所の厳格な雰囲気の中で、背筋を伸ばしながら参加



地方裁判所の鈴木様による裁判員制度の狙いや概要についての説明
：裁判員制度の狙いの1つとして、安心して暮らせる社会には何が求められるか皆が考えること

《模擬裁判を体験》
どのような量刑が妥当であるか、グループで
論議



判決の読み上げ
：論議の争点を明確にし、時に立ち返りながら、深い論議を通し全員が理解・納得し、判決に至った

《第4回会合》

期日：2007年6月22日（金）

場所：海陽学園

内容：「グローバル化時代の人材育成について学ぶ」

講話、施設見学、討論、リーダー育成ゲーム

懇親会



金子様、仲岡様による『海陽学園の概要について』

：日本の若きリーダー育成という壮大なる目標を掲げ挑戦

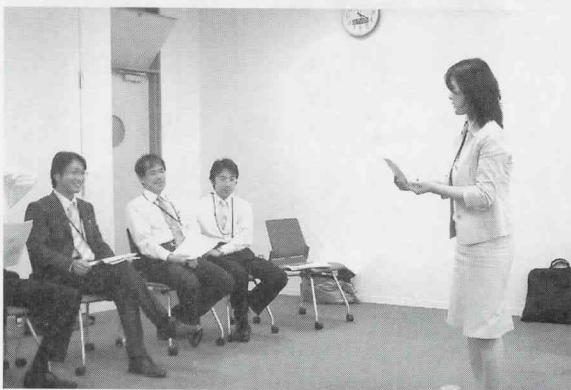


ハウス・フロアマスターとのディスカッション

：子供の成長を心底から願い、情熱を持って取り組んでいる教育現場を体感

剣道 8 段の名士である大嶽先生による授業を体験

：武道は、『礼に始まり礼に終わるという』、心から相手を尊重し、感謝の気持ちを大事にすること



お題をもとに2つのグループで相対する主張を行うリーダーシップ育成ゲーム

：自らの体験をもとにした主張や、グループ内でつながりを持った一貫した主張など述べあった。

《第5回会合》

期日：2007年7月2日（月）・3日（火）

場所：屋久島

内容：「人と自然環境の共生～エコツーリズムから学ぶ」

講話、自然を満喫、エコツアー参加

懇親会



紀元杉をバックに記念写真：開放感と高揚感から、自然に笑顔



屋久島町役場の日高課長による
『エコツーリズムの取り組みについて』
：エコツーリズムとは、
自然環境の維持・向上
と観光の発展を両立した取り組み

自然の広大さを満喫
：自然を楽しむことが、
環境維持・向上の第一歩



西部照葉樹林を歩きながら、YNACの皆様から楽しく学ぶ
：この自然のすばらしさ、心に刻んだ。この自然を次の人に更に美しい姿で引き継ぐことを誓う。

《第6回会合》

《第6回会合》

期日：2007年8月8日（水）

場所：郡上八幡

内容：「郡上踊り、日本の文化・

人と人との繋がり【絆】の大切さを実感」

講話、施設見学、おどり練習・実演

懇親会



講師の指導のもと、塾生が1つの輪になり、郡上おどりを練習



藤田会長による講演
「郡上まつりの歴史」
：おかげさまで!!
多くの方の協力なくして
成り立たない。
感謝の気持ち忘れず
に・・・

郡上おどりに参加。
：地元の人達や観光客
とともに輪に交じり、生
演奏の三味線などに合
わせ、踊った



わきあいあい、本音が
言える仲間になった
18期産政塾生

《第7回会合》

期日：2007年8月20日（月）

場所：カバハウス

内容：第18期産政塾閉塾式

「殻の外に踏み出そう」について討論懇親会



皆さんお疲れ様です!! 今後のますますのご活躍を期待しております。
(頑張ろう!! 頑張ろう!! 頑張ろう!!)



東塾長による贈る言葉

「殻の外に踏み出そう
について」塾生全員で
議論



今後の決意を語る



産政塾歴代卒業生

※組織名は参加当時の名称

第2期生

(14名)

朝位 克 トヨタ自動車(株)
 伊藤 哲 全トヨタ労働組合連合会
 太田 雅也 名古屋鉄道(株)
 大町 重人 アイシン精機(株)
 桑山 幸次 (株)東海銀行 (株)U F J 銀行)
 小西 正晃 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 高橋 恭弘 トヨタ自動車労働組合
 種市 章 豊田合成(株)
 丹羽 漸 中部電力(株)
 松下 恭規 日本電装(株) (株)デンソー)
 水野 和明 全松坂屋労働組合
 水野 真二 アイシン労働組合
 山内 潔 トヨタ車体(株)
 萬谷 孝之 (株)松坂屋

第1期生

(14名)

江口 光市 全トヨタ労働組合連合会
 尾関 勝隆 (株)松坂屋
 加藤 宏幸 日本電装(株) (株)デンソー)
 甲村 正男 トヨタ車体労働組合
 清水 和博 松坂屋労働組合
 鈴木 智博 中部電力(株)
 高木 英樹 名古屋鉄道(株)
 土屋 昇大 (株)東海銀行 (株)U F J 銀行)
 中山 直人 トヨタ自動車労働組合
 平野 富広 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 本田 文利 豊田合成労働組合
 前沼 聡 アイシン労働組合
 宮崎 直樹 トヨタ自動車(株)
 安井 雅章 アイシン精機(株)

第4期生	(16名)
北村 直久	日本電装労働組合 (デンソー労働組合)
竹内 順治	豊田合成労働組合
朝日 和寛	日本電装(株) (株)デンソー
田中 義和	トヨタ自動車労働組合
村田 滋	(株)東海銀行(株)U F J 銀行)
沢田大八郎	豊田自動織機労働組合
原 年幸	トヨタ自動車(株)
中村 武司	アイシン精機(株)
宮坂 和行	松坂屋労働組合
山田 法夫	名古屋鉄道(株)
秋葉 寛	中部電力(株)
駒沢 修	アイシン労働組合
岡 啓視	中部電力労働組合本部
加藤 秀夫	トヨタ車体労働組合
松野景之介	トヨタ車体(株)
相原 康伸	全トヨタ労働組合連合会

第3期生	(14名)
石鍋 寿久	トヨタ自動車労働組合
大島 一峰	アイシン精機(株)
大西 勝彦	豊田自動織機労働組合
神谷 直	アイシン労働組合
岸田 竜茂	中部電力(株)
雲井 浩	丸栄労働組合
近藤 郁也	トヨタ車体(株)
島川誠一郎	トヨタ自動車(株)
関谷 俊司	日本電装(株) (株)デンソー)
竹下 裕之	トヨタ車体労働組合
塚本 和宏	全松坂屋労働組合
遠山 泰弘	日本電装労働組合 (デンソー労働組合)
深谷 修	豊田合成(株)
宮川 学	名古屋鉄道(株)

第6期生

(15名)

林 恭吾 丸栄労働組合
 竹内 秀明 中部電力(株)
 近藤 均 トヨタ車体(株)
 光岡 博 アイシン労働組合
 向井 克行 日本電装(株) (株)デンソー
 説田 公人 トヨタ自動車(株)
 中村 文彦 松坂屋労働組合
 高橋 誠 トヨタ自動車労働組合
 本田 武志 アイシン精機(株)
 伊藤 裕章 豊田合成(株)
 大島 秀一 名古屋鉄道(株)
 森 晴哉 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 横田 晴充 (株)東海銀行
 (株)U F J 銀行
 桑山 完治 中部電力労働組合本部
 石川 勝幸 全トヨタ労働組合連合会

第5期生

(17名)

斉藤 正彦 丸栄労働組合
 橋本 亨 トヨタ車体(株)
 田島 健一 松坂屋労働組合
 稲川 敦之 名古屋鉄道(株)
 荒谷 育三 日本電装(株)
 (株)デンソー
 高井 信弘 豊田合成(株)
 長尾 基晴 アイシン精機(株)
 洲崎 典之 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 渡辺 潔 アイシン労働組合
 上田 信也 全トヨタ労働組合連合会
 杉浦 一成 トヨタ車体労働組合
 内田 厚 中部電力労働組合
 加藤 泰孝 中部電力(株)
 荻野 勝彦 トヨタ自動車(株)
 加藤 昭夫 トヨタ自動車労働組合
 磯部 謙二 日本特殊陶業(株)
 (株)東海銀行
 二木 芳樹 (株)U F J 銀行

第8期生

(22名)

有賀 文昭 中部電力労働組合
 伊藤 賢一 トヨタ車体(株)
 伊藤 友博 松坂屋労働組合
 岩城 史憲 名古屋鉄道(株)
 植松 良太 全トヨタ労働組合連合会
 粕谷 浩二 豊田市役所
 川村 淳一 豊田工機労働組合
 栗栖 秀人 (株)東海理化
 佐野 弘忠 中部電力(株)
 杉浦 公紀 アイシン労働組合
 中條 喜之 (株)デンソー
 所 秀樹 関東自動車工業(株)
 丹羽 広志 豊田合成労働組合
 根本 恵司 トヨタ自動車(株)
 服部 健司 デンソー労働組合
 早川 範一 (株)松坂屋
 廣瀬 登 (株)東海銀行 (株)U F J 銀行)
 船戸 正巳 アラコ(株)
 前田 孝広 丸栄労働組合
 前田 直人 トヨタ車体労働組合
 百瀬 和典 トヨタ自動車労働組合
 森本 浩二 アイシン精機(株)

第7期生

(17名)

川村 博隆 アイシン労働組合
 阿久津正典 豊田市役所
 村瀬 俊 日本電装(株) (株)デンソー)
 河路 直人 豊田合成労働組合
 小林 雅昭 全トヨタ労働組合連合会
 臼井 満 松坂屋労働組合
 星野 悟 中部電力(株)
 柴田 伸彦 中部電力労働組合
 小倉 克幸 トヨタ自動車(株)
 勝美寿美子 アイシン精機(株)
 西田 明生 トヨタ自動車労働組合
 高橋 剛 日本特殊陶業(株)
 吉田 茂 トヨタ車体(株)
 三川 高市 丸栄労働組合
 高井 康之 (株)東海銀行 (株)U F J 銀行)
 吉川 篤史 名古屋鉄道(株)
 田中 英司 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)

第 10 期生 (21 名)

石川 輝彦 アイシン労働組合
 奥田竜太郎 トヨタ車体(株)
 糟谷 道広 (株)デンソー
 門 孝裕 松坂屋労働組合
 川上 茂浩 中部電力(株)
 小坂 好伸 アイシン精機(株)
 近藤 理史 豊田市役所
 杉本 道男 日本特殊陶業(株)
 鈴木 亨 トヨタ車体労働組合
 鈴木 康紀 アラコ(株)
 高橋 勝将 デンソー労働組合
 丹下 隆吉 トヨタ自動車(株)
 徳増 達生 アスモ(株)
 戸田 覚 (株)東海銀行 (株)U F J 銀行)
 西井 俊哉 丸栄労働組合
 船間 淳也 名古屋鉄道(株)
 松田 齐 全トヨタ労働組合連合会
 武藤 成洋 豊田合成(株)
 安田 幸治 トヨタ自動車労働組合
 矢田 勝弘 フタバ産業(株)
 常 兆 名古屋大学

第 9 期生 (21 名)

足立 貴彦 松坂屋労働組合
 石井 直生 トヨタ自動車(株)
 伊藤 裕介 豊田工機労働組合
 宇野 庄一 全トヨタ労働組合連合会
 江口 淳 豊田合成(株)
 見城 篤 中部電力(株)
 榊原 悦人 丸栄労働組合
 坂口 登 (株)東海銀行 (株)U F J 銀行)
 柴田 徹哉 豊田市役所
 須崎 辰彦 トヨタ車体労働組合
 玉木 健二 中部電力労働組合本部
 恒川 智行 アイシン労働組合
 中出 裕之 関東自動車工業(株)
 浜口 誠 トヨタ自動車労働組合
 林 克憲 (株)デンソー
 平岡 典明 アイシン精機(株)
 古川 豊 日本特殊陶業(株)
 本多 篤 トヨタ車体(株)
 前川 武治 デンソー労働組合
 山田 泰準 名古屋鉄道(株)
 山本 雅章 アラコ(株)

第12期生 (22名)

内田 幸代 豊田市役所
 江尾 国博 名古屋鉄道(株)
 梶川 拓也 中部電力(株)
 柏谷 幸彦 豊田合成(株)
 加藤 秀人 トヨタ車体労働組合
 後藤 泰司 丸栄労働組合
 近藤 雅人 (株)豊田自動織機
 高橋 正典 デンソー労働組合
 武田 純康 トヨタ自動車労働組合
 竹中 隆志 松坂屋労働組合
 鶴見 実男 アイシン労働組合
 寺西 知雄 東邦ガス労働組合
 中里 浩一 (株)U F J 銀行
 中村 明史 中部電力労働組合本部
 芳賀 章弘 トヨタ車体(株)
 長谷部知英 フタバ産業(株)
 羽根 章人 アラコ(株)
 本田 隆英 アイシン精機(株)
 松尾 正樹 (株)デンソー
 水野 勝博 全トヨタ労働組合連合会
 村瀬 政彦 トヨタ自動車(株)
 若松 真理 全ユニー労働組合

第11期生 (25名)

池浦 芳一 トヨタ車体(株)
 石本 誉 デンソー労働組合
 板倉 智宏 全ユニー労働組合
 上別府伸一 アイシン労働組合
 大畠 隆之 (株)豊田自動織機
 岡本 雅典 アスモ労働組合
 小野田和広 丸栄労働組合
 柴田 博 フタバ産業(株)
 締次 顕治 松坂屋労働組合
 常 兆 名古屋大学 大学院 国際開発研究科
 杉下 昌明 東邦ガス労働組合
 大東 輝彦 (株)東海銀行 (株)U F J 銀行)
 高木 敏光 名古屋鉄道(株)
 高田 学 アイシン精機(株)
 滝野 仁 日本特殊陶業(株)
 武田 和則 中部電力労働組合本部
 鶴岡 光行 トヨタ自動車労働組合
 中村 英行 アラコ(株)
 林 賢士 豊田合成(株)
 三谷 建介 中部電力(株)
 武藤 俊和 トヨタ車体労働組合
 森 崇博 全トヨタ労働組合連合会
 山崎 一生 トヨタ自動車(株)
 横井 雅弘 (株)デンソー
 渡辺 明子 豊田市役所

第 14 期生 (22 名)

浅野 清輝 東海理化労働組合
 大川 博 デンソー労働組合
 奥 丈治 株式会社松坂屋
 梶田 進 トヨタ車体株式会社
 梶原 昭二 豊田自動織機労働組合
 川崎 貴之 株式会社デンソー
 栗原 尚子 アイシン精機株式会社
 小嶋 直樹 松坂屋労働組合
 佐藤 源信 アラコ株式会社
 白井 崇夫 刈谷市役所
 鈴木 輝行 全トヨタ労働組合連合会
 鈴木 利幸 中部電力労働組合
 苑田 隆之 中部電力株式会社
 千種 徳充 トヨタ車体労働組合
 柘植 孝悦 豊田市役所
 長岡 享史 トヨタ自動車株式会社
 藤原 誠二 アラコ労働組合
 堀田 大祐 名古屋鉄道株式会社
 山口 健 トヨタ自動車労働組合
 山下 邦彦 アイシン労働組合
 吉田 研太 株式会社豊田自動織機
 渡辺 憲司 丸栄労働組合

第 13 期生 (21 名)

井上 正勝 トヨタ自動車労働組合
 内田 恭介 中部電力労働組合本部
 梅田 清孝 フタバ産業(株)
 太田 正樹 松坂屋労働組合
 門井 徳孝 デンソー労働組合
 熊崎 俊哉 トヨタ車体(株)
 佐野 智弘 アイシン精機(株)
 鈴木 定晴 トヨタ車体労働組合
 鈴木 武 名古屋鉄道(株)
 田中 亘人 (株)豊田自動織機
 埴和田光紀 豊田市役所
 出口 隆浩 全トヨタ労働組合連合会
 中川 年史 アイシン労働組合
 野坂 利次 トヨタ自動車(株)
 服部 淳二 豊田工機労働組合
 水野 雅通 アスモ労働組合
 宮城 英樹 (株)デンソー技研センター
 村口 文希 刈谷市役所
 森 章浩 (株)U F J 銀行
 森 勝 東邦ガス労働組合
 山本 徹真 アラコ(株)

第 16 期生 (24 名)

青山 泰孝 全ユニー労働組合
 赤川 直也 トヨタ紡織労働組合
 安東 英二 松坂屋労働組合
 大橋 弘章 中部電力株式会社
 小川 恵孝 トヨタ紡織株式会社
 加藤 基成 株式会社豊田自動織機
 小西 圭造 トヨタ自動車労働組合
 小林竜太郎 デンソー労働組合
 酒井 推幾 豊田工機労働組合
 佐宗 晋治 アイシン精機株式会社
 佐々 慎治 トヨタ車体株式会社
 高橋 鉦二 トヨタ自動車株式会社
 竹下太一郎 全トヨタ労働組合連合会
 田中丸 庸 株式会社デンソー
 富田 晃弘 名古屋鉄道労働組合
 中根 陽造 東邦ガス労働組合
 中野 将 豊田市役所
 服部 敦哉 豊田自動織機労働組合
 番条 喜芳 中部電力労働組合
 平野 元章 刈谷市役所
 宮川修一郎 フタバ産業株式会社
 山口 覚 アイシン労働組合
 吉續 武俊 トヨタ車体労働組合
 吉原 昭浩 株式会社松坂屋

第 15 期生 (25 名)

池田 真生 刈谷市役所
 石原 英児 名古屋鉄道労働組合
 海野 孝宏 アイシン精機株式会社
 越田 弘幸 松坂屋労働組合
 大河原宏樹 アラコ株式会社
 大橋 一之 全トヨタ労連組合連合会
 片山 伸子 豊田市役所
 倉沢 範行 中部電力労働組合
 洲崎 浩一 アイシン労働組合
 洲崎 晃嘉 豊田合成労働組合
 千田 路征 トヨタ車体労働組合
 立松 学 トヨタ自動車労働組合
 棚橋 克成 株式会社松坂屋
 奈須 克昭 トヨタ車体株式会社
 野々垣 一 株式会社豊田自動織機
 早矢仕 環 豊田工機労働組合
 原 誠治 アスモ株式会社
 藤牧 知広 中部電力株式会社
 別宮健一郎 丸栄労働組合
 水越 宏明 デンソー労働組合
 山浦 宏行 トヨタホーム株式会社
 山添 勇人 株式会社デンソー
 山本 浩晃 全ユニー労働組合
 吉川 浩二 豊田自動織機労働組合
 吉本 雅教 トヨタ自動車株式会社

第 18 期生

(25 名)

餐場 裕樹 東邦ガス株式会社
 浅井 克弥 丸栄労働組合
 稲垣 隆宏 東邦ガス労働組合
 大倉 吉貴 トヨタ紡織株式会社
 太田 洋純 名鉄労連
 河野 成康 アイシン労働組合
 北原 航太 株式会社東海理化
 金原 昭仁 豊田市役所
 作山 淳 トヨタ自動車株式会社
 佐藤 正樹 松坂屋労働組合
 島田 裕毅 株式会社デンソー
 白井 雅子 アイシン精機株式会社
 鈴木 雅司 トヨタ車体株式会社
 高橋 弘行 中部電力労働組合
 田中栄太郎 デンソー労働組合
 中川 利文 中部電力株式会社
 早川 啓太 刈谷市役所
 平賀 隆 全トヨタ労働組合連合会
 広田 真朗 株式会社豊田自動織機
 藤田 茂徳 丸栄労働組合
 舟橋 史洋 トヨタ車体労働組合
 古川 憲 豊田自動織機労働組合
 水野 栄 豊田合成株式会社
 森谷 東也 トヨタ自動車労働組合
 矢野 悟 フタバ産業株式会社

第 17 期生

(27 名)

荒居 昭治 全ユニー労働組合
 石田 保志 名古屋鉄道労働組合
 井戸田章弘 トヨタ車体労働組合
 岩田 将弘 アイシン精機株式会社
 大澤 秀樹 東邦ガス労働組合
 大橋 俊介 トヨタ自動車株式会社
 加藤 章子 刈谷市役所
 加藤 明人 全トヨタ労働組合連合会
 木村 匡伸 デンソー労働組合
 古賀 博義 アイシン労働組合
 近藤 邦博 豊田市役所
 佐々木澄和 東海理化労働組合
 塩谷 武司 トヨタ紡織株式会社
 志岐 宣浩 豊田工機労働組合
 品川誠二郎 株式会社松坂屋
 田中 光明 アスモ労働組合
 野田 雅子 株式会社豊田自動織機
 長谷川真次 豊田自動織機労働組合
 樋山 卓造 東邦ガス株式会社
 前川 紘子 丸栄労働組合
 益田 寛 トヨタ車体株式会社
 増田 裕介 中部電力株式会社
 松井 正和 松坂屋労働組合
 松本雄一郎 株式会社デンソー
 水谷雄一郎 豊田合成株式会社
 三谷 勝行 トヨタ自動車労働組合
 村井 真一 中部電力労働組合

産 政 塾

2008 年 1 月 第 9 刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

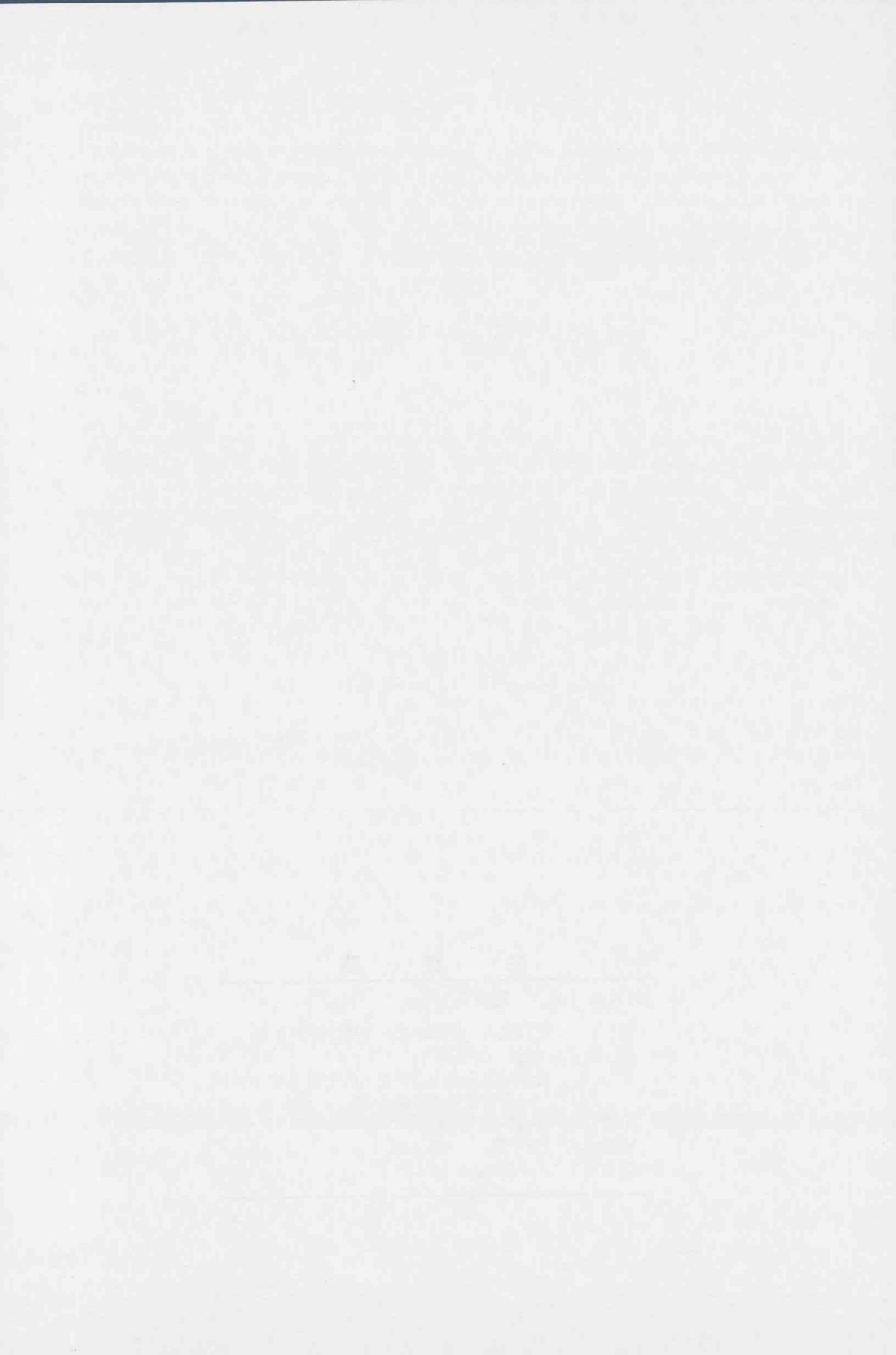
住 所 〒 471-0833

愛知県豊田市山之手 8 丁目 131 番地
全労済豊田会館 3F

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山本製本



塾政産

塾長 東 正元

塾生

東邦ガス株式会社	餐場 裕樹
丸 栄 労働組合	浅井 克弥
東邦ガス労働組合	稲垣 隆宏
トヨタ紡織株式会社	大倉 吉貴
名 鉄 労 連	太田 洋純
アイシン労働組合	河野 成康
株式会社東海理化	北原 航太
豊 田 市 役 所	金原 昭仁
トヨタ自動車株式会社	作山 淳
松坂屋労働組合	佐藤 正樹
株式会社デンソー	島田 裕毅
アイシン精機株式会社	白井 雅子
トヨタ車体株式会社	鈴木 雅司
中部電力労働組合	高橋 弘行
デンソー労働組合	田中 栄太郎
中部電力株式会社	中川 利文
刈 谷 市 役 所	早川 啓太
全トヨタ労働組合連合会	平賀 隆
株式会社豊田自動織機	廣田 真朗
丸 栄 労働組合	藤田 茂徳
トヨタ車体労働組合	舟橋 史洋
豊田自動織機労働組合	古川 憲
豊田合成株式会社	水野 栄
トヨタ自動車労働組合	森谷 東也
フタバ産業株式会社	矢野 悟

中 部 産 政 研 松井 英治